
俺のB L同居人

恭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のBL同居人

【Nコード】

N1326Q

【作者名】

恭

【あらすじ】

俺が引越した先のマンションには男が男に恋するような奴ばかりだった・・・！俺はそこで今までにない経験をすることになる。

*BL注意

メインキャラ

【神谷潤】かみやじゅん

高校1年生。

父母を事故で無くす暗い過去を持っている。
現在は叔父に育てられている。

【笠原理垢】かさほらじく

新社会人。

23歳。

黒髪で一見冷たそうに見えるが、喋るといいお兄さん。
一家の大黒柱的存在。

【桜井徹斗】さくらいてつと

高校2年生。

馬鹿。

嫌い。

だけど友達思いのいい奴。
サッカー部所属の爽やか人間。

【香坂大祐】こうさかだいすけ

大学1年生。

祐介の兄。

いつも徹斗と馬鹿騒ぎをしている。
やるときはちゃんとやる。

こうさかゆうすけ
【香坂祐介】

高校3年生。

和真とは深い関係。

他人のことも自分のことのように考える親切人間。

かみじょうかすま
【上條和真】

大学4年生。

クール。

ポーカーフェイス。

祐介のことを誰よりも大切にしている。

サブキャラ

【衛藤奏】えとうそう

高校1年生。

凧の遊び相手。

大人しめの優しい子。

【柳城凧】やなぎしろむかひ

高校3年生。

凧の兄。

別名帝王。

プレイ魔。

可愛い子なら誰でも食べてしまつド変態。

祐介に特別な感情を抱いている。

【柳城奏】やなぎしみなつめ

高校1年生。

凧の弟。

潤の友達。

容姿端麗・頭脳明晰の文句なし人間。

ただ1つの欠点は究極の面倒くさがり。

【本城宏人】ほんじょうひろひと

社会人。

24歳。

理垢とは子供の頃に出会っていた。

現在潤達の通う学校の臨時講師。

なかなかの変態。

出会い

一ヶ月前、父さんと母さんが死んだ。

原因は全身骨折、内臓破裂、出血多量。

医者がどんなに頑張っても助からないほどの傷を受けた。

捜査の結果、冬の山道でスリップし、崖から落ちたらしい。

発見されたときには既に2人の息はなかったそうだ。

俺は1人、取り残された。

祖父母も兄弟もない。

頼れるのは母さんの兄である叔父さんしかいなかった。

その叔父さんは警視庁のそこそこの地位にあると母さんが言っていたのを覚えている。

叔父さんとはにかく俺に親切にしてくれた。

「なにも心配しなくていい、俺にまかせとけ。」

叔父さんがいなかったら俺は立ち上がることができなかったかもし

れない。

そして、桜が芽吹く春。

俺は中学卒業と共に、叔父さんが薦める近くのマンションに引っ越しすることになった。

もうすでに5人の若い男性が住んでいるらしい。

みんな、叔父さんのような警察や、国会議員、医者など、物凄く高い身分の人たちの息子だそうだ。

そのマンションは定員6人。

6部屋の他に、共同の居間など様々な施設があるらしい。

さすが金持ち。

「金のことなら心配するな。こう見えても俺、結構稼いでるんだぜ。もうすぐ昇進もするしな。それに、同世代のやつらと一緒に居た方がなにかと楽し、第一楽しいだろ？」

少しでも元の元気な俺にもどって欲しいと叔父さんは考えてくれたのだらう。

そんな叔父さんの言葉に後押しされて、俺はせのアパートへ住むことにした。

目の前に上質な、真っ白な建物が見えてきた。
あれがこれから俺が生活する家。

一階が嚴重なセキュリティのかかった玄関とロビー。
二階が居間や様々な施設。
三階と四階に3つずつ部屋。
その上が屋上となっている。

「お。来た来た！」
上で誰かの声がした。

続いてどやどやと人が集まる音が聞こえた。

マンションの二階を仰ぎ見ると、5人の男がいた。
太陽の位置の関係で5人は黒いシルエツトのように見えた。

そのうちの1人が大きな声で俺を呼ぶ。
「お前、早くあがってこいよ！」

「は、はい…。」

どうやら5人は二階の居間に集まっているらしい。

二階に上がり、声のする部屋のドアを開けた。

目に入ってきたのは、真っ白な壁と、高そうな家具や置物がある部屋だった。

「こんにちは…。引越してきた神谷潤かみやじゅんです。よろしくお願ひします。」

濃いめの茶色に染められた髪、耳や指に光る飾り物。

そんな少しチャラそうな人が初めに口を開いた。

「よろしくっ！俺は徹斗てつと。徹てつとって呼んで！。17歳の高校2年生です。仲良くしようぜ！」

そう言っつて徹がにっつと笑った。

さっき俺を呼んだのはこいつらしい。

笑うと意外と子供らしい顔になる。

そんな徹の顔に少しどきつとした自分がいた。

「こんにちは。僕は理垢りく。去年大学卒業したけど、ここの生活が楽しくてね、まだ住んでるんだ。宜しく。」

漆黒の髪が目の前ではらりと揺れる。切れ長の綺麗な目をした人だ

った。

次に口を開いたのは、見るからに優しそうで端正な顔立ちをしている人だった。

「こんにちは。俺の名前は^{だいすけ}大祐。大学1年だよ。宜しくね。」

「はい！大祐の弟の祐介^{ゆうすけ}です！高3だよ！。よろしく！」
子犬。真っ先に浮かんだ。元気そうな感じ。端正な顔立ちが大祐に似ている。

そして最後に、クールで美形な人が口を開く。

「^{かずま}和真。大学四年。よろしく。」
口数の少ないようだが、嫌な雰囲気ではない。

そんな和真を見て祐介が黄色い声をあげる。

祐「和クールー！！やっぱり和、格好いいー！好きー！！大好き！」

祐介が和真に抱きつく。

そんな祐介を和真が受けとめて言う。

「…俺も。」

そんなイチャイチャする2人を遮るように理垢が慌てて間に割り込む。

「はいはいはい！お前ら潤の前でいきなりイチャつくなよ。驚いちやうだろ？」

「ごめんなー。驚かないでほしいんだけど、こいつらできてんだよ。」

「そう言っ大祐がクイと2人を指す。」

祐介の兄である大祐はこのことは黙認しているらしい。

あまりの過激な展開に焦る潤。

「え！？あ！それは…。そうですか…。」

そんな潤を見て徹斗が呆れたように言う。

「あーあ、潤引いちゃってんじゃない？」

「あ、えっ、いや！そ、そんなこと無いです…！」
実際そんなことあるけどさ。

ひとまず会話が落ち着いた所で理垢が口を開いた。

「じゃ、潤を部屋へ案内してくるよ。祐介と和真、夕飯の買い出し、よろしく。」

「らじゃっ…！」

祐介は買い物ついでに和真とデートができるので嬉しそうだ。

案内された部屋は三階の真ん中の部屋で、住み心地が良さそうで気に入った。

因みに左隣は徹斗で右隣は理垢の部屋、四階のちょうど俺の上は祐介で、その左隣は大祐、右隣は和真である。

祐介は大好きな和真と隣の部屋でさぞかし嬉だろっなあとか思った。

部屋には階ごとに、隣と繋がっているベランダとその左端には階段

が付いていて、上下自由に移動できる。

外の景色が楽しめる、最高の場所だ。

部屋の説明をしてもらったあと、2人はベランダに出た。

「気に入ったかい？因みに、隣の部屋は僕だから、わからないことあったらいつでもおいで。」

「はい、ありがとうございます。」

そよそよと春の心地よい風が吹く。

「…ごめんね？」

理垢が唐突に口を開く。

「え？」

「さっきのこと。」

「ああ…。」

祐介と和真が付き合っているという話。

俗に言う、ボーイズラブってやつ？

まさかこの目で見ることになるとは…。

「いえ、気にしてませんよ…。」

なんだか少し恥ずかしくて伏し目がちに潤が言う。

そんな潤の目を理垢の綺麗な瞳が覗き込む。

「…本当に？」

覗き込まれた綺麗な目に胸がどくと波打った気がした。

「無理しないでね。」

ぽんつと理垢の大きな手が潤の頭に置かれる。

「祐介と和真が帰ってきたら夕飯にするから。今日は潤が来たからパーティーだ。じゃ、後でまた居間においでね。」
そう言い残し、理垢が部屋を出て行った。

潤は1人ベランダに残り、夕焼けの空を眺めていた。

俺、なんかすごいところに引越しちゃったかな…。

…確かにみんな美形だし、かつこいいし…。

…だからって男が男を愛せるもんなのかな…。

どれくらい経っただろうか。

向こうの道路から祐介と和真が歩いてくる姿が見えた。

手を繋いで楽しそうに歩いてくる。

幸せそうな笑顔。

そんな2人の顔を見ると、愛には性別なんて関係ないのかな…
とか感じてしまう。

「あ。」

和真が3階にいる潤に気づく。

「え？あ！じゅーんー！」

祐介の明るい声が届く。

下から2人が見上げてくる。

「ごーも。」

とりあえず愛想よく返事をしておく。

「今日はホラ！鍋パーティー！」

「鍋…ですか？」

春なのに…鍋？

「こいつ、季節外れなのに、鍋がいって。和真が笑う。」

笑ってもそのクールな顔はくずれない。

「いーじゃんいーじゃん。それよか潤、今から夕飯準備だから居間行っててね。」

「わかりました。」

居間には、夕食の準備をしている理垢と、ゲームに熱中している徹斗と大祐の姿があった。

「あ、潤、手伝ってくれる？悪いけど。」

「いいですよ。」

いそいそと準備を手伝い始める。

そこに、祐介と和真が帰ってきた。

「ただいまあ！」

「おかえり。ご苦労様ー。じゃあ、夕飯にしようか。」

「いえーい！」

祐介が喜ぶ顔を見て微笑む和真。

本当にこの2人は好き合っているんだなあ…。

「げー。また鍋!？」

いつのまにやらこつちに来た、祐介の兄である大祐がげんなりと言
う。

「パーティーとかみんなで食べるときは鍋をつつくのがいいんじゃない
ん！」

「だからってお前!いつもいつも」

「はーいーはーい!兄弟喧嘩はやめてくださいよっ」

徹斗が後ろから大祐に抱きつき諫める。

そんな中黙々と夕飯準備をしていた理垢からご飯ができたと言われ、
みんなでテーブルを囲い、楽しい夕食の時間を過ごした。

鍋がもうすぐ空になるというところで、祐介がまたも爆弾発言をし
た。

「和!一緒に風呂、入る?」

「ああ、別にいい」

「ダメです。」

きばと理垢にダメ出しされる2人。

その横で大祐がうんうんと頷き言う。

「2人で風呂入ると、軽く3時間くらい入ってるよね?全く…何を
しているのやら…」

皮肉で言ったのに徹斗がマジで答える。

「え？なにつてアレだろ？お風呂エツ」

「言つなバカ！」

ぺしつと大祐が徹斗の頭を叩く。

「つてえな！なにするんだよっ！」

「お前が悪いんだろー。」

大祐と徹斗がまた遊び始める。この2人、仲良いんだなあ。

ふつつの意味で。

「じゃ、先に入る。」

和真が席を立つ。

「うう…和う…。」

祐介が目をうるうるさせ和真を見つめる。

「じゃあ今日、一緒寝る？」

和真の言葉にぱつと顔を輝かせる祐介の頭を撫で、和真は部屋を出て行った。

はあ、と理垢が諦めのため息を吐く。

「じゅーんー！ゲームしようぜー！」

いつのまにやら居間の奥へ行っていた徹斗と大祐の声が響く。

「徹斗！大祐！お前らゲームしすぎだぞ。何時間やってんだ！？というか、少しはこつちを手伝え！！」

食後の片付けをしていた里垢から2人に怒号が飛ぶ。

「きゃあーごめんなさい！」

大祐のふざけた声もする。

「さっさと風呂入って寝る！」

理垢さん、お母さんみたい。

「だって風呂、まだ和が入ってるしー。あ。一緒に入ってくるか！
？意外と広いから3人くらい行けんじゃね!？」

大祐が面白半分で言う。

そんな大祐の言葉に徹斗が乗らないはずがない。

「僕も行くー！」

傍で話を聞いていた祐介も手をあげる。

「はあ…。行ってらっしゃい。」

理垢がまたも諦めの溜め息をついた。

その横を3人がばたばたと出て行く。

出て行く間際、徹斗が喜々として口を開く。

「潤も行くか!?風呂。」

「ばか、風呂が壊れんだろーが。潤は俺と入るからいーの。」

「あれれ?理垢さんまさか?潤のこと狙ってる?」

ケケケと徹斗が笑い、からかう。

「勝手に言ってる。」

理垢がしれっと返す。

「じゃ!潤、ガンバ！」

「えええええ!な、何を…。」

潤の声は徹斗には届いていなかった。

俺はどうしたらいいのかわからなくて隅のソファに座り、理垢さ

んをチラッと見た。

片付けを終え、コーヒー片手に本を読んでいた理垢さんが俺の視線に気づいたのか、こちらを見る。

目が合ってしまった、焦る。

この人は一体何を考えているんだ。

「あ、あの…っ。さっきの…。」

「ん？ああ、冗談だよ。」

理垢さんが笑いながら答える。

「ですよね…。」

ははっと苦笑い。

理垢さんが席を立ち、俺の横に座る。

ち、近づ…。

内心想ったけど、なにもいわないでおいた。

里垢さんが俺の目を覗き込む。

この人の目は、一度見つめられると目が離せなくなる。
不思議だ。

「…潤が入りたいなら一緒に入ってもいいけど？」

「!？」

この人、まじで言ってるの？

「え、や、俺一人で入ります!」

「……。そつ。」

何？今の間。

「じゃあ僕、部屋に行くから、先にお風呂入って。上がったら部屋に知らせにきてもらっても良いかな？」

「わ、わかりました！」

理垢さんが居なくなり、1人になった居間で俺はもんもんと悩む羽目になった。

俺はこれからどうしたらいいのだろう…。

そのころ。風呂場は戦場と化していた。

「おらおら！喰らえい！！！」

徹斗の手に握られた水鉄砲から発射された水が大祐に向かって勢い良く噴射される。

「ちょ！タイムタイム！！目に水入った！」

「大祐！タイムなんてものはないって言ってただろ！？前！」

「言ってるねーよ！」

まるで小学生のように騒ぐ2人を傍観する和真と祐介。

「今日も凄い暴れようだね……。」

「元氣すぎるんだよ。」

徹斗と大祐が暴れるせいで、4人では少し狭い風呂の中の水はざぶざぶと荒れていた。

「……俺達も暴れるか？ベッドで。」

「……っ……！」

和真の言葉に頬を赤らめた祐介を連れて和真が風呂をあがる。

そんな2人に目ざとく徹斗と大祐が気づく。

「もーあがんのかよお前らー。」

「水鉄砲もう2つあるぜ!？」

「結構だ。」

和真がチラと振り返り言う。

「なんだよーノリ悪いなあ。つて！不意打ち禁止だぞ大祐！」

「ポーっとしてるお前が悪い！」

再び始まる騒ぎに背を向け和真と祐介は風呂を後にした。

風呂を上がった2人は和真の部屋にいた。

「……祐……。」

和真が祐介の手首を掴み、そのままベッドへ押し倒す。

「……っ……和……っ……！」

そんな2人の声は闇へ溶けていった。

好き以上愛してる未満

引っ越してから一週間が経ち、ようやくこの生活にも慣れてきた。

みんな年こそ違うけど、とても親切だし、優しい。

一ヶ月前のあの事故での虚無感がほんの少しずつだけど、消えていく気がした。

学校が始まってから3日が経った。

それなりに馴染んで、上手くやっている。

空が夕日に染まっていく。

みんな各々が会社や大学、高校から帰る時間。

今日も俺は、徹と祐介と同じ高校なので一緒に帰っていた。

「最近さあ、なーんか理垢さん、様子おかしくね？」
現在2年の徹が唐突に話し出す。

「うーん。言われてみればそんな気がしなくもないなあ。」
今年受験生の祐介が答える。

「潤、なんか知らね？」
話を振られた潤の肩がびくつと跳ねるのを2人は見逃さなかった。

「お、なんか知ってたんだな!？」
興味津々の2人。

「え、いや…。その…。」
あんなこと言えねーよ!と内心で困る。

「なになに?言ってみ?」
「言えませーん…。」
「なんで?」
「なんでもっ!」
そう言っつてマンションへ向かって走る。

「ちよっ…!潤待てえええ!」
徹がふざけて追いかけてくる。とにかく窮地は脱出できたかな。
ほっと胸をなでおろす。

あんなこと誰にも言えないし、第一、俺の思い違いつてもある

し…。

このときの俺には、心の底では思い違いではないことくらいわかってたのかもしれない。

マンションには既に大学生の大祐と和真、そして社会人の理垢が帰っていて、珍しく大祐と和真の2人が夕飯を作っていた。

「ただいま。」

と、俺。

3人がおかえりと言ってくれる。

理垢さんの顔は、見れない。

目が合うとどうしていいかわからなくなるから…。

少し遅れて徹斗が入ってくる。「ただいまっ！」

「おかえりー。」

「あれ。珍しいこともあるもんだねー。それちゃんと食べねんの？」
徹斗がふざける。

「食えんに決まってるだろーが。」
と、大祐。

年が離れてるくせに相変わらず仲がいい。

「た、ただいま…。」

息を切らし、祐介が入ってくる。

「ちよ……。お前ら、足速すぎ……。」

「体力ねえなあ。」

徹斗が若干呆れたように言う。

「おかえり、祐。大丈夫？」

和真が愛しの祐介に声をかける。

「大丈夫っ！」

和真の腕の中に飛び込む祐介。

俺はこの2人のイチャコラ振りには少し免疫がついた。

いつもの通り、夕食はみんなで食べた。

朝は、時間のある大学生の大祐と和真がなかなか起きてこないの
残りの4人で食べるのである。

「明日休みだけど、みんななにする予定？」

夕食を食べながら理垢がみんなに聞く。

「あ、俺明日部活行かなきゃなんだよねー。」
と徹。

「俺友達の家遊びに行く。」
と大祐。

「潤は？」

「俺は…、墓参りに行ってきます。」

「墓参り…？」

誰の？というような顔がこちらを見た。

このことはみんなにまだ話してなかった。

暗くなっちゃうし。

「…じゃあ僕、潤のお供しようかなあ。特に用事ないし。」

理垢が言う。

「え…。」

「だめかな？」

「や、いいですけど。」

そんな風に言われたら断れるわけがない。

「じゃ、決まり。」

にこつと理垢が笑う。

「で、そこのお二人さんはどーすんの？」

と徹が聞く。

「せっかくみんないないなら、和と一緒に家にいようかな？」

「俺もそれがいい。」

この2人がなにをするのかは考えないでおこう…。

そして次の日。

徹斗と大祐と一緒に家を出た。俺と理垢さんはそのあとしばらくしてから家を出た。

空は気持ちよく晴れている。

花屋に立ち寄り、お供え用の花を買う。

墓までは歩いて30分くらい。

墓が近くなっていくにつれて俺は口数が少なくなってしまっ

た。なぜか、俺は父さんと母さんが死んでから、一度も涙を流していなかった。

泣いて悲しみと別れたかった。
でも涙がでない。

心の中ではこんなにも泣いているのに。

「…大丈夫？」

そんな俺の様子を察したのか、理垢さんが心配してくれる。

この人はよく他人に気遣う。

本当に優しい人なんだと思う。

墓場が見えた。

父さんと母さんの墓を探す。

「…あれ、家の墓…。」

理垢さんに教える。

花と線香を備える。

「理垢さん、俺、まだ泣いてないんだ…。2人が死んでから。」

墓に記してある名前を見て、理垢が言う。

「2人つて…、まさか、ご両親…だったの…？」

「…はい。」

朝の謎が解けた。

「涙で悲しみを流せないのはとても辛いことだけど、大丈夫だよ…。」

潤はまだ15歳。

兄弟は居ないと引越してきた日のパーティーで聞いた。
支えてくれる人が居なくなった潤は今、どれだけ辛いのだろう。

「潤……。」

理垢が潤を抱きしめた。

「辛かったね……。」

「うっ……っ。」

嗚咽おえつが口から漏れる。

ようやくわかった、涙が流れなかった理由。

「もう我慢しなくていいんだよ。僕と一緒に居てあげる……。」
俺はそんな理垢さんの優しく囁く声を聞きながら、泣いた。

やっと流せた涙。

それと一緒に孤独や不安も流れていく。

俺が今まで泣けなかった理由。それは、きっと俺は”誰か”という、
俺の悲しみを受け止めてくれる存在が欲しかったからなのだろう。

俺は安心が欲しかったのだ……。

俺は理垢さんの胸の中で泣きつづけた。

そのまま泣き疲れて俺は意識を手放した。

気が付くと俺はベッドにいた。
上半身だけ体を起こし、当たりを見渡す。

「あれ…俺…。」

横を見ると隣で理垢さんが寝ていた。
ベッドはキングサイズ。
2人なら余裕で寝られる。

俺なんでこんなところ居るの？
ここはどこ？

なんで隣で…理垢さんが…寝てるの…？

もぞもぞと理垢さんが寝返りをうち、こっちへ顔をむけた。

恐る恐る理垢さんをゆさゆさと揺すって起こす。

「り、理垢さん…？」

「…んー…。」

理垢さんがつつすらと目をあける。

「潤…。大丈夫…？」

「え、わっ…！」

急に里垢さんに腕を掴まれ引き寄せられる。

「潤…。」

理垢さんの手が俺の髪を撫でる。

目の前は理垢さんの服しか見えない。

「え、あの…理垢さん…。」

「…愛してる。」

突然放たれた言葉。

驚くことしかできない俺。

寝ぼけてるかと思ったけど、理垢の瞳はしっかりと俺を捉えていた。

「あの…。俺は…。」

「いいよ。」

「え？」

「愛してくれなくても、友達として俺を好きで居てくれるなら、それだけでいいんだ…。」

理垢さんの声が頭の上から聞こえてくる。

顔は見えないけど、わかる。

理垢さんを悲しませてしまったこと。

「ごめんなさい…。」

理垢さんは気にするなと言うように俺の頭をポンポンと叩いた。

俺と理垢さんは互いに触れあったまま、もう一度眠りへ落ちた。

再び目が覚めると、外は薄暗くなってきていた。

理垢さんは既に起きていて、ルームサービスのコーヒーを飲んでいた。

「おはよ。」

「おはようございます。」

おはようと言っても、既に空には星が輝いている。

互いの気持ちが変わったから今、今までのぎくしゃくした関係は無い。

「お腹すいた？なんかとる？」

理垢さんがルームサービスのメニューを差し出す。

「いや、食べ物の良いですけど、こっ、どこですか？」
「すごい高そうな部屋…。」

「ここは僕のお父さんがオーナーしてるホテルの一個だよ。」

「へえ…。」

俺にはわからない、金持ちの世界。

「さすがに潤を抱っこして家までは帰れないから、ここに寄ったんだ。」

どうやら泣き疲れて眠ってしまった俺を抱えてここまで連れてきてくれたらしい。

本当に理垢さんには申し訳なさでいっばいだ…。

「すみません…。ありがとうございます。」

「じゃあそろそろ帰ろうか？」

「はい。」

帰り道、理垢さんと俺が並んで歩いていると、後ろから呼ばれる声が聞こえた。
振り向く。

「うおーいーりーくー！じゅーんー！」

徹斗の声。

こいつはいつでもこんなに元気なのだろうか…。

呆れるほどの馬鹿でかい声。

「今部活終わったの？ずいぶん遅いだね。」
と、俺。

潤はサッカー部に所属している。

いつでもエネルギー有り余る徹にはすごく合ってると思う。

「またいつもの？」
と理垢さん。

「そーもーやんなっちゃうよなー。」
徹が珍しくため息を吐く。

「いつものって何？」

「あ、潤は知らなかったな。このこと。」

「うん。」

「…理垢。潤に教えてやって。俺、言いたくない…。」

「はいはい。言うと思ったよ。あのね、潤。徹斗って、こー見えて結構モテるんだよ。」

「うん。」

性格に若干問題あるが、徹斗がモテるのはなんかわかる。

「でも、モテるって言っても、女の子だけじゃないんだよね。」

「うえ!？」

「潤も気をつけた方がいいぜ…。潤みたいタイプが好きなら、ぜってー多いって。お前結構可愛い顔してるもん。」

げんなりした顔で徹が忠告。

「でね、いつも部活が終わった後に騒がれちゃうんだよね。写真撮られたり、告白されたり。で、なかなか帰れない。みたいな。」

「大変だね…。」
「ほんと困るぜー。かんわいい女の子ならまだしも、男だなんて…。
この学校ぜってーホモ多いって!」
「あはははは。」

その後俺達は世間話をしながら楽しくマンションへと帰って行った。

俺には無縁だと思っていたこの話。

しかし、入学早々、とんだ学園生活が俺を待ち受けていることなど
今の俺には想像もできなかつた。

悪魔のkiss

最近、アイツ等の視線を感じる。

「潤、なんだか最近騒がれちゃってるねえ。」
「徹が哀れみ半分、面白半分の調子で言う。」

「俺、またいつか襲われるんじゃない。アイツに。」
「少しは覚悟しといたほうがいいかもね。綺麗な顔のヤツは。」
「にやにやとした徹の表情がムカつく。」

事の発端は昨日の放課後。

俺はいつも徹と祐介と帰っている。

今日は徹がサッカー部、祐介は受験へ向けての講座。
部活に入っていない1年の俺は、二人を待つ間、人気の無い学校の図書室で暇を持て余していた。

そろそろ待ち合わせ場所の玄関へ行こうかと考えていると、
図書室

の外で誰課複数の男の揉み合う音が聞こえた。
喧嘩…ではなさそうだ。

「…っ！やめてよっ…！」

「オラ！おとなしくしろ！」

「もうっ、もう嫌だ…！！！」

「あんまり暴れるとイターイことしちゃうよ？」

「っ…！この間で最後だつて言ったじゃないか…！」

「そんなこと言ったか？なあ？」

「さあー？初耳だな。」

「…！」

そんな会話を聞いた俺は、やばいと思った。

ここにいたら絶対巻き込まれる…。

俺は咄嗟に本棚の影に身を隠した。

片目だけ出してこっそりと男たちをのぞき見る。

そこにいたのは、4人の男。

1人は女みために綺麗な顔をした男子学生。

さつき嫌がっていたのはおそらくこの人だろう。

なぜなら、他の3人はこの学校で通称『帝王』とその帝王の『右腕』と『左腕』と呼ばれている男だったからだ。

『帝王』は、いかにも女子喜びそうな整った顔の持ち主。
実際男女共に、もの凄くモテるらしい。

成績優秀、容姿端麗な才色兼備の金持ち。
何も言うことが無い、模範的な良い生徒。

そこまではいい。

『帝王』の本当の顔。

それは、綺麗な顔の男とアソブこと。

『帝王』は自分が気に入った、本当に綺麗な顔の男としか遊ばないらしいぜ。

『帝王』は目をつけたやつとは必ず1回は遊ばないと気がすまないらしい。

『帝王』に捕まるとかなりヤバイらしいよ。

『帝王』はこの学校のアノヒトの他にも他校にもアソブ人がいるらしいよ。

『帝王』から逃げれたやつは今のところ誰もいない。

所詮は『帝王』のお遊びさ。

この高校の男子の間に流れる噂。

大抵の男子には無関係な話。

極わずかの男子には死活問題。

まあ、そーゆー趣味があヤツならいいだろうけど。

『左腕』が図書室の鍵を閉める。

『右腕』と『帝王』は男を奥にある大きめのソファへ連れて行く。

男はもう抵抗していなかった。

そんな様子に、『右腕』と『左腕』は2人を残し隣の司書室へと姿を消した。

『帝王』と男の声だけが俺の耳へと届いてくる。

「奏、^{そつ}久々に俺とできて嬉しいだろう？」

「…んなわけあるか！」

「じゃあなんで顔、赤いの？」

「…っ…！」

「やっぱりしてほしかったんだね…。」

「っ違…っ…！あ…っ…！」

「素直じゃねえなあ…。」

「ん…っ…。」

俺は限界だった。

早く図書室から出たかった。

奥にいる2人にはれないようにこっそり本棚の間を縫って脱出を試みる。

そっと鍵を開けたつもりが、閑散とした図書室にカチャリという音が響く。

「…！？誰だ？」

『帝王』の声が奥から聞こえる。

それに続いて司書室から『右腕』と『左腕』が出てくる。

絶体絶命。

俺は『右腕』と『左腕』に捕まってしまったのだ。

こうなったらあとは『帝王』に気に入られないのを願うしかない。

しかしそんな俺の頭の中には、俺の家であるマンションの住人たちの言葉が頭の中をぐるぐると回っていた。

「潤って、かつこいいというよりはかわいいだね！」

これは大祐だ。

「超綺麗な顔してるぅー。羨ましい〜。ね！和もそう思うでしょ？」

これは大祐の弟の祐介。

「そうだな。綺麗だ。」

祐介の恋人である和真が答える。

「潤！俺の嫁さんになれ！」

「ばか。徹斗には潤はもつたない。」

これは徹と理垢。

どうかみんなの見間違いでありますように…。

そんなことを頭の中で考えていた俺は気づくと『帝王』の前に連れて行かれていた。

その隣にはさっきの男、奏が座っていた。

俺と目が合つと気まずそうに目をそらした。

「へえ…。」

「…。」

「君、1年生？名前は？」

「…潤…。」

黙っているわけにもいかず、答える。

「潤君、ね。君なかなか可愛い顔してるね。」

「…!」

やばい…。

「一緒に遊びたいとこだけど、今日は奏がいるから…。また今度、アソボ？潤君。」

「…っ!し、失礼します…!」

俺は慌てて図書室から逃げ出した。

どんっ。

誰かとぶつかる。

「潤？」

この声…、徹だ…。

「う…、徹…！」

俺はいても立ってもいられなくなって徹に抱きついた。

「え！何！？俺そーゆー趣味ないよ！？どうした？
いつもと違う俺の様子に徹が慌てる。

「う…。あとで相談にのって…。」

「良いけどさ、だいじょぶか？」

「…だめかも…。」

「とりあえず帰るぞ。祐介が玄関で待ってる。」

俺は徹に体半分支えられ帰路に着いた。

「で？相談ってなに？」

夕食後、俺と徹は部屋が隣同士なので、その間くらいのところでベランダに出ていた。

このマンションのベランダは隣の部屋との仕切りが無いのだ。

「今日の放課後…。」

俺は徹に今日の事件について話をした。

話を聞き終わった徹は難しそうな顔をした。

「潤、お前、完全に『帝王』に目えつけられちったな。」

「…どうしよう。」

「一応聞くけどさ、潤ってそーゆー趣味ないんだよね？」

「ないよっ！」

俺にそんな、男が好きになるようなことはない。

俺はふと、ある質問が頭の中で浮かんだ。

「なんで徹と祐介は目、つけられないの？」

「は？」

徹が驚いた顔をする。

「だって、徹、学校でモテるんでしょ？」

以前、理垢と徹と3人で帰っているときに聞いた話だ。

「いやー、なんちゅーか自分で言うのもなんだけど、俺、かつこいいらしいけど、『帝王』は攻めだから受けは可愛い子がいらしいよ。」

「じゃあ祐介は？」

祐介はかつこいというより可愛い、だろう。

「ああ、祐介も入学したときに目えつけられたんだけど、たまたま『帝王』と和真が知り合いでさ。んでそのこと知った和真が黙っているはずも無く、『帝王』を言いくるめたらしいよ。和真ってああ見えて、結構怖いこと言うからね。」

「そうなんだ…。」

大好きな和真に助けられて、祐介は幸せだったろうなあ、と思った。

「そんなことより！潤、これからどーするよ？」

「どうしよう…。明日から学校行きたくないよう。」
「とりあえず、明日学校行けば休みだから明日1日は捕まらないようにしろ。放課後は俺、部活休むから一緒に帰ろう。」
「え、いいの?」
「いって!大事なダチのためだもんな!」
「ありがとう…。」

次の日、俺は徹の言うとおり、目立たないように行動していた。

休み時間に視線を感じたが無視。
目合ったら絶対やばい。

そして放課後、徹が教室まで迎えに来てくれ、一緒に帰った。

「徹、今日は本当にありがとう!」
「おう!」

とりあえず今日は助かった。
徹のおかげだ。

もうすぐ深夜になるうかというころ、俺の部屋の戸がノックされた。

誰だろう。こんな時間に。

不審に思いながらもドアを開ける。

「ごめん、こんな時間に。」

そこにいたのは、俺の部屋の、徹とは逆隣の理垢だった。

「理垢さん…。どうしたの？こんな時間に。」

「いや、ちょっと話したいことあって。もう寝る？」

「ううん。いいよ。入って。」

「悪いね。」

俺は理垢さんを入れた。

「潤…、最近なんか嫌なことでもあった？」

「え？」

この人には嘘は押し通せない。

わかっていた。

いつかばれることくらい。

俺を、愛してる、'と言った理垢さんにあの事件のことを話せば心配するだろうと思っただ俺は、徹にしか事件のことは話していない。それに、このことを話せば理垢さんが少なからず傷つくことがわかってた。

なぜなら俺は男を愛さないことが、また理垢さんを傷つけるから。

「最近、元気ないし、あんまりご飯も食べないし…。」

「大丈夫ですよ。」

無理に作り笑いをする。

俺を大事に思ってくれている人に隠し事をするのは心苦しい。

「明日2人で美味しいものでも食べに行こうか。食べないと元気でないよ。」

「え、でも…。理垢さん迷惑でしょ？俺のためにわざわざ…。」

「潤。」

理垢さんがずいと顔を俺に近づける。

「前に言ったでしょ、愛してるって。この言葉のせいで潤に迷惑をかけているのは僕だってわかってるよ。それに、返事をもらおうとかそういうわけで言ったんじゃないんだ。ただ僕の気持ちを知って欲しかっただけだよ。」

理垢さんの悲しそうな顔が俺の心をえぐる。

「だけど、これだけは忘れないで。僕は潤のためなら迷惑なんて言葉はないんだよ。」

「理垢さん…。」

理垢さんの気持ちに応えられない自分。

そんな自分が少し嫌になる。

「じゃあ明日、一緒に行こう？」

「うん。」

おやすみと言って理垢さんは隣の自分の部屋へ帰っていった。

次の日、俺と理垢さんは映画館や美術館など様々なところで遊んだ。理垢さんはなにかと俺に気遣ってくれた。

しかし、そんな楽しい雰囲気をぶち壊すようなことが起こった。

それは空に星が輝き出す頃、俺と理垢さんは最後に夕食を食べるときに起こった。

「レストランはどこでもいい？苦手なのとかある？」

「特に無いよ。理垢さんにお任せします！」

「じゃあ最近できた ヴェルモント Vermouth^{ヴェルモント} って店でいい？」

「あれ？そのお店って確か三ツ星の…。」
「そう。」
「た、高いんじゃない？」
「いいよ、僕おごるから。」
「いやいやいや！悪いからいいって！」
「誘ったのは僕なんだからいいでしょ？」
「うっ…。」

浮かない俺の顔を見て、理垢さんが提案。

「じゃあこれからずっと、朝ごはんと夕ご飯の準備手伝って？それならいいでしょ？」
「え、そんなんでいいの？易すぎない？」
「これが以外と大変なんだよー。」
「…。わかりました！手伝うよ。」
「じゃ、決まり。」

その店は新しくできた上に三ツ星だということまで物凄い煌びやかな内装だった。

俺には未知の世界。

ウェイターなんか、オールバックにスーツのいかにも、って感じで緊張する。

そんな俺にまたまた気遣ってくれたのであろう、理垢さんが個室を取ってくれた。

「なんでも好きなの頼んでね。」
「うー、聞いたこと無い食べ物ばかり…。」

俺は結局、見たことも聞いたことも無い食べ物を頼んでみた。
見た目は超が限りなくつくほど豪華。
なかなか美味い。

そんな楽しい時間を割くように、理垢さんの携帯が震える。

「あ、ちよつとごめん…。上司からだ…。こんなときに…。もしもし？」

理垢さんが席を外す。

理垢さんは大手企業の重要プロジェクトの担当者になったと言っていた。
これが成功すれば昇進できるらしい。

最も、理垢さんのお父さんは警視総監のお偉いさんだから働く必要もないが、働かないと人間堕落する、と理垢さんが言っていたのを覚えている。

休みの日も仕事なんて大変だなあ…。

そんなことをぼやぼやと考えている俺に最悪な事態が起こった。

「あれー？もしかして潤？」

振り返ると個室のドアが半分ほど開いていた。

そこには、まさかの『帝王』の姿が。

「あ、やっぱり潤君だ。さっき潤君と誰かがここに入ってくの見かけたんだ。」

「そ、そうですか…。」

「あれ？一緒に来た人は？」

「今は…席をはずしてますけど…。」

「ふーん。」

興味が無いというように『帝王』が言う。

「じゃあチャンスかな？」

「え？」

どんと壁に押し付けられる。

俺が押し付けられた壁に『帝王』が両手を着く。

顔の横には『帝王』の腕。

逃げられない…。

それにしてもこの体制だと顔が近い…。

俺は顔を横に背け、少しでも『帝王』から離れるようにした。

「ねえ潤君、俺と今夜あそばない？」

「…っ！結構ですっ…！」

「どうして？楽しいことしようよ。」

「俺にそんな趣味は無い！」

「…。俺は目をつけたコは絶対逃がしたくない性質たむなんだよね。」

「…！」

「潤君は今まで遊んできたどのコよりも可愛い子だよ。」

『帝王』の手が俺の腰にまわる。

「っ！触るな…！」

「ふふっ、怒った顔もかわいいね。」

『帝王』が俺をぐいぐい引っ張っていく。

『帝王』はしなやかな体をしている割に力が強かった。それに比べて俺は別に運動ができるわけでもない。

力の差は目に見えていた。

『帝王』が俺を個室の外へと連れ出す。

見るからに怪しい俺たちだったのに、レストランのスタッフ達は見て見ぬ振り。

なんで…？

「潤君、知ってた？このレストランは家が経営してるレストランの1つなんだよ。」

だからか…。

スタッフは『帝王』がこちらのオーナーの息子であることは百も承知なのだ。

オーナーの息子に口出しなんてできるはず無い。

「潤！？」

電話を終えた理垢が戻ってきた。

俺と『帝王』の様子を見て戸惑った顔がうかがえた。

「り、理垢さん！助けて…。」

「お前、その腕を放せ。」

「なんで？つか、あんた誰？」

『帝王』が面倒くさそうに言う。

「潤は俺の連れだ。放せ。」

「やーだ。潤君は今夜俺と遊ぶの。ね？」

「そんなこと誰も言っただろ…んっ！！」

反論しようとして『帝王』の顔を見上げた俺の口は、気づくと『帝王』の唇で塞がれていた。

「んー！…っはあ！なにすんだお前！」

無理やり顔をずらして外す。

気持ち悪い。

ファーストキスがまさかこいつだなんて…！

「言うこと聞かない潤君が悪いんだよ？」

悪気が無いように『帝王』が言う。

「お前…潤になんてことを…。」

気づいたら理垢さんが『帝王』の胸倉を掴んでいた。

「どこの誰だか知らないけどさあ、あんた、俺にこんなことしてただで済むと思っただろ？俺、大企業の御曹司だよ？あんたを潰すことくらい簡単なんだよ？」

『帝王』が理垢さんを脅す。

「お言葉だけど。僕も君を漬すことくらい簡単なんだよね。きっと君よりもずつと簡単。」

「はあ？」

「理由聞きたい？」

「…。」

「僕のお父様はね、警察のお偉い方なんだよ？その気になればセクハラ罪で訴えてもいいんだけど。」

「っ!？」

『帝王』の顔が驚きで歪む。

まさかここで警察が出てくるとは思わなかったのだろう。

「わかつたらもう二度と潤に手ださないでね。」

理垢さんがぱつと『帝王』の服を離す。

『帝王』は何も言わず去っていった。

受けた屈辱と潤を手に入れられなかったもどかしさを埋めるために今夜も誰かが『帝王』の餌食になるのだろう。

「潤…、大丈夫？」

「理垢さん、ありがとう…。助けてくれて。」

「大事な潤を守れて良かったよ。」

「理垢さん…。」

理垢さんは今なにを思っているのだろう。

自分の好きな相手の唇をあんな男に奪われた。

そして俺は、いつも理垢さんに迷惑をかけている。

俺と出会ったせいで、理垢さんはどれだけ傷ついたのでだろう。

俺はこの人の側にいいのだろうか？

「潤？」

理垢さんが俺の様子がおかしいことに気づいた。

「理垢さん…。」

「ん？」

「俺…、俺は、理垢さんの側にいてもいいんですか？」

「え？」

「俺のせいで理垢さんはいっぱい傷ついた。俺がいなければ傷つかなかったのに…！」

気づいたら俺は泣いていた。

そんな俺の様子に理垢が驚く。

「潤。どうしたの？なんでそんなこと言い出すの…。」

「だ、だって…っ！」

そんな俺の涙で濡れた顔を理垢さんの暖かな両手が包む。

「潤、そんな悲しいこと言わないで。僕は潤といるだけで楽しいし、これからもずっと一緒にいて欲しい。」

「そんなの嘘だよ…。俺といると理垢さんはきつともっとぼろぼろになっちゃっ。」

「ならないよ。でも、今潤がいなくなったらなっちゃっかも。」

「理垢さん…、でも俺は。」

「いいの。僕の気持ちに伝えられないとかそんなこと考えてるんでしょっ。」

「う…。」

図星。

「潤、僕は、本当の恋っていうのは自分よりも自分の好きな人のことを一番に考えることだと思ってる。たとえ自分が報われなくてもね…。」

「…。ごめんなさい…。」

理垢さんがふふつと笑う。

「謝られるより、これかも側にいるって約束して欲しい。」
理垢さんが小指を俺の前に出す。

「約束する…。」

そう言っただけで俺は理垢さんの小指と自分の小指を絡ませた。

「おつかえりー!!!」

「ただいま。」

マンションに帰ると徹と大祐が迎えてくれた。

「あれ？和真と祐介は？部屋？」

理垢さんが2人がいないことに気づく。

「むふふ。あの2人は今デートしてる！今日は帰るかわかんないってさっき和から電話来た！」

と徹が応える。

「まったくあいつらは真のバカップルだな！」

大祐はそんなことを言いながらも弟の祐介が幸せなら文句はないの
だろう。

まさかこのあとすぐに和真と祐介の仲が裂かれるなんて、今は誰も
予想できなかった。

捨てられた僕と過去

物心がついたときには、両親はいつも喧嘩していたんだ。

5歳の誕生日の日、僕、理垢は親に捨てられた。
最も、両親は僕の誕生日など頭の中に入っていないのだろうか。

両親が僕を捨てた理由は簡単。
僕が存在が2人にとって邪魔でしかなかったから。
彼らの足枷となっていたから。

酒と女に溺れる父親。
そんな父に愛想を尽かし、他の男を作って遊ぶ母親。

そんな2人の毎晩の喧嘩の内容は決まって僕。

そんな時僕は自分の部屋の、リビングから一番離れている隅にうつすくまるんだ。

閉ざされた扉の向こう。

母さんの悲痛な叫び声が聞こえる。

父さんの呂律の回らないだみ声が聞こえる。

「どうしていつもいつもあの子の面倒をわたしが見なきゃならないのよ!？」

「うるっせえ!女は黙って育児と家事をすればいいんだよ!」

「もう我慢できないわ!離婚しましょう。今すぐ!」

「おうおう。さっさと離婚届出して来い。」

「その代わりあなたがあの子を育てなさいよ!」

「はあ?なんだそりゃあ!?お前がアイツを持ってけば良いだろが!」

「どうしてよ!?!いい迷惑だわ!あの子を連れて行ったら再婚もできやしないわ!あの子はあなたが育ててください。」

「嫌だね。そんな面倒ごとは。」

「なんなのよ!あの子が居るばかりに面倒くさいわ!」

「アイツなんて産まなきゃ良かったんだよ。」

「あの子さえ産まれてこなければ...!」

毎日繰り返される、この言葉。

‘ あんたなんか産まれてこなければ良かったのに
,
,

毎日聞いていても、毎日心が少し痛い。

最近僕は部屋の隅でよく考える。

僕は産まれてきてはいけなかったの？

どうして僕は産まれてきたの？

なんのために産まれてきたの？

わからないよ…。

ねえ父さん、母さん。

教えてよ。

なんで僕を産んだの？

僕を愛してくれたことは1度も無かったの？

どうして僕の名前を呼んでくれないの？

どうして僕を愛してくれないの？

愛してるって言うてよ…。

そして僕の誕生日の夜、母さんは僕を児童養護施設へ連れて行った。

車のトランクには母さんの荷物が積んである。

僕を捨てたら新しい男のところへ行くんでしょ？

「ごめんねえ、ごうするしかなかったのよ。」

いいよ、母さん。

無理に笑わなくて。

そんな嘘の顔で僕を見ないで。

「じゃあね。」

母さんの乗った車が消えていく。

その日の朝、玄関でうずくまっていた僕は施設の人に発見された。

「ちょっと君？どうしたの？こんなところで何してるの？」

「…。」

「お父さんとお母さんは？」

「…。」

「おうちはどこだかわかる？」

「…。」

なにも答えない僕の様子に異変を察したのか、その人は僕を施設の中へと入れてくれた。

その日から僕はそこで、里親が見つかるまでの間生活することになった。

僕は誰とも喋らなかった。
喋りたくなかった。

誰にも近づかない。
誰とも仲良くしない。
誰も愛さない。

そうすれば傷つかない。

痛くない。

僕は一人でいい…。

そんな僕の様子に施設の人はお手上げ状態だった。

そんな時、僕の救世主が現れたんだ。

その人はまだ20歳くらいの若い男の人。

その人は頻繁に施設へ来ていた人だった。

「ねえ君、お兄さんと一緒にお外で遊ばない？気持ち良いよ。」

「…。」

「ね？行く？」

その若い男の人は僕の手を握ろうとした。

「…っ！触らないで…！」

思いつきりその人の手を振り払う。

「触らないですよ…。」

今仲良くされたって、どうせまた僕は1人、残されてしまうんだ。
だったら最初からそんな関係、作らないほうが良いに決まってる。

その男の人は少しの間困ったようにしていた。

「…君、お名前は？」

「…。」

「…教えてくれないかな？」

顔を上げたら男の人と目が合った。

すっごく優しそうな、ふわりとした雰囲気。

「…りく…。」

「りく君ね。教えてくれてありがとう。また明日、来るね。」

そう言い残して男の人は帰っていった。

このとき僕はなぜこの人に名前を教えたのだろう。

当時の僕にはわからなかったけれど、今の僕ならなんとなくわかる。

この男の人に、他の人とはなにか違う雰囲気を感じたからなのかもしれない。

次の日、あの人は約束どおりやってきた。

「こんにちは、りく君。元気にしてた？」

僕はただ、こくりと頷いた。

「りく君！お外でサッカーしない？」

男の人が笑顔で僕を誘う。

また僕は頷いた。

その日はとても天気がよかった。

「りく君、パスパス！」

俺はぽんつとボールを蹴った。

ボールは真っ直ぐに男の人へと届いた。

「りく君、うまいうまい！はい！」

男の人が僕に向かってボールを転がす。

僕はそれを受け取り、また蹴る。

しばらく2人で遊んだあと、僕たちは木陰のベンチに座った。

「りく君、サッカー上手だね。また遊ぼう?」

そう言っつて男の人は僕の頭を優しく撫でた。

久々に人の温もりを感じた気がした。

こんなにも温かかったのかと僕は気づいた。

「うつ…うつ…。」

気づいたら僕の両目から大粒の涙があふれていた。

その若い男の人は僕を抱きしめてくれた。

僕はその腕の中で大声をあげて泣いた。

その日を境に、僕はその若い男の人とできるだけ一緒にいた。

少しずつだけど話もするようになった。

その若い男の人は警察に勤務し始めた人だった。

結婚はしているけれど、子供はできないみたい。

そんなある日、その若い男の人が久しぶりに施設へやってきた。

久々に会えて嬉しい。

「理垢君、僕が君のパパになったらどう思う？」

「え？どーして？」

「理垢君のパパになりたい。」

「…。」

甦る忌まわしい記憶。

もうあんな思いはしたくない。

人はいつ豹変するかわからない。

昨日まで優しくかった人が急に牙をむく。

不安そうな僕の顔をみた若い男の人は僕の頭を撫でてくれた。

「不安なんだね…。でも僕は決して君を1人にしないよ。約束。」
にこりと笑ったこの人の顔をみた僕は、もう1度だけ、信じてみて
も良いかなと思った。

その1週間後、僕はその人の養子になった。

「理垢君、僕たちはもう親子だよ。パパって呼んでね。」
「…パ、パ…。」

ほろほろと涙がまた溢れてしまう。

そんな僕を、
「パパ、」
は抱き上げ、僕たちは施設を出た。

「パパ、」の奥さんで僕の「ママ、」も優しかった。

僕を必要としてくれた。

愛してくれた。

僕はそんな2人のおかげでここまで生きてこれたんだと思う。

あれからもう少しで20年近く経つ。

僕もなんとかここまで成長できた。

今でも人を愛すのは少し怖い。

けど、いつの日か本当に愛せる人に出会えたときは、その人を大事にしたい。

そう思えるようになった。

？

事の発端は1本の電話。

早朝、居間に常備してある電話が鳴った。

「もしもし。」

たまたまトイレに起きた徹がだるそうに電話に出る。

「ああ徹君かい？」

「あれ？和のお父さん？」

「そうだよ。いやあ覚えててくれるなんて嬉しいなあ。」

「お久しぶりですね。和に代わります？」

「ああ、頼む。」

「ちょっと待っていてください。今起こしてくるんで。」

「まだ寝てるのか？あの子は。」

はははと和真の父親が笑う声が受話器のむこうから聞こえる。

和真の父親は和真と違って、よく喋る。

この点はすごく似てない。

でも見た目は似てる。

和真の父親は確か大企業の社長だったと思う。

そして家はたしか古くからのなんかの家元とかだったと思う。

詳しくはわからないけど。

「和 電話。」

「ごんごんと和真の部屋のドアをノックする。」

ちょっと経ってから和真が出てくる。

上は全裸。

ドアの向こうのキングサイズのベッドには祐介が寝ていた。

「ああ、お前ら…。また一緒に寝てたのか？」

「…別にいいだろ。」

「誰もだめなんて言ってないだろ。それよか、電話。」

「誰？」

「和のお父さん。」

「なんで。」

「そんなの知らないよ。いいから早く居間へ行った行った！」

「…祐介に手、出すなよ。」

和真がマジで言う。

「ださねーよ！俺は可愛い女の子しか興味ないの。」

「あ、そ。」

和真が下へ降りていく。

「もしもし。」

「ああ和真、久しぶりだな。」

「そうだね。」

「突然なんだが…。できるだけ早く家へ帰ってきてくれないか？」

「どうして。」

「いやあ、お前も今年で大学も卒業だろ？そろそろ結婚して家を継いでもらいたいんだ。」

「家を継ぐのは兄さんでしょ。それになんで今なの。」

「うむ…。いろいろ込み入っていてな。電話じゃとても時間が足りん。お前の都合が着くときでいいから家に1度帰ってきてくれないか？」

「…わかったよ。」

「じゃあまた連絡する。体に気をつけるよ。」

「父さんも。」

そう言って和真は電話を切った。

「……どうしようか。」

誰もいない居間に和真の声だけが響いた。

夕食時、潤は約束どおり毎日理垢の夕食作りを手伝っていた。

居間には他に和真しかいない。

和真はさっきからソファーに座ったまま動かない。

そんな様子に気になった俺は声を掛けてみる。

「和真さん？どうかした？」

「ん？ああ……。」

瞑想から覚めた和真がこつちを見る。

「ちよつと考え事。」

「大丈夫？」

俺の隣で理垢さんが心配する。

この人はほんとに他人のことを心配しすぎだと思つ。
それがいいところだけだ。

「ああ。夕食のときにみんなに言つ。」

「そう。」

そう言つて理垢さんは和真に背を向け夕食作りに戻る。
俺も手伝いに戻つた。

そんな俺たちの後ろのほうで和真のため息が聞こえた。

「うおお！美味そう！」

「今日は徹の好きな竹の子ハンバーグだよ。」

「さっすが理垢！それと潤もー！」

「じゃ食べよ。」

「おう！」

いただきます、と6人の声が重なる。

「で？和真、話って？」

理垢さんが話を振る。

「うん。父さんに結婚しろって言われた。」

啞然。

突然の話に居間の中が静まり返る。

「ど、どーゆーこと？」

と、理垢。

「そのまんま。兄さんが家継ぐはずだったのに、いろいろ込み入ってるって言われた。細かいことは今度家に帰ったら聞く。」

「けけけけ結婚ってのは!？」

徹が慌てて聞く。

祐介はさっきから黙ったままだ。

「…。まだ詳しいことは何も聞いてない…。」

「そ、そうか…。」

夕食の間、和真と祐介は目を合わせなかった。

その日の夜、俺はなんとなく寝付けないでいた。

夕食のときの話を考えていた。

和真さんが結婚って…。

そしたら祐介はどうなるの？

あんなに愛し合っているのに…。

そんな簡単に諦められるのかな…。

性別という大きな壁が邪魔をする。

俺は他人のことながらも、もやもやと悩んでいた。

新鮮な空気を吸ってすっきりしようと、ベランダに出る。

ベランダから夜の街を眺める。

すると上から水滴が一滴落ちてきた。

手すりに置いた俺の手の甲で跳ねる。

今日は雨は降らないはずだけど…。

上を見上げると、そこには祐介がいた。

俺の部屋の上は祐介の部屋だ。

祐介はそこで声を立てずに、ただ涙を流しているようだった。

「祐介…？」

俺はしたからそっと呼びかけてみた。

暗くてよく見えないが、祐介が下を見たようだ。

「泣いてるの？」

「潤…。もう、僕どうしたらいいのかわかんないよ…。」
「声が震えている。」

祐介の精神はもう崩壊寸前のようだった。

「ちょっとまって、今そっち行くから！」

俺は4階へと駆け上がった。

その頃、祐介の隣の部屋の大祐の部屋に和真と理垢が集まっていた。

81

「和真、これからどうするつもり…?」
理垢が心配そうに聞く。

「…。考え中…。」
「なあ和真、祐介はいままでお前みたいに本当に愛せるやついなかったんだ。今おまえがいなくなったら…。」
「わかってる…。」

「いつ家に行くの?」
「明日。」

「明日？随分急だね…。」

「早いほうがいい。」

「じゃあ祐介にはなんて言うんだ？」

大祐が言う。

やはり弟のことは心配だ。

「何も言わない…。」

「え…。何も言わないの!？」

「なにか言って、祐を悲しませたりしたら嫌だ。」

「でも…。」

「とりあえず明日家に言っただけ話を聞いてくる。全てはそれから…。」

「うん…、そうだね…。」

「そうだな…。」

そのころ祐介の部屋では、潤が祐介を励ましていた。

「ま、まだ結婚するとかは決まったわけじゃないし、元気だそうよ。」

「…僕和が誰かと結婚するなんて嫌だよ。」

祐介の顔は涙でぐちゃぐちゃ。

「和真さんのお兄さんが結婚しちゃえば和真さんは結婚しなくていいんでしょ？そうなるかもしれないよ！」
「うー、でもお…。」

それから俺は朝までずっと祐介を慰めていた。

翌朝。

「じゃ、行ってくる。」

玄関で見送られる和真。

「行ってらっしゃい。」

見送る俺らの中に、祐介の姿は無い。

昨日の夜から和真と祐介は会っていない。

そんな和真は心なしか悲しそうに見えた。

「祐介に伝えて。すぐに帰ってくるからって…。」

「わかったよ。」

理垢さんが応える。

「じゃ…。」

和真の姿は朝日の光に溶けていった。

和真が出て行く音が聞こえる。

和真に会いたいのか、会いたくないのか、よくわからない。

結局僕は動かなかった。

今会ったら、絶対に和真から離れられなくなるような気がして。

和真が帰ってくるのを待とう。

そう決めた僕は、目を閉じ、現実から遠ざかっていった。

？

実家のある街まで着いた。

駅を出ると、そこには家の、黒塗りのリムジンが停まっていた。

そして車の側に立つ、スーツ姿の1人の男。

その男が口を開く。

「和真様。お迎えに参りました。」

「青葉……。」

「お久しぶりでございます。」

「ああ。」

青葉は俺が小さい頃に執事見習いで家にきた若い執事。

今、歳は30代半ばくらいだと思う。

割と人見知りな俺だったけど、青葉にはよく懐いていたし、歳の離れた兄みたいに慕っていた。

「では参りましょうか。お父様がお待ちですよ。」

そうして俺は久々の家へと向かった。

「和、今なにしてんのかなあ〜。」

徹も少しは心配らしい。

「そろそろ家に着く頃じゃない？
と、理垢さん。」

今、マンションには和、理垢さん、そして俺しかない。

祐介と大祐は、出かけている。

大祐が祐介を元気付けようと兄弟、水入らずで遊びに行ったのだ。

これで少しはいつもの祐介に戻ってくれたらいいのだが、きつと無

理だろう。

和真が帰ってこない限り。

「おお、和真！お帰り。」

「ただいま。」

家へ着くと父さんが待っていた。

最後に会ったときよりも白髪が増え、少し痩せた気がした。

顔色もあんまりよくない。

「ああ、本当に久しぶりだな！一段と男前になったんじゃないか？」

はははと父さんが笑いながら言う。

「父さん、俺、できるだけ早く帰らないと……。」

「そうなのか？ゆっくりしていけばいいものを。」

「……待っていてくれる人がいるんだ……。」

「……そうか。なら早く話をしなければな。まあ、とりあえず家に入ろつ。」

久々に家に帰ってきたのに、なんだか落ち着かない。

なんでだ…。

ああ…。

隣にアイツが居ないからだ…。

離れてみてわかる、アイツが俺にとってすごく大切な人なんだと。

「で、話つて？」

「うむ。啓吾^{けいご}なのだがな…。」

啓吾は和真の2つ年上の兄である。

「会社が今すごく大事なときで、片時も手を離せない、結婚なんて今は考えられないとつい最近言ってきてな。」

現在、啓吾は父の大企業の子会社の社長をやっている。それがちょうど軌道に乗ってきているという。

「だから俺に結婚してほしいってこと？」

「ああ。」

「兄さんが落ち着くまで待てない？」

「見ての通り、私は具合がよくない。いつ死ぬかもわからない。だから早く安心したいんだ。」

「…。」

「勝手なのはわかってる。だが、この家は由緒正しい家なんだ。この家を潰すわけにはいかない。それは私が死ぬまでの義務なんだよ。」

「…そう。」

「無理強いはしない。和真がどうしても嫌ならば啓吾とも早々に話

をする。」

「……。」

「ここまで話終えると、父さんがごほんと空咳をする。」

「ところで和真……。お前、恋人は居るのか？」

恋人……。

祐介……。

「……………。いない。」

恋人が男だなんて、父さんには言えない俺は、嘘をついた。

本当のことを言ってこの話を早く終わらせたい。

でもほんとのことを話して理解してもらおうのはどこの家でも無理に等しいことなのだろう。

「そうか。じゃあ見合いでもするか。」

「…見合い…。」

「ああ、そうすれば少なからず気に入る人は現れるだろう。」

そんなことしたら俺は…。

祐介を捨てることになる…。

「父さん、…もう少し、待ってくれないか？」

「どうした。」

「…考えたいんだ…。」

「わかった。今すぐ返事はしない。」

「ありがとう。」

今この話を保留したことではなにかが変わるわけじゃない。

だけど、俺が祐介と一緒にいられる時間を少しでも長くするために、こうすることしか今の俺にはわからない。

「今日は泊まっていきなさい。部屋はそのままにしてあるから。」

そうして俺は幼い頃の自分が使っていた部屋へと向かった。

「祐介、いいかげん少しは元気出せよ。」

「…だって…。」

「そんなに暗いと和真が心配するぞ?」

「…でも、和、居ない…。うっ…。うっ…。」

祐介がまたぼろぼろと涙を零す。

遊びに行くと言って家を出てきたはいいのだが、泣いてばかりの祐介を連れて遊ぶのは正直かなり大変だった。

「じゃあそろそろ帰るか?和真から電話来るかもよ。」

「…ほんとに用事あるなら携帯に電話くるもん…。」

「でも全然連絡こないじゃ」

慌てて言いかけた言葉を飲み込んだが、遅かった。

「うわーん!和、なんでなんにも連絡くれないの?朝お見送りしなかつたから!？」

だめだこりゃ…。

「祐介、もう帰ろつ。」

「ううっー…。」

そして俺は泣いてばかりの祐介の手を引いてマンションへ帰った。

その日の夜、俺は家のベランダで夜の空を眺めていた。

眺めながら考える。

これからの俺と祐介のこと。

コンコンとドアがノックされる。

「はい？」

「お邪魔してもよろしいですか？」

この声は、青葉か。

「ああ。」

「失礼します。」

青葉が入ってくる。

「どうした？」

「いえ、ただ和真様が何か悩んでいらっしやるようだったので。」

「さっきのこと聞いてた？」

「申し訳ございません。お茶をお持ちしようとお部屋へ行こうとしたのですが、大事な話をしていらっしやるようだったので入らなかったのですが…。部屋の外まで聞こえてしまいました…。」

「いいよ。」

「申し訳ございません。」

「うん。で？」

「いえ、私めでもなにか和真様のお役に立てることがあるかと思ひまして。話を聞くくらいならば。」

青葉は昔から俺の話を聞いてくれる。

それは何年経つても変わらなかつたみたいだ。

「…。ねえ青葉、恋人が居て、その恋人がちょっと普通とは違つとしたら、父さんはその人と俺が結婚すること許してくれると思う?」

「違つというの?」

「うん。もしその人が…男だったら。」

「だ、男性でございますか?」

「うん。やっぱりおかしいよな。」

「…。それは和真様の恋人の話なのですか?」

「…そう。。。」

「左様でございますか…。」

執事としていつもポーカーフェイスの青葉も、さすがにこの話には驚きを隠せないようだ。

「ごめん青葉、こんな話して。」

「いえ。」

「まだ話聞いてくれる？それとももうやめた方がいいかな…。」

「お話してください。」

「青葉は相変わらずいい人だね。昔と変わんない。」

「昔も今も、私は和真様のお役にたきたいという思いは変わりませんよ。」

「ありがとう。」

まっすぐな青葉の言葉は、俺の心に強く響いた。

「青葉も知っているだろうけど、俺か兄さん、どっちかがはやく結婚しなくちゃいけない。だけど、俺には祐介を捨てることなんてできない…。」

「…はい。」

「兄さんが結婚してくればこの話は終わる。だけど、兄さんは仕事、僕は私事わたくしごと。当然僕が結婚するのが筋だ。」

「そうですね…。」

「俺は父さんに本当のことを言うべきなのかな…。」

「…。」

「こんなこと言ったら父さん倒れてしまつかもな。」

「きつと大層驚きになることでしょうね…。」

はあ、とため息をつき、天空を仰ぐ。

空に瞬く無数の星。

祐介は今なにしてるのかな…。

「…。その方が本当に和真様にとって大切な方なのならば、お父様に正直に言うのがよろしいかと思えますよ。」

青葉が口を開く。

青葉のアドバイスはいつもの的を射ている。

「そうだね…。帰る前に話をしようか。」

「ええ。私も影ながら応援しますよ。」

「ありがとうございます。」

「それでは、おやすみなさいませ。あまり夜更かしをなさらないように。」

「ああ。」

そう言って青葉は去っていった。

俺はポケットから携帯を取り出した。

祐介…。

俺はマンションの電話にかけてみた。

今の時間なら皆居間に集まっているだろう。

電話の呼び出し音が静かな部屋に響く。

「はい。」

「理垢か？」

「和真？どうかした？」

「いや。他の奴らは？」

「みんなでお風呂に入ってる。」

「みんなですか？」

「うん。祐介が元気ないから、ね。」

「…。」

「みんな必死だよ。」

理垢が苦笑いしているのが受話器越しでわかる。

「そうか。悪いな…。」

「いーえ。祐介そろそろあがると思っけど?。」

「うん…。いや、いい。」

「話さなくていいの?…祐介、可哀想だよ…。」

「悪い…。でもまだ話できない。」

「…そう。」

「悪い…。」

「ちゃんと早く、祐介と話しないとだめだよ?。」

「ああ。」

「あ、みんなあがったみたい。切ったほう、いいんでしょう?。」

「ああ。」

「じゃ…、おやすみ。」

「おやすみ。」

ブツリと電話が切れる。

マンションの仲間達と、俺を断ち切られたような気がした。

急に怖くなった。

‘、失う‘、’ という本当の意味がわかった気がした。

？

和真が実家へ帰ってから一週間経った。

何も連絡は来ない。

‘、’ すぐに帰ってくる ‘、’

そう理垢に言い残したって、後で聞いた。

すぐって、いつなのかな……？

もう僕はだめかもしれない…。

「あれー？祐介ちゃん？」

学校が終わってマンションへと帰っているときに、後ろから呼ばれた。

振り返って確認するまでも無かった。

この声は、『帝王』ごとく、風。

僕の同級生で、入学早々僕に迫ってきた男。

あの時は和が助けてくれた。

愛してる人が助けてくれたんだ…。

「ねえ祐介ちゃん？今日は1人なの？」

「…そうだよ。」

この男は急になんなのだろう。

和に絞められ後は全く近寄ってこなくなったのに。

「…祐介ちゃん、なんか元気ないね？どうしたの？あのおにーさん

と喧嘩でもしたの？」

「…。」

「目だつてちよつと腫れちゃってるし。泣いてたの？」

「…泣いてないよ。」

「嘘。」

そう言つて風が両手で俺の頬を包み込み、僕の顔をじつと見る。

綺麗な顔。

この人はいろんな人で遊びまわっていなければいい人なんだけどな…。

そんなことを思つてしまった自分に驚いた。

「…やっぱり泣いてたんだ？」

「…泣いてなんか無い…。」

そう言いつつも僕の目からはぼろぼろと涙が流れていた。

そんな僕を凧がじつと見る。

「…。あんまり俺を誘わないでくれる？」

「…え？」

「だからあ、祐介ちゃん泣いちゃうと俺、やばい。」

「…？」

わけがわからいで居る僕を見て、凧がふうつとため息をつく。

「だからね、こういうことがしたくなっちゃうの。」

言うが早いか、凧が僕の額に唇を軽く触れさせた。

「な、なに…？」

「ふふつ。祐介ちゃん、自分がどんなに俺をその気にさせてるのか、わかってないね？」

「…それって…。」

「祐介ちゃん、祐介ちゃんが俺にとってどんな人なのか知ってる？」

「…そんなの知らないよ…。」

「祐介ちゃんはね、俺の初恋の人。振られちゃったけどさ。」

「…。」

思いがけないその言葉。

「祐介ちゃん。」

そう言った風はふいに真面目な顔になる。

「祐介ちゃん、確かに俺はいろんな人と遊んでる。だけど、祐介ちゃんが恋人になってくれたらもうやめる。」

「…え？」

「俺なら祐介ちゃんを悲しませたりしないよ？あの男の人よりも。」

「…和は僕を悲しませたりなんて、しないよ…。」

「今は？」

「…。」

「ね？そんな男やめなよ。」

「…。」僕は和が大好きなんだよ…。」

「でもあっちはそう思ってくれてるの？」

「…。」

和が僕を愛してくれてるのかなんて一度も疑ったことなんて無かった。

だけど、僕はこのとき気づいてしまったんだ。

付き合い始めてから、愛してる、って言われてない…。

今までいつでも一緒にいた。

恋人同士だって思ってる。

だけど、その言葉を言われていない…。

和は僕のこと愛してくれてるのかな…？

それともただ遊んでるだけなの…？

この一週間、ずっと和から連絡を待っていた。

だけど連絡は来なかった。

僕と結婚、どっちか迷ってるってことだよな…？

迷うってことは僕のこと、本当に愛してくれてるわけじゃないんだよね…？

僕はただただ悲しくて、俯いていた。

「祐介ちゃん？大丈夫？」

「……。ごめん、ちょっとだけ……。」

そう言っただけで僕は風の中で泣いた。

こうやって人に包まれたのは久しぶりで安心した。

風はいつも遊びまわっていて、良いイメージなんてなかったけど、本当はいい人なのかもしれない。

僕のことを抱きしめながら、風が口を開く。

「祐介ちゃん、俺のこと、本気で考えてみてくれない？」

「……。」

「返事は待つよ。いつまでも待ってる。」

「……。」

そう言って、凧は僕を放した。

「じゃあ、気をつけて帰ってね？」

そう言って凧は消えていった。

僕はただ、夕焼けに染まる街に消えていく凧の背中を見つめていた。

父さんが倒れた。

俺が家に帰ってきて次の日に、血を吐いた。

もう先は長くないのだろう…。

今は家の専属医の医者の下、家で養成している。

「…和真…。」

「なに？父さん。」

「帰らなくていいのか？」

「…今は、父さんのほうが大事。」

「お前を待つてる人が、いるんだろう？」

「…きっとあの人ならいつまでも俺のこと待っていてくれる。」

「そうか…。」

そう言って父さんが咳き込む。

父さんがこうなってしまうって、俺は帰ることができなかった。

祐介ならなにがあっても、俺のことを待っていてくれる。

そう信じて。

夕食を食べながら、僕は凧の言葉を考えていた。

「祐？どうかした？ぼーっとして。」
と、潤。

「なんでもないよ。」

作り笑顔で答える。

もうみんなには迷惑をかけたくない。

徹斗が言いずらそうに口を開く。

「そういえばさ…、祐、お前、放課後『帝王』となにしてた…?」

「え!?!」

「…俺、見ちゃったんだよ。祐介と『帝王』が帰り道でしたこと

…。」

「…、別になんでもないよ。」

「ふうん。」

僕に半信半疑の徹斗の目が向けられる。

理垢と大祐には何の話だかわからないようだったが、潤はなにか感づいたようだった。

僕は次の日、学校を休んだ。

どうしても行く気になれなかったし、凧と顔を合わせたら、和を裏切るような気がして。

和と凧、和のほうが大好きなのに…。

どっちか迷ってる、そんな自分が嫌だ。

「祐介？ほんとに大丈夫？」

僕の部屋の外から理垢が心配してくれている。

僕は具合が悪いといって部屋に籠もっていたのだった。

「僕は大丈夫だから、早く会社行きなよ。」

「そう。薬出しといたからちゃんと飲むんだよ？」

「うん、ありがとう。」

そう言い残し理垢は会社へ行ったようだ。

徹斗と潤はもうすでに学校に行っている。

この2人は僕が具合悪くないことなんてお見通しなんだろうけど、何も言わないでいてくれた。

兄である大祐は普通にいつもどおり大学へ行った。

兄のくせに弟の異変に気づかないなんて。

笑ってしまっ。

僕は特になにをするわけでもなく、過ごしていた。

ただ時間だけが過ぎていく。

いつしか昼時になっていた。

食欲がわからないので、昼ごはんは食べない。

そしてなんとなくブランダへ出る。

梅雨のこの時期、空は相変わらず雨を落とし続ける。

ベランダから雨の降る空を見つめていた。

いまの僕とおんなじ空。

「祐介ちゃんっ！」

下から僕を呼ぶ声。

下を見れば、傘もささずに上を見上げている風がいた。

走ってきたのだろうか？

息が切れている。

「風…？なにしてるの？なんでここに…？」

「おたくの潤君にこそ、聞いてきたんだよ。祐介ちゃん休んでたか
ら。」

「…。とりあえず中入りなよ。ロック解除しとくから。」

「おっ。」

少しすると風が上がってきた。

「風、びしょびしょ…。風邪引いちゃうと悪いからお風呂はいるっ。」

「いや、いいよ。」

「そう。」

僕は風を自分の部屋へ連れて行った。

風がベッドに腰掛ける。

そこで僕はその真向かいのソファーに座った。

「風、急にどうしたの？」

「祐介ちゃんが学校休んでたから心配で来たの。」

「…それだけ？」

「それだけって、祐介ちゃん…。俺がどれだけ心配したと思ってるの？昨日俺なんか悪いことしたかなとか色々悩んだんだよ？」

「ごめん。でもほんとになんでもないよ。なんか、学校行きたくなかっただけ。」

「そう、よかった。」

凧が僕を見つめる。

昨日のことがあったばかりだから、なんとなく気まずい。

「あ…。なにか飲み物持ってくるよ。」

気まずさに耐え切れず僕はとりあえずの逃げ口実をつけ、立った。

そんな僕の手首を凧の手が掴む。

「え…？」

気づいたら僕の下にベッド、上には凧。

「ちよ、凧…！？」

「人のものには手、出さないつもりだったけど…。ちょっと無理かも。」

「…風っ…!」

僕はありったけの力で風を制止する。

僕に拒絶された、そんな風の顔は少し悲しげに見えた。

こんな風の顔、初めて見た。

「…祐介ちゃん、やっぱり俺じゃだめ？」

「…。」

「…じめんね？こんなことするつもりじゃなかったんだけど…。」

「…。」

「帰るね。」

「…じめん。」

いいよ、と、いっしょに風が微笑んで帰っていった。

咄嗟に凧を拒絶した自分。

いままで偽ってきた自分の心が今ようやくやくわかった。

本当はずっとこうしたかったんだ。

和に会いたい……。。

？

携帯を持つ手がどうしても震えてしまう。

その手に握られた携帯のディスプレイには、和の文字。

震える指でボタンを押す。

ブルル…と呼び出し音が耳に届く。

その音が途切れ、懐かしい声が聞こえる。

「…祐？」

「…和…。」

久々に聞いた、愛しい人の声。

「…和…う…。」

涙で目が熱くなる。

「祐…ごめん。なにも連絡しなくて。」

「う…っ…。」

「祐、すぐ帰るから。な？もうすこしだけ待っていてくれないか？」

「…う…ん…。」

「祐、泣くな。」

「…だって…。」

「…どろした。」

「和は僕のこと、愛してくれてるの？」

ふいにぶつけられた質問。

「祐…？なんで…。」

「だって…！和、僕のこと愛してるって言ってくれたことないから…！」

電話の向こうで和がはあと息を吐く音が聞こえた。

「祐、言わなくても祐ならわかってると思ったんだけど…。」

「わかんないよ…。」

「急にどうしたんだ？なにかあったのか？」

「…風…。」

「風？…あいつに何かされたのか！？」

「…。」

「祐！」

「風に、和はお前のこと本当に愛してるのか？って言われて、いろいろ考えたら…、僕の独りよがりなんじゃないかって思って…。」

「祐…、祐は、俺とそいつ、どっちを信じたいんだ？」

「…和…。」

「じゃあ俺を信じてくれないか？」

「うん…。」

まだ愛してると言ってくれない。

だけど、和と話せて、少し気持ちが落ち着いた。

「祐、俺、明日にでも父さんと兄さんに俺たちのこと話そうと思つ。」

「え？言つの…？」

「ああ。言つて、認めてもらつしか結婚しない方法がないみたいなんだ。」

「そう…。」

和のお父さんとお兄さんに僕たちのことを言つ。

認めてもらえるか、別れさせられるか。

究極の賭け。

「…祐、明日、家に来ないか？」

「和の家…？」

「ああ、話すときに、側にいてほしい。」

「…わかった…。」

「じゃ、家の場所は理垢に聞いて。知ってるから。」

「うん。」

「駅までついたら連絡して。迎えに行く。」

「わかった…。」

「じゃあ、祐、待ってるから…。」

そう言って和は電話を切った。

そして僕は和の家へ行く準備を始めた。

結果が吉であれ凶であれ、明日すべてに片がつく。

急に祐から電話が来て、驚いたけど嬉しかった。

ただどこれからのことが心配だ。

父さんに俺の恋人が男だって言う。

もし拒絶されたら、傷つくのは俺だけだったはずなのに、祐を呼んだ今、一番傷つくのは祐だろう。

俺は祐をちゃんと守れるのか、自信がない。

それにしても祐があんなに思いつめてたなんてな…。

祐から言われた言葉が頭の中で反芻する。

祐は、俺がちゃんと声に出して祐に、愛してる、って伝えなかつたから、あんなに苦しんだ。

今度はちゃんと声に出して伝えたい。

この言葉を。

「理垢、僕明日、和の家に行ってくる。」

「…そう。やっとか。」

「理垢なら住所わかるって和言ってたんだけど…。」

「ああ、和の家から和宛に届いた郵便に住所書いてあるからそれ見たらいいよ。」

「どこにある？」

「居間にあると思うよ。」

「わかった。ありがとう。」

次の日、僕は理垢から聞いたとおりの駅で降りた。

駅の前で携帯を取り出し、和に電話を掛ける。

「もしもし和？」

「ああ、着いたか。」

「うん。」

「そこでちょっと待ってて。すぐに着くから。」

「うん。」

もうすぐ和に会える…。

しばらくすると黒塗りのリムジンが止まった。

後ろの席から和が降りてくる。

久々の和の姿。

「…和…。」

嬉しくて、涙が出た。

「祐…。ごめん。」

和が僕を抱きしめてくれる。

その温もりが嬉しい。

「祐、目、腫れすぎ…。」

確かに僕の目はここ一週間近く泣いていたせいで赤くなっている。

「それじゃせつかくの顔が台無しだ。」

和が珍しく笑う。

「だって…ずっと泣いてたんだもん…。」

そんな僕の頭を和が軽くなでる。

「行くうか。」

「うん…。」

緊張する…。

緊張で手が冷たくなる。

震える。

そんな僕の手を和が何も言わずずっと握っててくれた。

車に乗ると、俺を乗せて運転してきた青葉が電話をしていた。

「和真様、今お父様から御連絡がありまして、今日は検査入院なさるそうです。」

「そう…。いいのか悪いのか、このタイミングは…。」

青葉が後ろを振り返り、祐介を見る。

「こんにちは。執事の青葉と言います。」

「あ、こんにちは…。祐介です…。」

おどおどと挨拶をする。

いったいこの人はどこまで知っているのだろうか？

「それでは参りましょう。」

そう言って青葉が車を出す。

そうして僕たちは和真の家へ向かった。

「ねえ理垢さん。和真さんと祐介、大丈夫かな…?」

理垢さんの部屋で勉強を教えてもらっていた俺は、やはりこのことが気になって、勉強が手につかないでいた。

「やっぱり潤も心配?」

「うん…。あの2人、別れるような事にならなければいいけど…」

「そうだね。でも相当大変だと思うよ。和真のお父さんを説得するのは。」

「そうなんですか?」

「うん…。和真のお父さんはああ見えて結構お堅い人なんだよね。普段はそんな風に見えないけど、家のことには結構煩いんだよ。」

「そうなんですか…。」

和真さんのお父さんを説得できなければあの2人が結ばれるようなことはありえない。

それ以上に、一緒にいられなくなるかもしれない。

そんなの、あの2人には似合わない。

あの2人は一緒じゃないと、だめなんだ…。

そのころ徹斗と大祐は、居間でいつものようにゲームをしていた。

「なー大祐。お前、祐介が心配じゃないのかよ？」

お菓子を片手に、ゲームをしていた大祐の能天気な様子に耐えかねて、徹斗が不安をぶつける。

「あー？大丈夫だつて。」

こんどはジュースを飲みながら、大祐が応える。

「俺は大丈夫じゃないと思うけど。」

「だあってさー、俺たちが心配したって何か変わるわけじゃないだろ？だから俺はあの二人を信じてるからそれでいいの。それとも何？もつと兄らしく心配しろってこと？」

「いや…。確かに大祐の言うとおりだけど…。やっぱり心配なんだ…。」

「お前が人のこと心配するなんてよっぽどだな。」

「ひっでー!!」

大祐の言うとおりだ。

今の俺たちにはあの二人を信じるしかない…。

？

「和真様、祐介様のお部屋はいかがなさいましょぅ？」

玄関で祐介の荷物を預かりながら、青葉が聞く。

「俺の部屋。」

「かしこまりました。それではお部屋のほうに荷物を届けて参りますね。」

そう言つて青葉は上へ上がつていった。

「和の家、初めて来た…。」

玄関に突つ立つたまま祐介が広い広い天井を見上げている。

「祐の家とそんなに変わらないだろ？」

「うーん。どうだろ？最近帰ってないからわかんないや。」

そう言っつて祐が笑う。

久々に見れた祐の笑顔が眩しくて。

思わず目を逸らしたくなる。

「和…？」

祐介はいつでも和真のちょっとした異変に気づく。

「どっしたの？」

祐介が不思議そうな顔を向けてくる。

「祐、ほんとにごめん。」

「え、なに？急に…。」

「お前、俺がいない間ずっと泣いてたんだろ？」

「そ、そうだけど…。」

高三にもなって泣いていたことをこんなにも正面から言われると恥ずかしい…。

「ほんとにごめん。俺…。」

「和！」

祐介が和真の両手をぎゅっと握り締め、和真の苦悶に満ちた顔をひたと見据えた。

「和、僕は和のそんな顔みたくないよ。いつものかっこいい和が好き。だから、ね？」

「祐…。」

俺がこんなにも祐を悲しませたのに、祐は俺をまだ好きでいてくれた。

率直に嬉しかった。

「祐、大好きだ…。」

そう言って和真は祐介を強く抱きしめた。

そんな二人を、青葉が微笑みながら遠くから見ていたことなどは知らない。

その夜、僕は、久々に和と一緒に寝た。

和のバランスの取れた、綺麗な体。

その腕の中で僕は安心して包まれ、眠った。

俺の腕の中で眠る、小柄な体。

愛しくて愛しくて。

一生離したくない。

今までにこれほど強く、この願いを願ったことはなかった。

次の日の昼過ぎ、父さんが検査入院から帰ってきた。

それに続くようにして兄さんも帰ってくる。

「ただいま。」

父さんが疲れたような顔をしながら言う。

「和！久しぶりだな！」

そう言っつて兄さんが俺に抱きついてきた。

「兄さん、暑苦しい。」

昔からこう。

結構ボディータッチの多い兄。

そして結構冷めてる弟。

そんな二人の温度を足して半分にすればちょうどいい。

「父さん、兄さん、例の話があるんだけど…。今いい？」

「ああ、いいぞ。」

「じゃあ奥の座敷でいいよね？」

そう言って父さんと兄さんが奥へ行く。

俺はその場で深呼吸。

今、祐介は俺の部屋にいる。

呼びに行く。

「祐…。」

「あ…、和。お父さんとお兄さんもう来た？」

「ああ。」

「じゃあ、行く…?」

「…。」

和が何も応えない。

その理由はわかってる。

「和、僕なら大丈夫だから。ね?行く?」

「…祐…。」

俺は祐を抱きしめた。

もうこれで祐の愛しい体に触れていられるのも、同じ場所にいられるのも最後かもしれない。

そう思いながら…。

「和遅いぞー。」

奥の部屋へ行くと、兄さんが待ちくたびれたとでも言っつよつに言っつ。

「ごめん。」

「で、和真、話というのは結婚のことか？」

「…うん…。」

「ほう。見合いをすることにしたか？」

「いや…。二人に紹介したい人がいるんだけど…。」

父さんと兄さんが驚いたように顔を向ける。

「和真、お前、彼女いたのか!？」

「そんな話聞いてないぞー？」

そんな二人には応えず、部屋の外で待たせていた祐を呼ぶ。

「祐、入って。」

ドアから祐介が顔をのぞかせる。

「こつちおいで。」

そう言つて和真の近くに祐介を座らせる。

「か、和真…?」

父さんがこれまでにないほど驚いた顔をする。

「紹介するよ…。俺の恋人の祐介。」

「はああ!?!ちよつ、和?お前何言つてんの!?!その子、男…だよ
ね…?」

「ああ。」

思ったとおりのこの反応。

さて、これからどうしようか…。

「和真…お前、気は確かか?」

「確かだよ。」

「その子は確かに男の子なのだろう?」

「ああ。」

「お前は男だ。そのお前の恋人が男だと?」

「そつだよ…。」

父さんが信じられないというように首を振り、頭を抱える。

「ちょっと和!それ本当なのか!?その男の子が恋人って!?!」

兄さんが口を開く。

その声もやはり驚嘆の色が隠せないでいた。

「そつだよ。」

「和?いいか、よく聞けよ?その男の子が仮にお前の恋人だとする。それでお前はこれから先、この子とどうするつもりだ?」

「一緒にいる。」

「ばかか!それでお前は一生結婚もせずに過ごす気なのか!??そんな生活、長続きするはずがないだろう!」

「今はそれでいい…。」

「今はってお前…。今、将来のことを考えないとだめだろう!？」

「そうだぞ和真。今はそれでよくても、後できっと後悔することになるんだぞ?。」

父さんと兄さんが猛反対。

だけど俺はこの二人の気持ちに伝えるつもりはない。

「後悔なんてしない。」

「和…。」

「和真…。」

まっすぐに二人を見つめる和真の目は真剣そのものだった。

こいつのこんな目、初めてだ…。

「父さんと兄さんが認めてくれたら嬉しい。だけど認めてくれなくても俺は祐と離れない。」

「和真…。」

「なあ和、もう一度考え直せよ?」

「考えることなんてない。」

「和…。」

ここで父さんが口を開く。

「和真、家としてはこのようなことは許さない。だから今すぐあのマンションを出て、家へ帰ってきなさい。」

今まで宥^{いよ}めるように話をしてきた父さんとは違っていた。

表情が消して許さないということを語っていた。

「父さん…。」

最悪の事態。

「そつだよ和、家にいるべきだ。そしてその子のこととは忘れるんだ。」

「

兄さんも俺を厳しい顔で見る。

祐介はじつと俯きながら話を聞いているようだった。

今祐はどんなに傷ついているだろう。

そんな有害置まれなくてテーブルの下でそっとその手を握る。

その冷えた手からは細かい震えが伝わってくる。

「父さん、兄さん、祐介は本当にいい子だよ。俺を愛してくれてる。俺も祐を愛してる。」

「そんな感情は若いうちだけだ。」

「…父さんが認めてくれないなら、俺はこの家から捨てられたって

いい。」

「和真!?!」

「それほど祐は俺にとって大事な人なんだよ。」

「和真。本当に考え直すことはないんだな?」

「ああ。」

「そうかそうか…。」

そう言っつて父さんがため息をつく。

「祐介君、と言ったかな?君。」

祐介が顔を上げる。

その目は今にも涙が零れそうになっていた。

「…祐介君は、本当に和真のことを、その…恋人と思っているのかい?」

「はい…。」

「これからもその気持ちは変わらないと思っつかい?」

「…はい。」

そうかそうかと父さんが言う。

そして二度目の深いため息をついた。

「わかった…。和真の結婚の話は無しにしよう。」

「父さん…本当に？」

「ああ、仕方がない…。ここまでお互いを好きあっている若者を別れさせるのは酷だからな。」

「父さん…ありがとう。」

父さんがふつと笑った。

「その代わりに、和真。祐介君だけは、絶対になにがあっても守ると。泣かせないこと。わかったな？」

「はい。」

「啓吾もそれでいいだろう？」

「しかたがない…。けどそしたら俺が結婚しなきゃならないのかな？」

「うむ。そうだな。」

「まじか…。」

「いじめん兄ちゃん。」

「はいはい...。」

そうして俺の戦いは終わった。

話が終わった後も俺と祐はその部屋に残っていた。

いや、緊張から開放されて、動けなかった。

「和……。良かった……。」

祐が俺に寄りかかってくる。

その重さも心地好い。

「ほんとに。まさか認めてもらえるとは思ってなかった。」

「いいお父さんとお兄さんだね。」

「そうか？」

「そうだよ。」

祐の言う通りなのかもしれない。

この世には他人の圧力で離れ離れにされた恋人の数は数知れないだろう。

大事な人を守るために他のなにかを犠牲にした人もいるだろう。

俺たちがその道を辿ることにならなかったのは奇跡に近いものだったのかもしれない。

「公認カップルおめでとございまああああす……!……!……!」

居間の中に徹の馬鹿声が響く。

正直かなり五月蠅い。

きつとみんなもそう思っているだろうけど、今日は誰も何も言わなかった。

今日は和真さんと祐介の無事帰還を祝ってパーティーをしている。

「いやいや本当に良かったなーお前ら。」

祐介の兄である大祐がしばしと祐介の背中を叩く。

「ありがとう。」

と祐介が気恥ずかしそうに言う。

「ほんとに良かったねー二人とも。まさか和真のお父さんが認めるなんて思ってたよ。」

と、理垢さん。

「意外とあっさり。」

と和真。

「いえーい！今日は明日まで騒ぐぜ！な、大祐！？」

「ばーか、お前明日学校だろ？俺たちはいいけど、な！？」

そう言って大祐が和真の肩をぐいと掴む。

そして大祐はにやりと笑って徹斗を見る。

「ほらほら学生さんはちゃんと早く寝なさいよ。」

「ずっけーぞ、大祐！」

「はっはっは。これが大人の特権だ！」

「精神年齢低いくせに。」

と理垢さんが横から突っ込む。

「理垢、それは俺がいつまでも子供の心を忘れないって、いいことなんだぞ!？」

もはや意味不明。

「もう五月蠅いからさっさと寝てよ二人とも…。」

「あゝっ!？俺まで巻き込まれたじゃねーか大祐！」

「うっせ！俺とお前はどっせ運命共同体なんだ！」

「どっせってなんだよ!？」

「お前なんかどっせ、だ。」

「聞き捨てなんねーぞ!？それに俺は大祐なんかと運命を共に、なんてしたくねえ!。」

そうしていつものように二人は騒ぎながら部屋へ引き上げていった。

今日もきつとどちらかの部屋でまた騒ぎ出すのだろう。

「祐介と潤もそろそろ寝たほうがいいんじゃない?もうすぐ0:00なるよ。」

理垢さんが時計を見ながら言う。

「じゃあ俺寝るね。お休み。」

そうして俺も部屋へ帰って寝た。

そして次の日、僕と潤と徹斗はいつもどおり学校へ向かった。

「ゆうすけちゃんっ！」

後ろからとんとんと肩を叩かれる。

振り向けばそこには凧。

あの日以来、凧とは喋っていなかった。

「おはよー。」

と凧が僕に挨拶。

いつもと変わらない凧にちょっと安堵した。

「おはよう。」

と返事をする。

「あ！潤君だー！朝から会えるなんて嬉しいよー。」

そう言って凧が潤に抱きつく。

「お前っ！潤に触んなっ！」

と、徹斗が牙をむく。

「あれれ？君は確か徹斗君？だっけ？残念だなあー。綺麗な顔だけど、俺の趣味じゃない。」

「なぜそうなる！？」

そして徹斗が凧を潤から引き剥がす。

そんな3人を傍観していた祐介が口を開く。

「あ、二人とも先に学校行ってて？ちょっと話があるから……。」

「……？わかった。行くぞ潤！」

そうして徹斗は、いきなり凧に抱きつかれフリーズした潤の手を引いて学校へ向かった。

「凧、この間の話のことで話があるんだけど。」

「なに？祐介ちゃん。」

「僕、やっぱり凧の気持ちには応えられない。ごめん……。」

凧がふと笑った。

その笑顔の中には悲しみの顔も混ざっていた。

「これで祐介ちゃんに振られたのは二度目だよ。」

「ごめんね……。やっぱり僕には和しかいないんだ。」

「そっか……。やっぱり俺じゃあ、あのおにーさんに勝てないか。」

「凧…、凧にもきつと、いつか素敵な人と出会えるよ。」

「そっだといいいけど。」

そう言っつて凧がまた笑う。

「じゃ、学校行くところか？」

「おっ。」

凧が無理やりテンションを上げる。

そうして僕たちは久々に平穏な気持ちで学校へと向かった。

大切な人を選んだために、ほかの誰かを傷つける。

人間とは、なんて残酷な生き物なのだろう。

クールな男と僕

その男に出会ったことで、僕は…。

「お、可愛い男の子はっけ〜ん。」

「ムムムムムム〜」

「。子。の。子。」

「あつ、ほんとだー、今までで一番じゃね？」

「ねえ君、お兄さんたちと遊んでかない？」

「楽しい」としよつぜ。」

夜の若者が集まる、ネオンが輝いている街を歩いていると、絶対聞
く、この言葉。

…僕には怖い言葉。

無視して歩いていてもそういう輩やからは纏まとわりついてくる。

今日はいつもより人数が多い、5人。

「ねえ君、無視？」

「無視はよくないよー？」

「もしかしてツンデレ！？」

「やっべえ！俺それ好きー。」

そしてその中の一人に僕は腕を掴まれてしまった。

「痛っ…！放してよ…っ…！」

振り払おうとしても相手の力が強すぎた。

「へへっ！声まで可愛いなんて最高だなあ！？」

「ほーんと、ヤリがいがあるなあ。」

そうして僕はぐいぐいと引っ張られ、とあるホテルへ連れて行かれた。

ああ、今日は本当にだめかもしれない。

今日みたいに声を掛けられたのは1度や2度ではない。

でもまさか今日はホテルに連れ込まれるなんて…。

恐怖心が滲み出す。

その5人の男達は、意外と高そうな、綺麗なホテルを選んだ。

意外と金持ちなのかなとか思ってしまう。

受付には、クールな格好いい人が1人。

その男の人は僕らを見て、なにか悟ったようだった。

きつと、僕の目に涙が浮かんでいたから、なにか違和感を感じたの
だろう。

その男の人は僕の目を捕らえ、なにか口だけで言った。

僕にはそれが、待ってる、というように見えた。

連れて行かれた部屋は結構上の階。

逃げたくても逃げれない。

逃げ道は入り口の1つだけ。

「なあ、こいつと遊ぶ前に腹ごしらえしねえ?」

「そうだな、酒と薬ヤク飲めばもっと楽しめるぜ!??」

「ははは!それもそうだな!」

そう言つて男たちは仲間の1人を僕の監視役として置いて、出て行った。

僕は1人残された男にいろいろ話しかけられたけど、全部無視。

しばらくすると、廊下からノックの音。

「誰だ?」

残された男が言う。

「ルームサービスのご注文でございます。」

「ルームサービスだあ？んなもん頼んでねーよ。」

「先ほど、この部屋を予約した方からこちらの部屋に届けるようにと仰せつかっているのですが。」

「ああ、そういうこと。」

そう言って男がドアを開ける。

ばきつとするどい音が部屋の中に響く。

僕にはなにが起こったのかわからなかった。

男が倒れる。

その向こうにはさっき受付で見たクール顔の人。

「無事か…？」

そのクールな人が言う。

「は、はい…。」

なにがなんだかわからないけど、とりあえず助かったみたい。

「来い。ほかの奴らがもうじき来る。」

その男の人が僕に手を差し出す。

僕はその手を掴んだ。

僕はその男の人に連れられ、そのホテルの裏通路を通った。

僕はその男の人に手を引かれながら歩いた。

その人が後ろにいる僕にちらりと視線を向ける。

「お前、中学生か？」

「はい…。来年で高校ですけど…」

「ふーん。大変だな。その顔じゃ。」

「…。」

その後僕達はしばらく無言で歩いた。

ふいに頭に浮かんだ質問を試してみる。

「あ…。助けられてありがとうございます。でもなんで…？」

「…別に。」

男の人が無愛想に答える。

「そうですか…。」

僕はこういっしかなかった。

「ほら、出口だ。」

気づけば外へ通ずる道へ出ていた。

「本当にありがとうございました。」

「ああ、もうこちら辺には夜近づくな。」

「…はい。」

「もう行け。見つかると今度こそやばい。」

「はい。あのっ…今度なにかお礼させてください。」

「いい。」

「でも…。」

そんな僕を見て、男の人が諦めたように言う。

「わかった…。はい。」

そう言って男の人が名刺を取り出し、僕に渡す。

「そこに電話番号書いてあるから。」

そう言って男の人は戻って行った。

もらった名刺を家へ帰ってからしげしげと見た。

名前は和真と書いてあった。

和真。

僕はその言葉を頭の中に刻んだ。

そして僕が男たちに危うく犯されそうになってから早数日。

助けてくれた男の人に何度も連絡しようと思った。

だけど、なぜだか僕は電話するのに抵抗感を感じていた。

ここのところよく眠れない。

頭の中にはあの日の出来事。

そして和真という名の男の人。

あの人のことを考えただけで胸が動悸してしまう。

なぜなのか。

その答えはわかっていた気がする。

恋…？

ただどここんなことあり得ない、と自分を押し込んできた。

ただどここれもそろそろ限界。

そんな僕は和真という男に電話を掛けることにした。

呼び出し音が鳴る。

しばらくすると相手が出た音がした。

だけど相手は無言。

「あ、あの…。」

「…。」

「か、和真さんですか…?」

「…そうだけど。」

あのと聞き聞いた声と同じ声がやっと応える。

「あの、この間助けてもらった…。」

「ああ。」

和真さんが思い出したように応えてくれた。

正直、覚えられていなかったらどうしようかと不安だった。

「連絡が遅くなってしまつてごめんなさい。」

「べつに。」

「あの、最近できたレストラン知ってますか？」

「ああ。」

「今度そこで食事しませんか？お礼として。」

「いい。」

「ええつ。」

この間と言っていることが違うよこの人。

「面倒くさい。」

ぼそりと呟かれた言葉もなかなか酷い。

「そ、そんなこと言わずに！…だめですか？」

「…いいよ。」

この人は本当に面倒くさがりなんだと思った。

他人と話すのだって、なにか話しにすれ違いが生じれば面倒くさいから相手に合わせる。

そういう人なんだろう。

「じゃあ明日でいいですか？日曜日ですし。」

「ああ。」

「じゃあ明日の12:00くらいにレストランでいいですか？」

「ああ。」

「…じゃあ、よろしくお願いします。」

「ああ。」

そう言って和真さんが電話を切った。

僕を助けてくれた日とは少し違う。

なんだか冷たい…。

そして次の日僕は約束の時間より少し早く行った。

きっとあの人のことだから、時間より遅れてくるんだろうなあとか思った。

案の定、和真さんは約束の時間より20分も遅れてやってきた。

「こんにちは。」

「ああ。」

僕が挨拶しても返事はこれだけ。

「じゃ、入りましょうか？」

そうやって僕は中へ入った。

選んだレストランは割りと高級なところ。

僕がこういう所に来れるのは両親のおかげだ。

そうして僕たちは各々の注文をした。

料理の出てくるまでの間、なにを話したらいいのかわからない。

この人とは。

「あの、和真さんは大学生ですか？」

「そうだけど。」

「大学ってやっぱり楽しいですか？」

「別に…、普通。」

「そうですか…。」

なんだろう。

僕はこの人に嫌われてるのかな？

ぜんぜん会話が続かないよ…。

そうこうしているうちに料理が運ばれてきた。

そこでも僕は他愛もない会話をした。

一方的にだけど…。

やっぱりこの人は口数が少ない。

こっちが不安になるくらい。

「ごちそうさまでした。美味しかったですね！」

「ああ。。。」

「じゃ、僕お会計してきます。」

そう言って席を立とうとした僕の手を和真が掴む。

「…どうかしましたか？」

「金はいい。」

「え、でも、お礼ですから。」

「いい、ここは家の店だ。」

「…え？」

「だから俺が話通せば、別に金はいらない。」

そう言っつて和真さんが裏のスタッフオンリーと書かれている部屋へと入っつていく。

「そ、そんなあ…。」

そつういふことはもつと早く言っつて欲しい…。

僕はそつ思わづにはいられなかつた。

「なんかすいません…。僕がご馳走になつたみたいになつて…。」
レストランを出た後、僕たちはぶらぶらと賑わつた街の中を歩いて

いた。

「別に…。」

相変わらず口数が少ない。

「あの…、和真さん、僕なにかしましたか…？」

耐え切れなくなった僕は和真さんに聞いてみる。

「…は？」

和真さんが少なからず驚いたような表情で僕を見る。

「だって…、あんまり口きいてくれないし…。」

そう言っただけ僕は自分の足元を見つめた。

こんなことを正面きって言えるような勇氣は僕には無い。

そんな僕の頭に和真さんの大きな手が置かれた。

「…悪い。」

「…え？」

「俺、もともと口数少ないけど、気になった奴の前だと、もっと無理。」

気になった…奴…？

和真さんを見れば、その顔が少し恥ずかしそうに、横を向いていた。

「…あの時渡したやつ、まだ持ってるか？」

唐突に和真さんが僕に聞く。

「はい…。」

和真さんの名刺。

「…無くすなよ。」

そう言って和真さんが僕に背をむけ、人ごみの中へと溶けていく。

「無くすなよ。」

その言葉にはまたいつでも連絡してもいい。

そう言っているように。

僕は雑踏ざつとつの中へと消えていく和真さんの広い背中を見つめていた。

その姿が見えなくなっても、僕は人ごみを見つめたまま動かなかっ

た。

？

季節は夏。

今年の夏はつだるような暑さ。

「今年の夏はどうする？」

あと少しで夏休みというときのある日。

理垢さんが夕食ついでにみんなに聞いた。

ここでは毎年夏休みには皆でどこかに遊びに行くことになっているらしい。

理垢さんに聞いた話だ。

「去年は和真ん家の別荘行つたんだよな。」
と、大祐。

「そうそう。やっぱり軽井沢は涼しかったねえ。」
と、祐介。

「今年はどうする？」
と、和真さん。

「徹斗、なんか行きたいところない？」

理垢さんが徹に話題を振る。

「んーと。海と花火とお化け屋敷がいい！」

「欲張りだなあ。」

そう言つて理垢さんが苦笑する。

「あ、じゃあ俺らん家の別荘どーよ？」

俺らと言いながら大祐が祐介を見る。

「大祐と祐介の？」

「おう！家の別荘は海近いし、あそこらへんで毎年結構デカイ祭やるみたいだし。そしたら花火も見れるしな！」

「いいねー！最高！！はい決定！」

大祐と徹が盛り上がる。

そんな二人の横で理垢さんが祐介に聞く。

「大祐はああ言ってるけどいいの？家の人のお邪魔じゃない？」

そんな理垢さんに祐介が笑って首を振る。

「じゃあ今年はそうしようか。和真も潤もいい？」

「ああ。」

「うん。」

「いよっしゃあ！早速準備だ準備！行くぞ大祐！」

「準備くらい一人でしろ！徹斗。」

例によって例のごとく二人は部屋へと引き上げていく。

「祐介？いいの？俺までお邪魔して…。」

今年来たばかりの俺はちょっとしどろもどろ。

「うん！今年は潤もいるからきつと楽しくなるね！」

「…ありがとう。」

まっすぐに祐介に言われて、少し気恥ずかしい。

「いつ行くんだ？」

和真さんが尋ねる。

「祐介、いつがいいの？」

「いつでもいいはずだよー。」

「じゃあ来週くらいは？」

「わかった。お父さんとお母さんに言っておくね。」

「よろしく。」

そうして祐介も部屋へ戻っていった。

その後、和真が続く。

この二人はいつでもどこでも一緒にいる。

特にあの時以来、ずっと。

「潤、潤も準備しといてね？」

「うん。」

そう言って俺も部屋へと向かう。

父さんと母さんが死んでからわくわくしたのは久しぶりのことだったかもしれない。

そうして時は過ぎ、いよいよ待望の夏休みを迎えた。

そして俺達は今、大祐と祐介の別荘へと車で向かっている。

運転は理垢さん。

その横は俺。

真ん中のシートには和真と祐介。

その後ろは大祐と徹、といつもの分かれ方。

「うおお！海だ！海が見えるぞ！」

すでに徹はテンションマックス状態。

「うるさいぞ徹斗！騒ぐな、ばかが。」

「なんだよ大祐！いいじゃんか！お前もテンションやべーだろ！？」

「別に。」

「うおお…なんだそのテンションは…！」

最後部座席で騒ぐ徹と大祐の前のシートでは、和真と祐介が二人きりの世界を満喫中。

「和、これすっごいおいしいよ！」

そう言って祐介が和真にお菓子を見せる。

「なにそれ？」

「新商品のポッキー！」

「美味しい？」

「うん！はい和も！あーん。」

「。。。うまい。」

「ね？美味しいね！」

「あ、祐、ココ、ついてる。」

ココと言って和真さんが祐介の口の横についたチョコレートで自分の指で拭き取る。

そしてそのまま指を舐めてしまう。

「和…、ありがとう。」

「ああ。」

そんな感じで二人はいちゃいちゃ。

そんな二人の前、一番前の座席の俺と理垢さんはごく普通にドライブを満喫していた。

運転している理垢さんはサングラスをかけている。
なかなか格好いい。

「潤、疲れてる？」

しばらく窓の外をぼーっと眺めていた俺に、理垢さんが前を見たま
ま聞く。

「え…、ああ。ちょっとだけ。」

車に乗ってから早5時間。

いい加減疲れてきてしまった。

「もうすぐ着くけど…、寝る？着いたら起こしてあげるから。」

「ありがとう…。」

そう言って俺は眠った。

「じゅーん。着いたぞ！」

そう言つて徹斗が潤をゆさゆさ揺さぶるけど、潤は爆睡。

「仕方ない…。僕連れてくからみんな先に行つてて。」

「おう。理垢の荷物持つてつとくな？」

「ああ、ありがとう大祐。」

「おら徹斗！潤の荷物持て！」

「はいはい。」

そう言つて4人は一足先に大祐と祐介の別荘へと入っていく。

残つた僕は座席に座つたまま潤の寝顔を見つめる。

「…気持ちよそつに寝ちゃつて…。」

僕はそんな潤の寝顔を見ると、あの日のことを思い出さずにはいられなかった。

あの日、僕は潤に気持ちをぶつけた。

あれからは特になにも進展は無い。

自分の大切な人が嫌なら仕方が無い。

そう思ってきたけれど、やっぱり少し、つらい。

「…潤…。」

呼びかけてみるけれど寝息はそのまま。

「じゅーん。」

揺すってみたらやっと潤が薄く目をあける。

「…ん…。」

「起きた？」

「あれ…もう着いた…？」

「うん。他の4人はもう中に入ってるよ。」

「え？あれ？も、もしかして、理垢さん俺起きるまで待っててくれたの…？」

「うん。起こすって約束したし。」

「あああごめんなさいっ！」

潤がわたわたと慌てる。

「いいよ。行くう。」

「う、うん。」

そうして俺は理垢さんと一緒に大祐、祐介の家の豪華な別荘へとお邪魔した。

「あ、潤！おっせーよ！」

徹が俺の肩に腕をまわして言う。

「ご、ごめん。」

奥から大祐が出てくる。

「潤、部屋案内すつから来いよ。理垢も。」

「ああ。」

「行くぞ潤！」

徹が威勢良く言う。

「うん。」

そうして俺は徹に捕まったまま大祐について行った。

案内された部屋はこれまたやっぱり豪華。

「悪いけど、部屋数あんまり無くてさ。部屋、理垢と潤、一緒にいいよな？」

「ああ。」

「うん。」

「理垢？潤に手えだすなよ？」

徹がそう言って笑う。

「相変わらず徹斗君は頭がおかしいようだ。」

そう言っつて理垢さんは無表情のまま徹を一蹴。

「おお怖っ!」

「ほらほらさっさと自分の部屋へ帰った帰った!」

理垢さんが徹と大祐を追い出す。

「…ったく、徹斗のやつ…。」

「…。」

徹の冗談の言葉が俺たちの間では冗談ではない。

「潤、別に手、出したりしないから。」

理垢さんが困ったように笑いながら言っつ。

「え!?!や、あの、別にそんなこと気にしてないから…!」

「そっつ…。」

うわー！。

超気まずい…。

徹め…。

俺はこのとき少なからず徹を恨んだ。

そして次の日。

「海！海！早く行こうぜ〜！」

現在早朝、6：00。

「おい徹斗。お前ふざけんなよこんな時間に起こしやがって…！」

あからさまに不機嫌な顔をしたまま俺は徹斗の頭を叩いた。

俺と徹斗は同じ部屋に泊まっている。

いつも一緒に馬鹿やってるけど、今回は部屋が一緒。

単純に、楽しい。

昨日は楽しくて楽しくて、寝たのはもう朝方。

だけど俺はいろいろ楽しすぎて、遠足前の小学生のごとく寝れなかった。

だから今日は昼くらいに起きようと思っていたのに…。

「こんな時間から海なんてありえねえ…。」

「いいじゃねえか。あいつらより一足先に行こうぜ!？」

「…入らないで散歩するだけならいいよ。」

「よっし!行こう!」

言いが早いのか、徹斗が俺の手をぐいと引っ張っていく。

俺はそれについて行った。

なんだかんだ言っても、こいつと一緒にいるのが楽しい。

「うおお！海なんて久々だあ！」

水際で徹斗がはしゃいでいる。

そんな徹斗を俺は遠くから見ている。

眺めながら俺はぼーっと考えていた。

祐介と和真がちゃんと恋人として付き合っていること。

別に男同士だから普通じゃないとか嫌悪感を持つとか、そういう訳ではない。

けど最近ふと感じてしまった。

友達として好き。

恋愛対象として好き。

この境はなんだ。

男と女だったらなんかわかるけど、男同士だとこれの境みたいなものがわからない。

「…大祐？なにしてんの。」

「あ？」

いつのまにやら俺の近くに来ていた徹斗が不思議そうに俺を見つめる。

考え過ぎてこいつが近くにきたのも気づかなかった。

「あ、ああ。考え事。」

「めっずらしいー。」

「うっせ。帰るぞ。」

「おう。」

俺は単純に徹斗を友達として好きだ。

だけど、この考えが俺の頭から離れないというのも事実だ。

そんな俺の心は自分でも驚くほど、動揺しているようだった。

？

「よし、今日はお化け屋敷行こう！」

威勢良い徹斗の声が部屋の中に響く。

「あー、そうしようか？なんか天気悪いし…。こんな日に海行っても楽しくないしね。」

と、理垢が言う。

そんなわけで俺たちは今日はお化け屋敷に行くことにした。

そのお化け屋敷は俺の家の別荘の割と近くにできた。

ここ最近できたばかりで、物凄く、怖いという噂だ。

そして、脅威の長さを誇っているという。

「はいはい！提案があるんですけどー！」

お化け屋敷へと車で向かうさながら、徹斗から提案。

「はい、なんですか徹斗君？」

と俺も調子を合わせる。

「お化け屋敷は、いつもと違うペアで入ることにしね？」

「なんで。」

すかさず前に座っている和真に反論される。

「たまにはいいじゃんか！楽しいと思うけどー。」

「いいんじゃない？ね、潤。」

「うん。いいと思う。」

と理垢と潤が賛成する。

「っつーわけだ！和真！」

「…。」

和真は顔に表情を余りださないけど、わかる。

愛しの祐介といけなくて残念だということが。

「いいじゃん和、たまにはさ。」

と、祐介。

「まさかお前にそんなこと言われるとはな…。」

和真が沈んだ声でぼそりと言っ。

「どっつする？組み合わせ。」

「…じゃんけんしよっぜ。」

と徹斗。

「よっし！やろう！」

と、俺。

「ばか、徹斗。僕運転中なんだけど？」

「理垢は余った奴とでいいだろ！？」

「なんて失礼な言い方…。」

「はいつ、せーの！」

その結果。

祐介と俺。

潤と徹斗。

理垢と和真。

「うわー！理垢と和真ペアぜってー盛り上がんねえだろ！」
と徹斗が笑う。

「そんなことないよなあ？和真。」

と、理垢が運転しながら言う。

「どうだか。」

「ひどいなあ。」

「祐介　！びびって泣くなよ！？」

「なっ泣かないよっ！」

「本当かー？」

「う、うん。」

と、俺は祐介をからかった。

「徹　！よろしくっ！」

理垢の隣に座っている潤の声が後ろに届く。

「おーっ！ー！」

徹斗もそれに返事をする。

「あ！どのペアが一番早く出てくれるか競争したら面白そう。」
と潤。

「いいねー！それ！のった！」

「えーじゃあ僕ものった！」

と徹斗と理垢。

と言うわけでみんな参加することになった。

「うおお、やっぱり噂どおりみたいだな…。怖そう。」

そのお化け屋敷は見るからに怖いオーラが放たれていた。

「だ、誰から行くの…?」

祐介は早くもびびって、和真を掴んでいる。

「潤！俺ら最初に行こうぜ！」

と、徹斗。

「えええ！？いきなり!?!」

「いいじゃんいいじゃん。はいレッツゴー。」

「頑張れ〜。」

そして潤と徹斗は一緒に入っていった。

結果からいうと、噂に違わぬ怖さだった。

超リアル生首なんてごろごろあるし、なんかどろどろした奴に追いかけられるし。

言葉じゃ言い尽くせないくらい、怖かった。

これじゃあ祐介が泣くのは確定だな。

「ただいま！」

と、徹斗。

「た、ただいま……。」「

疲労困憊の潤の声。

「その様子だとかなり怖かったか!？」

「やばいよ、これ…。ねえ徹？」

「そうかあ！？でも、ま、入ればわかるけどな！」

「じゃあ次僕ら行ってくるね。」

と言って理垢と和真が入っていく。

この大の大人二人は果たしてどうなって帰ってくるのだろうか。

それからしばらくして、二人は帰ってきた。

「ただいまー。」

と理垢。

割と普通。

「祐…、祐は絶対入らないほうがいいぞ。」

と和真。

「そ、そんなに怖いのか…？」

「たぶん祐には。」

「うう…。やっぱり行きたくないよお！」

「あ！？だめだぞ祐介！行くぞ！」

そう言つて俺は祐介を引つ張つていった。

「あああー和〜。」

「気をつけてな。」

と和真が心配そうに見送る。

この二人はなかなか帰つてこなかった。

俺たちは暇を持て余してアイスを食べたりして時間を潰していた。

待ちに待つて二人が帰ってきた。

「たっだいま。」

と俺は元気よく出た。

そんな俺の横にはやはり泣いた祐介。

「祐…。」

和真が急いで祐介の許へ行く。

「うっ…。和う…。怖かったよぉー！」

祐介が和真の胸の中で泣く。

どこでもいっちゃんいっちゃんしてるこいつら、なかなか凄いと思う。

「大祐！この勝負、俺と徹の勝ちだー！」

嬉しそうに潤が言う。

「くっそー！」

こんな些細なことだけど勝負事となればやっぱり悔しい。

「あー楽しかったねー。そろそろ行くところか？」

と理垢。

「次って祭か！？祭！？」

と徹斗が目を輝かせて聞く。

「そつだよ。」

「やった！」

徹斗がガッツポーズ。

そつして俺たちは次なる目的地の祭会場へと向かった。

まさか俺が祭会場で徹斗にあんなことをするなんて…。

このときは全くわからなかった。

？

俺たちは今祭に来ている。

俺たち、と言っても和真と理垢は来ていない。

お化け屋敷を出てからここへ来たはいいが、理垢と和真は俺たち4人を置いて一足先に別荘へ帰った。

和真は人ごみというものが嫌いで極力避ける。

理垢はここのところ体調がよくないらしくて、今ごろは別荘で休んでいるだろう。

最近の疲れも溜まっているのだろう。

祭の開催会場は別荘のすぐ近く。

だから歩いて帰れる距離。

「あー！たこ焼き！たこ焼き食いたい〜。」

徹斗がはしゃぐ。

その横には潤。

潤は林檎飴を舐めていた。

高校男児なのに似合う、と思ってしまった。

俺だったら林檎飴などと、かわいいものは公の面前では食えない。

「買えば？徹。」

「えー俺一人じゃ多いから潤半分」しようぜ！」

「いいよー。」

そう言つて二人は足早に屋台へと向かつていく。

ちよつとして二人が戻つてくる。

「潤、はい！あーんして。」

徹斗が言う。

「え？いいよ自分で食べるっ！」

「そう言わずにいゝはいはい。」

「う、ぐ…ぐ。」

徹斗が半強制的に潤の口にたこ焼きを押し込む。

「旨いか！？」

「あ、熱い…。」

潤がもごもごと応える。

俺はそんな様子を見てふと思った。

そういえば今日は徹斗はやけに潤とべったり。

だからどうとかそういうわけではないけどな……。

…。

なんだ…？

何で俺、イラついてんだ…？

ふいに気づいた自分の気持ち。

でも理由がわからない。

だけど、なんか不快。

やがて空に光が輝いた。

「わあ！花火だあ！」

祐介が天を仰ぐ。

つられて俺らも空を見上げる。

そこには大輪の火花の花。

「綺麗だね…。」

そう言う祐介の心の中の和真と一緒に見たかったという思いはその顔でわかった。

「あ、あっちでくじ引きやってる!」

と、潤が言うので空から目を離し、早速やってみることに。

「よし!これだっ!」

そう言って徹斗がくじをひとつ選ぶ。

そうして潤を促す。

「潤、引け!」

「うん。」

潤がひとつ選ぶ。

「じゃあ僕これ!」

祐介もひとつ。

「俺これ。」

俺もひとつ。

「せえのっ!」

徹斗の声を合図に俺たちは一斉に自分のくじを開く。

結果、全員はずれ。

「はいよ、残念賞だ。好きなの持っていきな。」

「ありがとうおじさん。」

屋台のおじさんがくれたのは色違いの熊のキーホルダー。

祐介は白、潤は青、徹は赤、俺は黄色。

「かわいい〜！」

祐介が目をきらきらさせる。

こいつは昔からかわいいものには目が無い。

「やったー！おそろー！」

「やったあ。」

潤と徹斗は単純に喜んでいる。

「潤！次、射的行こうぜ！」

そう言って徹斗は潤の手と自分の手を繋ぐ。

徹斗のはしゃぎ具合は一向に収まらない。

「…大祐？」

そうしてやっと気づいたのか、動かない俺に徹斗が声を掛ける。

「なんだよっ？？どうした!？」

徹斗がいつものようなテンションで俺に言う。

「…別に。」

そんな徹斗とは正反対に俺はぶっきらぼうに答えた。

「あつそ。」

だけど、徹斗は軽く受け流してしまっ。

そんな徹斗にイライラしてしまっている自分がいた。

潤、潤、潤。

…なんで…。

俺じゃない…？

「大祐、お前今、機嫌悪いだろ。」

徹斗がおもむろに口を開く。

「別に。」

と俺は繰り返す。

「嘘だ。」

「…お前が…。」

「あ？俺？」

徹斗が驚いたように俺を見る。

「なんだよ?」

「…わからないのか?」

「わっかんねーよ!」

まっすぐに見つめてくる徹斗の目を俺は見返して言った。

「ちょっと、来い。」

「え、おい!?!」

急に腕を掴まれ、徹斗が慌てる。

そうして俺は徹斗の腕を掴んだまま、人ごみの外へと引っ張って行った。

遠くから潤と祐介の声が聞こえてくる。

だけど俺はそんなことは気にならなかった。

「ねえ祐介。大祐どうしたんだろっね？」

「うん…。なんとなくわかってたけど…」

「わかってたってなにを？」

「潤、わかんなかった？お兄ちゃんちょっと嫉妬してるみたい。」

「嫉妬？誰に？何で？」

訳がわからず俺は祐介に質問を重ねる。

「うーん。たぶんだけど…。たぶん潤に。」

「俺！？」

「うん。今日なんだか徹斗、潤にべったりだったでしょ？」

「た、確かに…」

「いつも一緒に居た徹斗が急にそんな風になっちゃったから、かな？」

「…そういつと…」

「多分、だけどね。」

そう言って祐介は悲しげに笑った。

片思いのつらさを知っているような、そんな顔だった。

空には色とりどりの火花が散って、人々を楽しませている。

俺と徹斗はそんな空の下、人ごみとは離れた、あまり人のいない草原に座った。

徹斗が顔を上げて、空に輝いては消えていく花を眺めている。

だけど俺は、徹斗を見ていた。

「悪い…。」

さっきから機嫌が悪かった上に無理やり連れてきて。

そんな俺を見て徹斗がふうと息を吐く。

「別にいいけどよー。いきなりびっくりした。」

「ごめん…。」

「いいつて。」

そうして俺たちはしばらくの間、空に輝く花火を眺めていた。

やがて俺は口を開いた。

「なあ、徹斗…。ちょっと手え、出して?」

「なんだよ?」

徹斗が空から目を離し、俺を見る。

徹斗の横顔は花火のさまざまな色で照らされていた。

「いいから。」

「ん。」

そうやって徹斗が俺に向かって右手を突き出す。

俺はその手に自分の手を重ねる。

そしてその、徹斗の綺麗な指に自分の指を絡ませる。

「…大祐…？どうした？なんだよ…急に…」

徹斗が驚いた顔で俺を見る。

「…んや…。別に？」

適当にごまかす。

でもその手は離さない。

「べ、別にじゃねえだろ。なんだよ？言えよ。」

「うーん…。自分でも驚いてるんだけど。」

「うん。」

「俺、徹斗のこと、好きなのかも…?」

「…はああああ!?!?」

思わずでかい声が出てしまう。

「なんだろうね?今までそんなこと無かったのにさ。だけど、今わかったんだ…。なんか徹斗が俺以外の誰かと仲良くしてるのを見ると、なんていうか…嫌なんだよね。」

「大祐…?…つて!」

俺は徹斗の手を引っ張って、草の上に徹斗を倒した。

そして徹斗の顔の横に空いている手をつく。

「だ、大祐!?!」

徹斗が俺を見上げてくる。

その顔は赤くなって見えただけ、それは花火の光のせいなのか、それとも違うなにかなのかわからなかった。

「お前は今、なにを思っている？」

「だ、大祐？なんで俺達、こんなことになってんだよ…？」

「はぐらかすなよ。お前は俺のことどう思ってるんだ？」

いつもと違う、大祐が少し怖い。

「…どつって言われても…。」

「好きか？嫌いか？」

「嫌いじゃあないけどさ…。別に恋愛感情なんかじゃない。」

「…そうか。」

「だってそうだろ！？今までずっと親友だったのに、いきなりこんなこと言われたってすげー困るんだよ。」

「…悪い。」

徹斗が俺をぐいと押して起き上がる。

「俺は大祐のこと好きだ！だけどそれは友達としてなんだよ。」

「うん。」

「お前だってそうだろ？」

「…わかんない。」

「わかんないってお前…。じゃあぶっちゃけ聞くぞ？」

「うん。」

「お前は俺と一緒に寝てどっころうしたいって思っわけ？」

「…思わない、かな？」

「じゃあそれは恋愛感情とかじゃないな。」

「そうなのか…？」

「そうだろ。」

「うーん。じゃあこれはなんだ？」

「…知らねえよ。」

徹斗が困ったような顔をする。

好きな奴にそんな顔をさせてしまった自分が不甲斐無い。

「悪かったな。この話は忘れてくれ。」

「…。」

「なんだよ徹斗。」

急に徹斗が黙り込んでしまう。

少し開いた間の後、徹斗がぼつりと言う。

「お前はそれでいいのかよ…？大丈夫なのかよ？」

「え？」

「お前がそんなに悩んでるのに…、俺…なんもしてやれない。」

「徹斗…。」

こんな話をしたら徹斗に遠巻きにされるかもしれないと心の底で思

っていたけど、あいつはこんな俺のことを考えてくれた。

「どっしょっしょ。」

「…じゃあ徹斗。これから俺とずっと一緒にいて。そしたら多分、このもやもやの気持ちがなくなると思う。」

「…そんなにいいのか？」

「そんなんって…。俺にはすげー大事なんだぜ？」

「…わかったよ。」

「どーも。」

ずっと握っていた徹斗の手に力がこもる。

今まで一方的に握っていた俺の手を今は徹斗の手が握ってくれる。

この繋いだ手はいつまで繋いでいられるだろう。

恋愛ではなく親友といった関係ではいつかは離れてしまっただろうか。

だけど今は親友としても繋いでいたい。

俺にはこの手が必要なんだ…。

?

「……じゅんじゅん」

俺こと潤は、突然降り始めた雨の中、学校から帰宅中だった。

だけど、傘が無くて走っていた。

それなのに……。

俺は目の前にある段ボール箱に目を落とす。

そこにはまだ産まれたばかりであるう子猫が弱々しく鳴いていた。

捨て猫だっことはわかるし、よくある話だ。

だけど俺はどうしてもこいつが放っておけなかった。

「うー…。どっしりっしりっしり」

家はマンションである。

もちろんペット禁止。

つれて帰るわけには行かないけれど…。

このままここで放っておいたら死んでしまっただろう。

俺は自分が雨にずぶぬれになってしまったことも気にせずつったってしばらく考えていた。

「…仕方ない。」

そう言っつて俺は子猫を抱き上げた。

それは俺の手の中で小さく鼓動していた。

そうして俺は子猫を抱え、再びマンションへと走って行った。

「おかえり潤。って、どうしたの。びっしょびっしょ…。」

「傘、忘れちゃって…。」

理垢さんは今日は会社が休みで家に居た。

「み…。」

俺の腕の中で子猫が鳴く。

「…ん？」

俺の腕の中に居る猫は小さくて理垢さんからは見えない。

「あ、あのっ…。」

つれてきてしまったことをどう説明しようか…。

やがて猫が俺の腕の中から顔を出した。

「猫!？」

「理垢さんごめんなさい!この子道端に捨てられてたんだ。」

「捨て猫…。」

「俺どうしても放つて置けなくて…!」

弁解する俺の前で、理垢さんは子猫に手を伸ばし抱き上げた。

「…君も僕と同じなんだね…。」

小さく呟かれた言葉の意味は俺にはわからなかった。

「…理垢さん…?」

「ん?なんでもないよ。」

そう言って理垢さんは笑った。

「で、どうするのこの子。」

「こじじゃ飼えないですよね…。」

「残念だけどだめだね。」

「俺…、誰か飼ってくれる人探してみます。」

「うん、それがいいね。僕も探してみるから。」

そうして俺たちは子猫を飼ってくれる人を探すことに。

「猫！？なんで猫居んの！？」

部活が終わり、学校から祐介と帰ってきた徹斗が嬉しそうに言う。

その横で祐介が子猫を抱き上げる。

当の子猫も祐介の腕の中でうとうととしていた。

「潤が拾ってきたんだ。ね、潤。」

夕食の準備をしながら理垢さんが応える。

「うん、うん。」

理垢さんの夕飯の手伝いをしていた俺もそれに応える。

「捨て猫？」

「うん。」

「へえー。」

そう言って徹が俺を見る。

「なに？」

「んやー、潤って優しいんだなあって思って。」

「べつ別にそんなんじゃないよ！ただ見捨てられなかっただけで…。」

「

「それが優しいってことじゃん？」

「そうだよ。」

と祐介がほんわかと言う。

完全に猫に癒されてしまっている。

「そうだよ潤。」

と、理垢さんまでもが賛同。

と、そこに和真さんと大祐が大学から帰宅。

この二人は同じ大学に通っている。

「たっだいまー！」

と大祐。

いつものように今日も元気が良い。

「ただいま。…なんだこいつは…。」

和真さんが祐介の腕の中に居る子猫に気づく。

「潤が拾ってきたんだって。」

徹が応える。

「見つかったら怒られるぞ。大家に。」

そう言っつて和真がふうと息を吐く。

和真さんは見た目どおりで、特に動物が好きでも嫌いでもないらしい。

要するに興味が無いってことなんだろうけど。

「いつまでここにおいて置くつもりだ？」

と、和真さん。

心なしか不機嫌そうだ。

そんな和真さんの態度にどうしたらいいのかわからない俺の代わり

に理垢さんが応えてくれた。

「飼い主が見つかるまでの間だって、和真。」

「和、この子捨て猫なんだって。かわいそうだから少しの間くらいここにいてもいいでしょ?」

と祐介が上目遣いで和真を見る。

別にそんな趣味は無い俺にも祐介が可愛く見えてしまった。

和真はイチコロだろう。

だけどそんな表情は顔にも出さない。

「…わかったよ。可愛いから許す。」

「どつちが。」

と大祐が横でボソリと呟く。

祐介が可愛いのか、猫が可愛いのか。

俺たちは後者だけど、和真だけは前者なのだろう。

子猫を拾ってからというもの、俺はクラスの友達で誰か飼ってくれ
る人はいないかと声を掛けていた。

だけど、不発。

未だだからも了承は得られないでいる。

「あ…。」

俺の目は教室の窓辺で空を眺めている一人の男子生徒を見つけた。

俺はそいつに近寄った。

「…あの、奏君、だよな？」

と、俺。

そこにいたのは奏という少年だった。

奏君と初めて会ったのは、学校の図書室。

奏君はそこで『帝王』に遊ばれていた。

あの時はこいつが同じクラスだなんてわからなかった。

「あ…、潤君…、なに？」

と奏君が応える。

奏君の声は柔らかくて、聞いていて心地よかった。

「あのさ、俺猫拾ったんだけど、奏君飼ってくれないかな？家マンシヨンでだめなんだよね。」

「猫…。」

「まだ子猫なんだ。」

奏君はしばらくだまってなにかに考えていた。

そしてやがて口を開いた。

「わかった。僕飼うよ。」

「本当！？ありがとう！」

奏君のような優しい奴だったら安心して任せられる。

「いつ渡せばいい？」

「うーん。今日は？早いほうがいいでしょ？」

「わかった！じゃあ学校終わったら家行くね。住所教えてくれる？」

「えーと、…。」

そういうわけで子猫の飼い主が見つかった。

嬉しいような寂しいような複雑な気持ちでした。

そして放課後、約束どおり俺は奏君の家へ行った。

家の前には門があったり、家がでかかったり。

奏君の家も金持ちなんだ、と思った。

呼び鈴を押す。

すると中から奏君が顔を出した。

「来たよ。」

「いらっしゃい。」

と奏君が門を押し開けてくれた。

「ほら、猫。」

俺は腕に抱いていた猫を奏君に見せた。

「うわぁ！可愛い！」

と、奏君は喜んでくれた。

腕の中の猫を奏君に渡す。

しばらく奏君は猫を撫でていた。

そしてその手がふいに止まった。

「潤君、ちょっと上がっていかない？」

奏君が俺をおどおどと俺を見つめる。

そんな奏君を見て、本当にこいつは女みたいに綺麗な顔をしている
なと思った。

「なんで？」

「ちょっと、話したいことがあるんだけど…。」

「わかった。」

「ありがとう。」

何の話だかさっぱり見当がつかないけれど、俺は奏君の家にお邪魔することにした。

高級そうな家具や装飾品を見ながら家の中を奥へと進む。

「ここ、僕の部屋。」

そう言って奏君があるドアを開けた。

「お邪魔します。」

「適当に座ってね。」

そう言われ、俺はものすごくふかふかのソファに座った。

奏君も俺の横に座る。

「話して？」

「…。。」「…。。」「…。。」「…。。」「…。。」「…。。」「…。。」「…。。」「…。。」「…。。」

「いいよ、言つて。」

「うん…。あのね、凧って人覚えてる？」

「凧？誰？」

「学校では通称、帝王つてことになってる人なんだけど…。」

「あぁっ！あいつかー！」

あの悪魔。

帝王こと、凧という名前らしい。

こいつには理垢さんと食事に行ったときに、あるうことかキスをされた。

別にそんな趣味がない俺には最悪の歴史として心の中に残ってしまっている。

あの後、なにかしら接触があるかと思つていたけれど、理垢さんのおかげでとりあえず平穏な日々をすごしていた。

それなのに。

その凧がいつたいたいなんなのだ…。

「で、そいつがなに…？」

「僕ね、凧のことが…好きなんだ…。」

まさか。

衝撃が俺の体を走り抜けた。

まさか、あの、帝王様を好きになるやつがこの世に居るだなんて…！

信じられない…。

いや、信じたくない！

「そ、それ、マジで言ってるの？」

「…うん。」

そう言った奏君はうつむいていて表情がわからないけれど、きつと恥ずかしがっているのだろう。

「それと俺、なんか関係あるの…？」

俺は恐る恐る聞いてみる。

凧に関わる話なんてきくと俺にとってはまずいものしかないだろう。

「あのね、凧の本命は3年生の祐介さんだったって知ってる？」

「え！？知らない…。」

初耳だ、そんな話。

「風、その人に振られちゃったみたいなんだ。」

「そりゃそうだよなー…。」

和真一筋の祐介があいつなんか振り向くわけない。

「それでね、今度は潤君が好きみたいなんだよね…。」

「なっ!?!?」

「だって…、最近潤君の話ばかりなんだもん。」

「だっ、だからって俺のことが好きだってことにはならないだろ!?!?」

「潤君って…、意外と恋愛に関しては鈍いんだね…。」

「う…。」

確かに俺はこれといって恋愛に関心があるわけではない。

今までそんなこと考えてる余裕なんてなかった。

「潤君はさ、風のことどう思ってるの?」

「ど、どつって…。好きじゃないけど…。」

「本当に?」

「本当に！」

「そっか…。」

僅かに奏が安堵の表情を浮かべた。

俺はふと浮かんだ言葉を口にした。

「あいつは奏君のこと、好きなんじゃないの？いつも一緒に居るみたいだし。」

あいつと奏君が一緒に居るところはよく目撃している。

「…僕はただの風の遊び相手みたいにしかわれてないんだよ…。」

奏君が悲しそうに言う。

そんな奏君の言葉が俺の心臓を締め付ける。

恋愛の本当の苦しみがここにはあった。

「そっか…。頑張つて。応援してる。」

「…うん。」

そうして俺は家へ帰るべく腰を上げた。

奏君が玄関まで見送ってくれた。

俺は帰り際、奏君に言った。

「奏君、きつとあんな奴でも、奏君の気持ち伝えたらきつと受け止めてくれるよ。」

「そうかな。」

「そうだよ。またなんかあったら言って。俺なんかでよかったら相談乗るから。」

「ありがとう。」

「じゃっ。」

そう言い残し、俺はマンションへ帰った。

？

「奏、おはよー。」

学校へ向かっているときに後ろから肩をぽんとたたかれた。

振り返ればそこには凧。

僕の好きな人。

「凧…。」

「なにー？ちゃんと挨拶しないとだめでしょー？」

「…おはよー。」

「はい、よろしい。」

そう言って凧は僕の頭をぽんぽんと叩く。

朝からスキンシップが多い。

ま、いつものことだけど…。

それに、少し嬉しい。

だけどそんな幸福の気持ちは一瞬で吹き飛んだ。

「あ、潤君だー!!」

遙か前方に居る潤君に目ざとく風が気づく。

潤君は風の存在にまだ気づいてはいない。

僕の横に居た風がたつと潤君の下へと走る。

僕はそんな風をとめることもできなくて。

ただただ、見ていることしかできなかった。

「潤君、おっはようっ!」

そう言うが早いか凧が潤君に抱きつく。

「げっ！お前！」

潤君が不快な表情で凧を見る。

そんな潤君の隣には、凧の恋していた祐介さんと2年の徹斗さんの姿も。

「だからっ！お前潤に触んなって！」

徹斗さんが凧を引っ張って潤君を救出。

「いいじゃん別にいー。あ、祐介ちゃんおはようっ！」

「おはよう凧。」

そう言って祐介さんがにこりと笑った。

やっぱりこの人はすごく可愛いと思う。

凧が惚れたのも納得がいく。

「なあ〜潤君、今度俺と二人で遊ばない？」

「はああ！？やだやだ！断ります！」

と、潤君が全力拒否。

「お前なに言ってるんだよ？潤がお前なんかと遊ぶわけねーだろうっ！」

と、徹斗さんが言う。

「ええー。じゃあチユ だけさせて？」

「え？や、いやいやいや！もっと嫌ですっ！！」

「悲しいなあ〜。」

と、凧が言う。

言葉とは反対に、悲しんでいるような様子はない。

むしろ潤君と朝から会えて嬉しそうだった。

「潤行くぞー！」

「うっ、うん。」

「じゃあな祐介！またあとでな！」

「うん。」

「じゃーねー、潤君！」

「お前、うっさい！」

と徹斗さんが一喝。

そして潤君と徹斗さんは校舎へと入っていった。

そんな二人を見送りながら凧が言う。

「ほんつとに潤君ってばかーわいー。」

「うん。潤はかわいいよ。」

「それにくらべて、なんだアイツは？生意気すぎじゃない？」

アイツとは徹斗さんのことであろう。

「うん。でもいい子だよ？」

「へー。全然そんなんに見えねー。」

そんな会話も終わり、祐介さんが口を開く。

「凧、僕たちも行くのか？」

「はいよー。行こ行こ！」

そうやって凧は祐介さんと並んで校舎へ入ろうとする。

「あれ？」

祐介さんが、少し離れたところに突っ立っていた僕に気づいた。

「あの子…。凧、いいの？」

祐介さんはどうやら僕と凧がいつも朝一緒に来ていることを知っているようだった。

「え？あ、奏。まだ居たんだ？」

凧の言葉に心が痛む。

「ちよつと凧…！」

そんな不躰な凧の言葉に祐介さんが注意する。

「行こ。祐介ちゃん。」

そうやって凧はずいずいと祐介さんを引っ張って校舎へと入っていった。

そうして一人残された僕の心はずたずたで、苦しかった。

「ちょっと、風！いいのあの子！？あんなふうに一人で置いてきて
」！

「なに？祐介ちゃん。奏がどうしたの。」

「どうしたって…。」

奏という子が風を好きだというのはなんとなく前から気づいていた。

凧といるあの子の顔はとても幸せそうで。

本当に凧のことが好きなんだろうなあと思っていた。

だけど凧は気づいていないのか、気づいていても知らないフリをしているのか。

それがわからない僕にはあの子のためにしてあげられることはなにも無い。

「いいんだよ、別に。俺と奏は別に特別な関係じゃないもん。遊んでるだけ。」

「…。」

奏という子は今とても苦しいだろう。

そしてこの凧を自分のものにするのはかなり大変なことだろう。

そして放課後。

僕は帰ろうと、下駄箱で靴を履いていた。

すると誰かが前に立った気配がした。

顔を上げればそこには凧が。

「凧…。」

「奏、今日お前ん家行ってもいい？」

凧が僕の家に来る、イコール家で遊ぶということ。

僕は今日も凧の遊び道具になるしかない。

遊び道具なんかじゃなくてちゃんと僕を見てほしい。

だけどそんなことを言えるわけもなくて。

「…いいよ。」

そう応えるしか、僕は風を繋ぎとめておくことができない。

「じゃっ、行こー！」

そうして僕は複雑な心境で家へと向かった。

「ただいま。」

そう言っても誰からも返事はない。

両親は夜になるまで帰ってこないからだ。

「…にー。」

と、奥から鳴き声がした。

そして奥からよたよたと歩いてくる子猫の姿が。

「なにあの猫！？どうしたの！？」

と、凧。

「潤君が拾ったの、貰ったんだ。」

そう言って僕は、僕の足元まで頑張って歩いてきた猫を抱き上げた。

子猫は嬉しそうにのどをごろごろと鳴らした。

飼ってまだ数日だけど、とても僕に懐いてくれて。

今となっては僕の痛んだ心を癒してくれる、そんな存在になった。

「にー、名前何？」

「名前？」

「うん。」

「名前…。」

そういえば決めていなかった。

「なにー？まだ決めてないの？じゃあ俺がつけてやる。」

そう言って凧が考え込む。

「よし！ミラクルサンダーストーンだ！」

「…なにそれ。」

「なんだよ、かっこいいだろ？」

「ストーンって石だよ…？それにサンダーって…。」

「強そうだろ。」

「…じゃあ頭の文字とってみーちゃんにする。」

「何、その可愛い感じの？」

「だって可愛いもん。この子。」

「それより早く奏の部屋行こー。」

そう言って凧は僕の腕を掴み、引っ張っていく。

部屋に入った凧は僕をベットへ押し倒す。

そうしていつものようにことが始まるのだ。

凧は結構荒い。

いつもそう。

相手のことなんて考えてないんじゃないかなって思ってしまったくらい。

別に相手が特別じゃないならなにも考えることなどないのだからうけれど。

いつもはそんな凧でも大好きなのに、今日は…。

「あれ？なんか奏、今日調子悪い？」

いつもと調子が違う僕に凧が気づく。

「そんなことはないよ…。」

「なんだよー。いつもくらいやってくれないと楽しくないんだけど？」

「…。」

人の気も知らないで言う凧。

何も応えない僕を見て、凧がベッドから降りる。

「…凧…？」

凧は帰り支度を始めていた。

「今のお前とやってもつまんねえ。帰る。」

そう言って凧が出て行ってしまった。

「凧…。」

呼びかけるけど返事はない。

「凧…、行かないでよ…。」

そう言っても凧は戻ってきてくれない。

そんなのわかってる。

だけど僕は耐え切れなくて、涙を落とした。

涙がポツリとシーツにしみを残した。

？

奏の家を出たものの、俺の欲求は収まらない。

・・・仕方ない。

他の奴のところに行くか。

そう思ったけど、実際一番やってて調子が合うのは奏なのだ。

そして仕方なく俺は家へと帰ることにした。

夕方、徹と祐介と三人で下校中のこと。

俺の携帯が鳴った。

電話ではなくメールの音。

ディスプレイを見れば、最近アドレス交換をしたばかりの奏の文字。どうしたのかと思いつつ、メールを開いてみた。

「え…。」

俺はその文字の羅列を見て目を見開かずには居られなかった。

「どっした潤？」

「こ、これ…。」

そうやって俺は携帯を徹と祐介の二人に見せた。

「…。」

「なんだよ…これ…」

ディスプレイに表示された文字にはこうあった。

『やっぱりもう僕はだめみたい。さようなら。みーちゃんの面倒、最後まで見れなくてごめん。』

「ちょっと、潤どついうことだよ!?!」

徹が俺を揺する。

「し、知らないよ!」

「あ…、凧…!凧なら何か知ってるかも!」

そう言って祐介が自分の携帯を取り出し、凧に電話を掛ける。

「もしもし、凧!?!」

「はい、祐介ちゃんどうしたの?」

祐介の電話から凧の能天気な声が漏れてくる。

「凧！あの子…、奏君になにかした！？」

「え？奏？どしたの急に。」

「今奏君から潤にメールが来て、もうだめだって！さようならって
！！」

「さようならって…。あいつ何する気？」

「知らないよ！とにかく今から学校に来てよ！僕たち居るから！」

「わかったよ…。」

そうして少しして凧が現れた。

「おっせーぞ！」

「なに、徹斗君。これでも急いで来たんだけどなあ。」

「そんなことより凧！本当になにも知らないの！？」

「知らないよ。」

「何もしてないの！？」

「してな…。あ。」

「なに？」

「うーん、今日の放課後のことかなあ？」

「放課後なにをしたの!？」

祐介に詰め寄られて凧が奏の家での出来事を話した。

「ちょっと…凧…。原因思いつきりそれだよ。」

祐介があきれたように凧を見る。

「なんで? そうなの?」

こいつはいろいろと鈍いらしい。

恋心とかそんなのよくわからない俺でも今の話は分かるのに。

「とにかく奏君に早く会わないと!」

そして俺たちは奏の家へと向かった。

「奏！居るか？」

あいつ、こと尻さんがドアを開けて玄関先で呼ぶ。

しかし家の中は静まり返っていてなにも音がしない。

「ミラクルサンダーストーン！」

ふいに尻さんが言った。

「な、なにそれ？暗号？」

と、祐介。

「違うよ。猫の名前。」

「え、猫の名前そんなのにしたんですか！？」

と俺。

「かつこいいだろ。」

「だっせー名前。しかも呼んでも来ねーじゃん。」
と徹がつっこむ。

「あれ、おっかしーな。みーちゃん！」

すると奥からにーと鳴き声がした。

だけど声がするだけで猫は出てこない。

「ちよっと奏の部屋見てくるわ。」

そう言って凧さんは奏君の家の中へと入っていった。

「奏？居るか？」

呼びかけてはみるものの、部屋の中は静まり返っている。

「奏？入るぞ。」

その声をかけて奏の部屋のドアを開けた。

電気がついていなくて、部屋の中は薄暗かった。

そして部屋の中には奏の姿は無かった。

「クー…。」

鳴き声がして下を見ると、そこにはみーちゃんがいた。

「みーちゃん。あいつどこだ？」

そんなこと言っても猫には応えることもできず。

しかし、みーちゃんの様子がおかしい。

ぷるぷると細かく震え、みーみーとか細く、寂しそうに鳴いていた。

奏のことが大好きなみーちゃんのそんな様子は俺の心を不安にさせた。

奏が居ない。

そんなの俺には関係ない。

遊び相手が一人減るだけ。

そう思っていたのに…。

「まったく！みーちゃんをこんなに心配させやがって…！」

自分の不安を隠したくて。

そう言って俺は部屋を出ようとした。

するとみーちゃんが俺のズボンの裾をその小さな歯で噛んで必死に

俺を引き止める。

俺はしゃがみ、みーちゃんをそっとなでた。

「…みーちゃん、奏を必ず連れてくるから。いい子で待ってて。」

そう言って俺は玄関へと戻った。

「奏は居なかった…。」

と、俺は祐介ちゃんに報告。

「うー…。風！他に心当たりあるところないの！？」

「んなこと言われても…。」

「奏君が好きな場所とか!」

「え〜? そんなのわかんない。」

「じゃあ一緒に行ったことあるところとか!」

「そんなのいつぱいあってわかんないよ。」

「じゃあ奏君の好きな場所で、一緒に行ったことあって、静かなところは?」

「うーん? …あ、町外れに丘あるだろ? そこで星見るのが好きとかなんとか言ってたことあったな!」

「よし。行くぞ!」

徹斗トウの声を合図に俺達は奏の家を出た。

その後ろでは、みーちゃんのか細い鳴き声が聞こえた。

「綺麗だなあ…。」

眩いた僕の上には満天の星空が広がっていた。

誰も居ない、静かな場所。

そんな所で星空を眺めていると、嫌なこと、苦しいこと、そんなことがなくなるような気がしていた。

けど今日はだめだった。

心の痛みは消えてくれない。

ここには一度凧と来たことがあった。

大好きな凧と見た星空は今の何倍も綺麗だったことを覚えている。

潤君にあのメールを送った後、僕は家を出た。

もうこんな苦しい思いをしたくなくて。

現実から、この世から消えてなくなりたくて。

そう思って、ここに来たけれど、実際この世から消えるのは難しく
て。

僕は星空を見上げながら、どっちらたらあそこに行けるのか、考え
ていた。

？

「丘ってあれだよな？」

祐介ちゃんが指差す方向には小高い丘。

「うん。」

走りながら俺は応える。

しばらくして俺たち4人は丘のふもとに着いた。

あたりはもう暗くなってしまっている。

「風、早く見てきてよ。」

祐介ちゃんが俺を押す。

「え？俺だけ？」

「当たり前でしょ！」

なにが当たり前なのか、どうして当たり前なのか分からなかったけど、祐介ちゃんの命令ならば仕方がない。

「はいはい。」

そう言って俺は丘を登り始めた。

「なあ祐介、もしかして奏君ってあいつのこと好き…なのか？」
と徹が言う。

「多分そうだと思うんだけど…。」

と祐介が自信なさげに答える。

「…奏君は本気である人のことが好きなんだよ。」

思わず俺は言った。

「そっか…。」

徹が呟く。

ここにも、また、男同士の恋愛があった。

この奏君の恋はどうなるかわからないけれど、この二人が結ばれたらお似合いだと思った。

少し歩くと丘の頂上に着いた。

「奏！居るか？」

「…風…？」

薄暗い闇の中から奏の声がした。

そして黒い影がむくつと起き上がるのが見えた。

俺はそれに近づいた。

そこにいるのはやはり奏だった。

「お前…！」

説教しようと言いかけた俺の口は途中で止まった。

薄暗くてよく見えなかったけれど、奏の目から流れる涙が見えたから。

奏が俺の前で泣いた事なんては今まで無かった。

だから俺は戸惑ってしまった。

「奏、なに泣いてんだよ？」

「…っ…っ…っ…っ…！」

「なに？…どうした。」

そう言っても奏は応えようとしなない。

そんな奏の姿を見て、さすがに放課後のことは悪かったかなと思っ
た。

「奏…、悪かったな。お前の家で言ったこと。」

「…いいよ…。気にしてないよ…。」

そう言っても相変わらず奏は泣き止まない。

「もー、謝ったんだから泣くのやめろよ。それともまた俺、なんか
したから泣いてんのか？」

「…違うよ…っ…。」

「じゃあなんだよ？」

「風がっ…！風が来てくれたことが嬉しいの…っ！」

「奏…？」

「…僕は、風の事が…、好きなのっ…。だから…。」

今言われた言葉が信じられない。

今まで本気で好きだなんて言われたことは一度もなかった。

好きと言われても上辺だけの付き合い。

俺は誰か一人に固執するような奴じゃないと思っていたからだ。

だけど、奏は涙を流してまで俺を好きだと言った。

この言葉は信じてもいいのか。

わからない。

だけど…。

この言葉を信じてみたい。

初めてそう思った。

「…奏、今の本気か？」

と凧が僕に問う。

「本気、だよ…っ…。」

「そうか。」

そう言っつて凧は僕の頬に手を添えて、顔を上げさせた。

そして僕の耳もとに口を近づける。

「しょうがねえなあ。お前の物モノになつてやる。」

そう囁かれた言葉が夢うつつか現まかわからない。

だけど僕の頬に触れている風の手の暖かさが、これは現^まだと証明してくれていた。

「風…大好き…！」

そう言って僕は風に抱きついた。

奏に抱きつかれて思わず俺の口から飛び出た本音。

「やっぱりお前だったんだな……。俺は奏じゃなきゃだめなんだな。」

今やっと気づいた自分の気持ち。

言葉に出して言うと、やっぱり俺は奏が好きなんだとわかった。

星が瞬く空の下、
凧が僕にキスをしてくれた。

それはいままでのものとは違った。

今までのとは違って優しかった。

そんな二人の頭上では無数の流星が降りそそいでいた。

「あ…。」

そう言って奏が膝から崩れ落ちた。

「奏！？どうした！？」

俺は慌てて奏の体を支えた。

「なんか…安心したら力抜けちゃった…。」

「…なんだよ…。。おら！」

そう言っつて俺は凧をお姫様抱っこした。

「え…なに!？」

奏が慌ててじたじたする。

けれど、奏と俺の体の大きさの差は明らかで。

「暴れんなよ。落ちる。」

「ううー。恥ずかしい…。」

そのまま俺達は丘を下りて行った。

「あ！風、奏君は…。」

俺の足音に祐介ちゃんが気づいたみたいだ。

あたりはすっかり暗くなってしまったてよく見えない。

祐介ちゃんからも奏の姿は見えない見たいだ。

「奏ならいるよ。」

「よかった…。」

そう言っつて祐介ちゃんはほっとしたようだった。

「ってあれ？奏寝ちやっつてんだけど。」

気づけば奏は俺に抱かれているのをいいことに、寝ていた。

泣き疲れただろうか。

「安心したんじゃない？」

そう言っつて祐介ちゃんは奏の頭をふわりと撫でた。

「しかたねーから俺、家まで届けてくるわ。」

「うん。気をつけてね。」

「ああ、心配かけたね、祐介ちゃん。ありがとう。潤君も、お前も。」

後ろで徹斗あいつが何か言っているみたいだったが、俺は聞こえていないふりをして奏の家へと向かった。

「ん……。」

目が覚めれば僕は自分のベッドに寝ていた。

今まで見ていたのは夢だったのかな……。

ぼーっと天井を見つめていると、その視界の中に人影が現れた。

「おはよ。」

「なっ、ななな風！？なんでっ!？」

「なんでって……、奏が寝たから届けに来たの。」

「あ……、夢じゃなかったんだ……。」

「夢？」

そう言って風が不思議そうに僕に聞く。

「つか、奏、お前寝すぎ。」

「寝すぎって、今何時……?」

「22:00。」

「もうこんな時間！？風、帰らなくて良いの！？それよりここ僕の
家だよね！？お父さんとお母さんは！？」

両親がいるのに風が家に居たら、さすがに少し気まずい。

というか、説明の仕様がな。

友達と偽っても、相手は年上だから不審に思われるかもしれない・
。

「あ、これ。置いてあった。」

そうやって風は僕に紙切れを差し出した。

そこには両親からのメッセージが。

なにやら今日はパーティがあるようで今晚は帰れないとのこと。

「というわけで、俺今日泊まってくから。」

そうやって風は僕のベッドに寝転がる。

そんな風の身体に僕はそつと頭を寄せた。

「凧・・・ありがとう。」

「あ？なにが？」

そう言っつて凧が僕を見る。

なにが、と言いながらも凧は分かっているのだろつ。

僕が本当に伝えたい、この言葉。

僕を愛してくれてありがとう。

？

夏休みも明け、奏君の事件も無事解決したそんな秋晴れの日。

「えー、今日は教育実習生を紹介するぞー。」

教室の中に担任の声が響いた。

その声に顔を上げれば、そこにはまだ大学出たばかりのような若い男の人が居た。

…俗に言うイケメン、だと思う。

その人を見た女子はと言うと、やっぱり騒がずにはいられないようだ…。

男子だって少なからず目の色を変えた奴、少しはいるんじゃないか

な…。

「えー、こちら、本城ほんじょうひろと宏人先生だ。科学の授業兼うちのクラスの副担任をしてもらう。」

「こんにちは。本城です。よろしくね。」

おねがいしまーすと、生徒たちの生き生きした声が教室を満たした。

そして放課後、SHRの時のこと。

本城先生が口を開いた。

「えっと、このクラスの科学の係りの人って誰？」

その言葉に、外を眺めていた俺は反応した。

「俺です。」

そうやって俺は軽く手を上げた。

「あ、君か。えーっと…、潤君？」

座席表で俺の席を探しながら本城先生が言う。

いきなり下の名前で生徒の名前呼ぶんだ…。

別にいいけど。

そんなことを考えていると、本城先生がじつと俺を見つめているのに気づいた。

「…どうかしましたか？」

「…いや？なんでもないよ。それより今日の放課後に実験室に来て手伝ってほしいことがあるんだ。」

「わかりました…。」

正直面倒くさいことこの上ないけれど、先生の言いつけならば仕方がない。

そんな俺とは反対に、クラスメート達からは羨ましいというような声が聞こえた。

そして放課後、俺は科学室へと向かった。

実験室は特別棟にあるため普通棟にある教室からは離れている。

ガラガラと音を立てて実験室のドアを開けた。

「よっ。」

ドアの先には本城先生が。

馴れ馴れしい挨拶に俺は少したじろぐ。

「早速だけど、手伝いお願いね？」

「はい…。」

「じゃあそつちにある薬の整理をお願いしようかなあ。」

「わかりました。」

そう言つて俺はもくもくと作業に熱中した。

本城先生は本城先生で作業をしながら俺に話しかける。

「潤君は部活とか入ってるの?」

「帰宅部です。」

「へえー。じゃあ兄弟とか居る?」

「…居ませんよ。」

俺には兄弟どころか血縁関係を持っているのはおじさんしかいない。

「潤君つてモテる?」

「は?」

「いやー、だつて綺麗な顔してるから、そうなのかなつて。」

「そんなことありませんよ。」

「ふーん。俺嫌いじゃないけどなあ〜潤君みたいな子。」

「…は!?!」

まずい。

これは…。

あの、戻って奴と同じ部類じゃないか？

「ええええっと、これはここでいいんですかね？」

慌てて話題を逸らし、作業に戻る。

「潤君って好きな人いるの？てか、付き合ってる人いる？」

背中に本城先生の視線が突き刺さる。

「い、居ませんよ。」

「ふーん。」

そう言つて本城先生も作業に戻る。

しばらくの沈黙を割くように俺の携帯が鳴った。

俺の学校では授業中以外ならば携帯を使っても怒られない。

「もしもし?」

「あ、潤？まだ学校？」

電話の相手は理垢さんだった。

「うん、学校。理垢さんは？」

「今仕事帰り。徹斗からさっきメールきてさ、潤がまだ学校に居るから一緒に帰って来いよって。」

すっかり外は暗くなってしまっているので、徹が考慮してくれたのだろう。

意外と気が利く。

「うーん…ちょっと待って。」

そう言っつて俺は本城先生を振り返った。

「先生、後作業どれくらいかかりますか？」

「いや、帰らなきゃならないなら今日はもういいよ。」

そう言っつて本城先生は煙草を取り出す。

本当は校内禁煙なのに。

そんなこと知っつてか知らないのか、煙草に火を点ける。

「あ、理垢さん？もうすぐ行くからちょっと待ってて。」

「了解。」

そう言っただけで電話が切れた。

「潤君…、今の電話の相手の人、理垢って言った？」

「え？言いましたけど…？」

「ふーん。」

「なんでですか？」

「…別に。さっ、もう帰るんだろ？暗くなっちゃったから校門まで送ってく。」

そうして俺と本城先生は校門へ向かった。

校門では理垢さんが待っていてくれた。

「理垢さん！」

「潤、お疲れ。」

そう言った理垢さんは俺の横にいる人に気づいた。

「えっと、先生？」

「うん。教育実習生の本城…、えーと…。」

「宏人。下の名前忘れないでよ潤君。」

「本城…宏人…？」

本城という珍しい苗字に理垢さんが眉根を寄せる。

そして理垢さんは本城先生の顔をまじまじと見つめた。

そんな理垢さんの様子を察して本城先生が親しげに口を開いた。

「よっ。りっくん。お前なんだろう？」

「宏兄…なの…？」

りっくんなんて呼び方するの、あの人しかいない…。

「正真正銘、俺だよ。」

「宏兄…！」

やっぱり、あんだだっ たんだ…！

そう言っ て理垢さんと本城先生は抱き合っ た。

「ほんつと久しぶりだなあー。昔の面影そのまんまだな、理垢。」

「宏兄も変わってない。」

「あの…。」

完全においてかれた俺。

状況が飲み込めない。

だって理垢さん、兄弟いないって言ってたよ？

「あ、ごめん、潤。この人はね、僕が施設に居たときに兄みたいに慕ってた人。」

「施設？何の？」

「うーん…。あんまり言いたくなかったんだけど、仕方ないか…。」

そう言っただけで理垢さんは説明してくれた。

理垢さんには両親が居ないこと。

捨てられた子だったこと。

そして孤児施設で育ったこと。

「そういうわけ。」

説明し終わった理垢さんは悲しげに笑った。

俺も理垢さんも両親が居ないのは一緒だけど、理垢さんのほうが何倍も苦しい別れ方だったことを知った。

「宏兄、また今度ゆっくり会おうよ。」

そう言った理垢さんの笑顔はとても輝いていた。

本当に再会を喜んでいる。

「もちろん。」

そうやって二人は電話番号を交換。

「じゃっ。」

そうやって俺を連れて帰りかけた理垢さんの手を本城先生は掴む。

そして俺には聞こえないように理垢さんの耳元でなにか囁いた。

「あの子、お前の何？」

僕の耳元で宏兄が囁く。

「…え？」

「俺にはわかるよ。小さい頃ずっと一緒に居たんだから。」

「…。」

昔からそう。

僕の嘘や隠し事はこの人だけには通用しない。

「俺、あの子、結構好きかも？」

ふいに宏兄が言う。

「…!？」

そんな僕の驚いたような表情を見て、ふふつと宏兄が笑った。

そこにいるのは、昔の宏兄ではなかった。

僕にはその人が黒く、冷たい影にしか見えなかった。

?

宏兄との思わぬ再会を果たしたその夜。

宏兄と話ができるという期待と先刻言われた言葉の恐怖が胸の中で葛藤するけれど、僕は宏兄へと電話を掛けた。

静まり返った闇の中に小さく音が響く。

数回鳴った後に宏兄が電話に出る。

「はい？」

「僕だけだ。」

「あたりっくん。どうかした？」

「ん…、どうってわけじゃないけどさ。」

「どーしたの？」

ただただ、先ほど言われた言葉が、怖い。

「おい。もしもーし？」

「ん、あ、ごめん…。」

「なに…？ぶっしたの？もっ…。」

「…。」

僕が無言でいると、宏兄がふつとため息を吐く音が聞こえた。

「りっくん、明日、会おう？」

「え…。」

「会って二人で話しよう？」

「うん。」

「じゃあ明日、お前の家行っていい？学校終わったら寄る。」

「わかった。」

「じゃあ俺、道わかんないから潤君と一緒に行くね？」

「…う、うん。」

ズキッと心が痛む感覚がした。

「じゃあ明日、楽しみにしてるよ？」

そう言って電話は切れた。

「潤くん！ちよい待った！」

俺が帰ろうとすると後ろから本城先生がやって来た。

「はい？」

まさか今日も手伝えとか言っつなよ……。

「今日さ、りつくと会う約束してるんだけど道わかんないから連れて行って？」

マジすか……。

なんでこうなるんだ……。

それって一緒に帰るってことだよ……？

「え、や、じゃあ地図でも描きましようか？」

なるべく一緒に居たくない俺はなんとかその道を避けようとした。

「えー、地図苦手。つか、嫌い。」

「なっ…。」

確かに俺も嫌いだけど…。

読めないし。

「えっと、えっとじゃあ…。」

他にする術もわからずあたふたしてしまう。

「ね？そーゆーわけだからよろしく！」

そう言っつて本城先生は教務室へ。

「ちよっ…。はあー…。」

仕方なく俺はそこで長々と本城先生を待つ破目になってしまったのだった。

「潤君お待たせー。」

あれからたつぷりと2時間も待たされた。

なにもすることが無くて仕方なく宿題をしていた俺はその声に顔を上げた。

「ごめんねー、じゃ、行く?」

そう言つて本城先生は俺に手を差し出した。

「…繋ぎませんよ。」

「えー、残念。」

意外にも素直に手を引つ込めた。

「行きますよ。」

「はい。」

嬉しそうに本城先生が答えた。

そうして俺達は暗くなった道を歩き出した。

マンションへと向かいながら俺達はいろいろな話をした。

「本城先生と理垢さんっていくつの時に会ったんですか？」

「んーと確か理垢が5歳で俺が7歳？だったかな？」

「理垢さんって綺麗な顔してるから小さいころもやっぱり可愛かったですか？」

「…可愛い…。うん、可愛かったよ。だけど最初はもう最悪。」

「最悪？」

「ほら、やっぱり親に捨てられたわけだから。」

「あ…。」

親に捨てられた子の内で笑って施設に来られるのは少ないのだろう。

「しかもりっくんの場合は特別だね。他のどの子よりもかわいそうな子なんだよ、りっくんは。」

「そうですか…。」

何が特別なのか、まったく検討もつかなかったけど、これ以上はなんだか聞けない気がした。

「ところでさ、潤君！今度俺と二人で。」

「あ、ここですここ！着きましたよ！」

なにやら怪しげなことを言い出そうとした本城先生の言葉を遮り、俺はマンションを指差した。

「…ずいぶんいいとこ住んでんだね。」

話を遮られて不服なのか、それとも皮肉なのか、本城先生がぼそりとはき捨てた。

そうして俺達は中へと入っていった。

いつものように居間でコーヒーを啜っていると、潤が帰ってきた。

その横には宏兄の姿も。

「ただいま。」

「お邪魔します。」

「あつれえ？宏人先生じゃん！なんでなんで？」

先に帰宅していた徹斗が目を輝かせる。

宏兄は現在、徹斗の所属しているサッカー部の顧問を任されているため、徹斗と仲がいいらしい。

徹斗曰く、

「宏人先生つてばサッカー上手いしイケメンでかつこいいし、それになんてつたつて優しいし、超やっべえんだつて！あー俺もあんなになりてえなあー！」

だそうだ。

「よー徹斗君。」

「なあなあ宏人先生、なんで家に来たの？」

「んー？りつくと約束してたから。」

「りつくんつて理垢か？え、2人とも知り合いだったのかよ？」

「知り合いなんて生ぬるいもんじゃないんだよー？もっと深いかん・け・い。」

意味ありげに宏兄が言う。

別に言うほど深い関係じゃないと思うけどなあ、僕。

きつと宏兄は徹斗をからかって遊んでいるのだろう。

「っと、あれ？あの子、どこかで見たことあるなあ。」

そう言つて宏兄が指差す先には祐介が。

もちろんその隣には和真の姿もある。

2人は今、こちらに背を向ける格好でテレビ鑑賞中だ。

…いつも思うけど、テレビ見ながら手を繋ぐのってどうなんだろう…。

汗とかかかないのかな。

そんないらん事を僕が考えている間に、隣にいたはずの宏兄が例の2人のもとへ。

「どうもー。お邪魔してまーす。」

社交的なところは相変わらず。

愛想良く挨拶をする宏兄。

「…誰だ？お前。」

そんな宏兄のへらへらした態度を見て、あからさまに不機嫌そうに和真が応える。

それもそのはず。

最近祐介が受験の勉強をしたり、和真は卒業論文を書いたり、ここのところ忙しい。

よって必然的に、2人でいる時間が少なくなってしまっていた。

そして久々に2人でいた所を見ず知らずのやつに邪魔をされて和真の機嫌を損ねてしまったようだ。

そんな和真の態度をもともせず、宏兄が質問に答える。

「俺、潤君と徹斗君の学校で臨時教師やってます。んで、りっくんの兄貴分。」

「ああ。」

納得したように和真が頷いた。

和真にはかつて、僕の過去については話をしていた。

だからきつと宏兄のこともすぐにわかったのだろう。

「ねえ、俺、こっちのかわいい子どっかで見たような気がするんだよなあ。」

その宏兄の視線に自分のことかと気づいた祐介が挨拶。

「僕は潤と徹斗と同じ学校の三年生です。こんにちは、本城先生。」
初対面の人にはとにかく愛想よく、というポリシーにしたがって祐介は飛びきりの笑顔を宏兄に向けた。

「なっ…何？この子…。むっちゃくちゃ可愛いんですけどっ！」

言うが早いか宏兄は祐介をガバツと抱きしめた。

そんなことをすればどうなるか。

この場にいた、1人を除くその他全員は目に見えていた。

「貴様…。俺の祐介になんしてくれてんだ…？」

ゴゴゴゴという言葉が似合うような雰囲気や和真の周りを包む。

「え？あれ？」

周りの雰囲気や先ほどと違うのにやっと気づいた宏兄。

「お前…。」

口を開きかけた和真の声に被せるように宏兄が言う。

「いやーん、可愛い子はみんなの共有財産だよー。」

和真がガチ切れしそうなのに宏兄、気づいてない…。

「ひ、宏兄！僕の部屋行こう!？」

「えー、もうちょっとだけええ。」

そう言っただけでまたぎゅっと祐介を抱きしめる。

「むはー、落ち着く…。」

「お前…、いい加減にしろっ!」

珍しく和真が声を荒げ、宏兄を祐介から剥がす。

「あああ…。」

「あんた理垢に会いに来たんだろっ? さっさと行ったらどうだ?」

「言われなくても行きますよーっ。あ、君、名前は?」

「祐介です。」

祐介は相変わらずにつこりと微笑んだまま答える。

祐介がそんなことするから和真も大変だな…。

「じゃあまたねー祐介君。」

ひらひらと手を振り、宏兄が僕の下へと戻ってきたので、僕たちは部屋へと向かった。

「ねー、祐介君とあのオツカナイ人ってまさかのこーゆー関係？」

そう言って宏兄は右手の小指を立てる。

こーゆー関係とは、恋人のことである。

「う、えつと、それは…。」

言っているものか悪いものか…。

大いに迷った挙句。

「まあ、そういうことになるのかな…?」

「へ、へえー。あの子にあの人かあー。ビジュアル的にはお似合いだけど、性格が…。」

「真反対?」

「そうそう。天使と悪魔並み。」

はははと笑いながら、僕たちはリビングを後にした。

こんな平和な時間が続けばよかった・・・。

？

「なんかすつきりした部屋だね。」

宏兄が僕の部屋を見渡して言う。

僕はあまり部屋に物を置くのが嫌いなので結構寂しい部屋になっている。

「あー、祐介君すっげ可愛かったなあー。」

「もうそれ以上手、出さないでよ？和真に殺されちゃうかもよ。」

「うーん、殺されてもいいくらい祐介君は可愛いけど、諦めようかな。あの人ならやりかねないだろうし。」

あの人とはもちろん和真のことである。

「それに、俺には潤君いるもん。」

聞きたくなかった、この言葉。

「…。宏兄、あのさ、そのことなんだけど。」

「なーに？」

「その…。宏兄って潤のこと…。」

「好きかって？」

「う、うん。」

「好きだよー。だけど実は俺、本命いるから。」

「そ、そうなんだ？」

「安心しなつてー。りっくん、潤君のこと好きなんですよ？とつたりなんかしないよ？多分。」

やっぱり宏兄には全部見透かされていた。

「多分って言葉が引つかかるなあ。」

そう言って僕は笑った。

少しほっとした。

「あー、なんか疲れた…。」

そう言っつて宏兄はごろんと僕のベッドに横になった。

「やっぱり先生は大変？」

「大変だよー。可愛くもない子が寄っつて集ってくるんだもん。精神的にきつい。」

「あはは、酷いなーそれ。」

そうして話をしているうちにもうだいが遅い時間になってしまっていた。

「そろそろ帰るね。」

「うん。気をつけて。」

「また来るよん。」

「うん、待ってる。」

そうして宏兄は帰っていった。

久々に話せてとても楽しかった。

これからずっとそうだと思ってた。

あの時まで。

その翌日。

「潤君、今日も手伝いお願いね？」

「はい…。」

授業終わり、本城先生から俺に声が掛かった。

また今日も実験室で手伝いか…。

面倒臭い。

というより、アイツ、なんか危険な気がする。

先日、家のマンションに来たときに祐介に抱きついたりと、なんだか‘その気’があるような振る舞いから、そうとしか思えなくなっている今日この頃。

そして放課後俺はこの間のように実験室の棚の整理を始めた。

本城先生は俺後ろのほうで書類の整理。

「あっ！」

ついにやってしまった。

手伝いを始めた日からなんとなく予感はしていたんだけど…。

ガシャンと空の容器が床で碎け散る。

その音に本城先生がこつちへ来る。

「潤君大丈夫？」

「じっ、ごめんなさい！」

慌てて俺は床に散った破片を拾う。

案の定、素肌の指から血が滲む。

「痛っ…。」

「大丈夫？」

「痛い…。」

どうして、小さな切り傷でも指先だともものすごく痛いんだろう。

俺は近くにあった水道で血を流す。

けれど、止まる気配がない。

「…そんなんじやだめだよ。」

そう言つて本城先生は俺の手を掴んで自分の口元へ。

そのまま、血の滲む俺の指を舐める。

「せ、先生…！？」

そう言っても本城先生は無視。

恥ずかしいし、それよりもくすぐりたい…。

本城先生が俺の顔を見て、クスツと笑った。

「恥ずかしいの？」

いつの間にやら顔が火照っていた。

「ちっ、違っつ…！くすぐりたいだけだ…っ。」

「くすぐりたいの？」

そう言っただけでまた笑う。

「…もっとくすぐったくなること、してあげようか？」

「…え？」

気づけば俺は本城先生の腕の中に居た。

俺の耳元に吐息がかかる。

耳や首筋に湿ったような、温かいものが這う。

「ちよっ…、先生…。」

抵抗してはみるものの、なぜか力が入らない。

「…やめろって…ば…。」

そこまで言っただけから力が無くなった。

膝から崩れ落ちる。

こんなのは初めての経験だったし、これからどうなるのかも、どうしたらいいのかも、なにもわからない。

不安で怖かったけど、どこか楽しんでいた気がする。

…俺にこんな趣味は無かったはずだけど。

「なんちゃって。はいおしまい。」

そう言っただけで本城先生が俺を立たせた。

「…。」

何も言えないで居る俺を見て本城先生はまた笑う。

「なに？最後までやってほしかった？」

「…んなわけあるかあ！」

やっと正気に戻った俺は叫んだ。

なんだよこいつ。

性格悪すぎだ！

人で遊びやがって…！

恥ずかしすぎるだろうがっ！

「もう帰りますっ…！」

「ちょっとー潤君怒らないでよ？」

「怒ってないですよ！」

振り向きざまに俺は言った。

「いやいや、怒ってるじゃん？」

笑って本城先生が聞く。

「だって…！」

「んー。じゃあこいつすねばいいの？」

「え？うわっ！」

いきなり本城先生が俺をお姫様抱っこして、隣の準備室へと向う。

その部屋にあった大きめのソファ―にドサツと落とされる。

「いってえなっ！なにするんだ…っ!？」

痛みで顔をしかめた目を開ければ上に覆いかぶさるように本城先生が居た。

…俺、かなりやばくね？

「ちよっ…何するんだよ…!？」

「何って、見れば…。」

そこで俺の携帯が鳴った。

「タイミング悪う…。」

そう呟いて本城先生が勝手に俺のポケットから携帯を取り出してディスプレイを見る。

そこに並んでいるであろう文字を見て本城先生が電話に出た。

「もしもし。」

「…あれ？」

電話から漏れ聞こえてきた声は理垢さんのようだった。

「はい、りつくん。俺。」

「宏兄？なんで？潤は？」

「んー？潤君？ここにいるよ。」

「なんで宏兄が？」

「んー、潤君今電話出れないの。」

「出れないって…、なんかあったの？」

「あは、出れなくさせちゃった。俺が。」

「…！？潤に何をした？」

「それは秘密。」

そう言つて本城先生はブツリと電話を切った。

「あーあ、せつかくの楽しい時間がなくなっちゃたよ。ねえ？潤君。」

「…。」

「今日はもう帰つて。りっくんが来る前に。」

その言葉を最後に俺は、疲れとよくわからない麻痺感が残る体を引
きずるように教室を出た。

「潤…潤！」

やっと校門にたどり着いた俺の目を捉えたのは息を切らした理垢さんの姿だった。

「理垢さん…？」

「潤、大丈夫！？なにかされたの？」

「…されてないよ。」

実際、騒ぐようなほどのことはされていない。

けど、俺があんなに感じやすいとは思っていなかった。

男として、不覚。

それに恥ずかしいから口が裂けても言いたくない。

「本当に大丈夫？様子変だよ？」

「大丈夫。」

あんなことされたことなんて言いたくない俺は強がりと言った。

「潤…。」

そう言っつて理垢さんが俺を抱きしめた。

「っ！やめて…！」

思わず俺はそう口走っていた。

理垢さんは少し驚いたような表情を浮かべ、俺を離れた。

「潤？」

「もうやだ…。触らないで…。」

わかってる。

あいつと理垢さんは違っつて…。

だけど…！

俺は酷く冷徹なことを言ってしまった。

俺のことを心配してくれてるのに、こんなことを言ってしまうなんて。

後悔しても、もう遅い。

「…帰ろうか…。」

理垢さんそう呟いて歩き出した。

俺もその後をとぼとぼとついて行った。

あんなに近かった理垢さんの背中が、急に遠くに感じられた。

？

「触らないで…。」

潤の震える、その言葉が僕を貫いた。

そして何が起こったのか察した。

「宏兄…。」

僕の兄貴分であるあの人と恋敵のような微妙な関係のあの人。

どうしたら…。

方法は1つしかない。

宏兄に聞くしか…。

そう決めた僕は携帯で宏兄に電話をかける。

「はい俺。」

「宏兄…！潤になにしたの！？」

挨拶なしに僕は問い詰めた。

「あつはは。怒らないですよ。なにもしてないって。」

「そんなわけないでしょ。潤の…様子がおかしいもん。」

「ふーん？」

「ふーんって…。」

「だって俺そんなに酷いことしてないもん。」

「宏兄今日家来て。話聞かせて。」

「えー、今日はお仕事が沢山…。」

「じゃ、待つてるからね！」

そう言い残しりっくんは問答無用で電話を切った。

「ふふっ、可愛い奴。」

そう呟いて俺は仕事へと戻った。

「あ、やっと仕事終わった。」

現在PM:8:00。

すっかり遅くなってしまった。

正直りっくんに話に行くのは面倒くさいが…。

「しかたねーか…。行こう。」

そう言っつて俺は足を進めた。

少し歩くと彼らの住むマンションに着いた。

インターフォンを鳴らし、待つ。

すぐに取りつくんが出た。

「着いたよ。開けてー。」

インターフォンの向こう側にいるりつくんにそう呼びかける。

無言のままりつくんはボタンを押したようだ。

がしゃんと鍵が開く。

「いつからあんな子になっちゃったんだろーね？ククッ。」

そう呟いて俺は中へと入っていった。

「宏兄。こつち。」

中へ入っていくとりつくんが待っていた。

そうして2階のリビングではなく上の部屋へと俺を誘う。

「えー俺祐介くんに会いたい。」

そう言っているのにりつくくんは無言で俺の腕を掴んで引っ張っていった。

部屋に入ってりつくくんが開口一番に入った。

「でっ。」

「でっ？って…まあまあそんな怖い顔しなさんなって！」

そんな俺の言葉にりつくくんが少し表情を和らげる。

怖い顔なのは変わってないけど。

「…で、なにしたの？」

「その前に！今まで言えなかったけど、今はりつくんに聞いてほしい。俺が施設に入ることになった理由。」

「どうしたの、急に。」

「いいからいいから。聞いてくれるでしょ？」

僕はうなずいた。

「理由…ね…。」

確かに今までちらとも気にならなかった訳ではなかった。

「だけどやっぱり難しい事情があるんだろうと子供心ながらに理解していた。」

「…俺が施設に入ったのは5・6歳の時だったかな。施設に入るまで俺は親父と二人で住んでいた。母親は知らない。親父は表面は良いお父さんって風に世間では見られてた。だけど本当は違った。親父には稚児趣味みたいなのがあってさ…。」

そこで宏兄は言葉を切った。

「まさか…。」

「うん。その相手は俺だった。」

「うそ…。」

「ほんとほんと。気持ち悪いよね。だけど、俺はまだ小さかったからなにもわからなかった。それが普通だと思ってた。だから男しか

好きになれなくなっちゃった。」

「…。」

宏兄の衝撃発言に僕はなんと返していいのかわからなかった。

でも僕にはなんとなくわかるよ…。

幼い頃の僕は4歳くらいまでどこにでもありふれた普通の生活を送っていたと思う。

ただ僕が施設に入ることになった一因となった事件が起こったのはちょうどこの頃だったと思う。

その頃の父さんと母さんはなんだかぎくしゃくしていた。

子供の僕にはどうしてか何にもわからなかった。

今思えばたぶん父親の金銭関係と母親の不倫とかだったのだろう。

だから父さんはほとんど家に居なかったし母親は少しイライラして家の中で僕と過ごしていた。

「お母さん、見てみてー。」

僕は幼稚園で描いた絵を得意げに、台所で調理していた母親に見せた。

「ん？理垢が描いたの？偉いねえ。」

そう言っつて母親は僕の頭をくしゃっと撫でてくれた。

母親はイライラしていても僕には努めて優しくしてくれていた。

その優しさが僕には嬉しかった。

愛してくれていると思っつた。

しかし僕が差し出した絵を見た母親の表情が強張つた。

そんなことには気づかず僕は喋り続けた。

「これがねー、お母さんでこっちがお父さんだよー。」

その絵の2人は今の生活と全く異質な絵だった。

「り…く…。あなた…！」

そう言った母さんの表情が豹変した。

きつと僕の描いた絵で今まで溜め込んできた思いが爆発してしまっただろう。

「あなた…なんてことを…！」

そう言って母親は丁度料理に使っていた包丁を掴んだ。

「お、お母さん…？」

違う。

違う…！

こんなのお母さんじゃない。

怖い…！

「あ…、あなたさえ居なければ、あたしだってこの家から出て行けるのに…！」

母さんは泣いていた。

まるで怒りと愛情が戦っているようだった。

だけど結果的には怒りが勝ってしまった…。

気づいたら僕の腹には包丁。

痛いとは感じなかった。

母親に捨てられた。

それだけだった。

意識が遠のく…。

「…くん。りっくん。…理垢！」

ぱんつと手をあわせる音で僕は我に返った。

「あ…ごめん。宏兄。」

そう言っつて僕は傷をそつと触つた。

そんな僕の動作を宏兄は見逃す訳もなく。

「りっくんあの時のこと思い出してたんでしょ？」

宏兄は僕のある出来事を昔から知っていた。

「まあ…ね。」

「ねーちよつと見せて？」

「えーなんで。」

そう言いながらも僕は服を捲つた。

「あーあ、やっぱり、傷痕残っちゃつたんだね…。」

そう言っつて宏兄が僕の腹にある傷をそつとなぞる。

「結構深く入つたみたいだつたし…。」

刺された後は母親の不倫相手のツテを使って医者に秘密で見てもらつた。

だから母親にやられたということは公にはなつていないし、言つつもりもない。

「お互い大変だよね…。」

宏兄がしみじみと言う。

そう、僕たちは似ているのだ。

「ねー、りつくん？もう一人で居るは嫌でしょ？」

そう言って宏兄は僕をゆっくりとベッドに押し倒した。

キスされる。

僕は抵抗できなかった。

いや…しなかったんだと思う。

似たような境遇を通過してきた宏兄と居ると安心するんだと実感した。

僕の耳元で宏兄が囁く。

「覚えてる？本命居るって言ったの。」

「でも誰のこと言ってるの…？」

「わかってるでしょー？」

わかってる。

というか今わかった。

僕か。

「理垢…。俺と一緒に…。」

「りつくー！！宏人せんっせー！！！！」

蹴破ったかと思うほど強く、ぱんっと勢いよく部屋のドアが開いた。

この馬鹿声は…徹斗…。

生憎部屋の中は薄暗いから徹斗は僕たちがどうなっているのかはわかっていないみたい。

「…はあ…。」

そう息を吐いて宏兄が僕の上から降りてドアへ向かう。

「馬鹿。なにしに来たのよ？」

「ご飯できたから呼びに来たのに…。ばかって…！なんでだよー！」
ぎゃーつと騒ぎ出す徹斗。

そんな騒ぎに気づいたのだろう、大祐が現れたようだ。

「あーはいはい。すいませんねー先生、この馬鹿がお邪魔したみたいで！」

「ちょ、大祐離せよっ！」

「行くぞ馬鹿。」

「ばかって言うなー！そしてご飯　！」

ばたんとドアが閉まる。

再び部屋の中が静かになった。

「もーなんなのあの子は…。」

宏兄がぼやく。

そして動かないままだった僕のベッドへ来る。

「理垢…。そーゆー訳だから…。考えといて？」

またふざけているのかと思ったけど、宏兄は真剣な話をするときはずっと「りっくん」ではなく「理垢」って呼ぶのを思い出した。

宏兄は本気だ…。

僕は…どうなんだろ。

？

「ゆーすっけくーんっ！」

今回も言うのが早いか宏兄は後ろから祐介に抱きついた。

こーゆーのは先手必勝だと、いつだったか宏兄が言っていた気がする…。

「え？っうわ！」

「はあ〜。祐介君可愛い…。こーしてると疲れが取れるっ！」

「勝手にほざけ。」

そう言って和真は宏兄をべりべりと祐介からはがした。

「あああ…。」

「はいーいご飯ですよー。今日は俺ら特製のカレーだ！」

カレーの乗った皿を運びながら大祐が言う。

「へー大祐と徹斗作ったの？めずらしいねえ。」
と僕。

「はいはい食って食って！美味えから！」

押し売りのような勢いで徹斗が皿を突き出す。

よっぽど自信があるようだ。

「いただきます。」

そうして今日は7人で楽しく夕飯を食べた。

隣に宏兄がいるだけで新鮮だった。

「ごちそうさま。」

大祐と徹斗が作ったという夕食はまずまずの味だった。

でもこんなこといったら徹斗が煩いだろっから何も言わないでおい
た。

「うつしやー！宏人先生遊ぼうぜー！」

「はい？徹斗君、君夕飯の片付けは？」

「…片付け…。大祐よろしくっ！」

そう言っつて逃がしてくれるような大祐ではない。

逃げようとする徹斗を羽交い絞めにする。

「お前っ、一人だけ逃げんなよ！？料理つてのは片付けもしなきゃ
終わんねえんだぞっ！」

「なんだよっ、せっかく宏人先生来てんのにいいい！」

そう言っつて徹斗は不機嫌な顔をした。

「あっは、片付け頑張っつてく徹斗君。それに俺、今日は理垢と遊ぶ
からー。邪魔しないでよ？」

「え！？理垢ずっけーぞー！」

「はいはい。早く片付けしちゃってね？」

適当にあしらうのが徹斗には丁度いい。

「宏兄、部屋行く？」

「おう。」

そうして僕たちは再び部屋へと戻った。

「なんだよ…つまんねえ！」

手にスポンジを握らされてもなかなか仕事に取り掛からない徹に大祐が一喝。

「うるさい。いいから早く片付けすつぞ。」

「潤 手伝ってー…。」

そう言われ、暇を持て余していた俺は手伝いをする。

そして俺たち3人は皿洗いやテーブル拭きをしたりした。

「なー最近理垢と宏人先生むっちゃ仲いいよなー。」

不服そうに徹が話題をふる。

「いいじゃねーかよ。それにちっさい頃から一緒にいれば仲良いのあたりまえだろ？」

「そうだけどー…。」

そうは言っても徹の不機嫌な顔は直らない。

そんな徹を見かねてか大祐が手を止め徹を見据える。

「…なに？俺だけじゃ不満なわけ？」

「…は！？大祐何言ってるんだ…？」

「冗談だし。」

「お前なあ…！」

そんな2人のやりとりを見ていた俺は…。

この二人、すごい仲いいなあー。

なんか微笑ましい。

付き合っちゃえばいいのに…。

…っ！

しっかりしろ！俺！

徹は男であって、大祐も男であって、付き合つとかそーゆーのは…。

ああ、もう訳わからん…。

ここに来てからもう俺の頭の中おかしくなっちゃってるよ…。

「潤、どうかしたか？」

変なことを考えていたせいでフリーズしていた俺の目を心配そうに

大祐が覗き込む。

「な、なっなんでもない！」

「そんなに慌てなくても…。」

「ごめん！俺ちよっと具合悪いから寝るわ…。」

本当は具合悪くないけど、頭の中が混乱しはじめてしまったから早く一人になりたかった。

「そか。ゆっくり休めよ？」

「ありがとう。」

そうして俺は自分の部屋へと向かった。

部屋に戻った俺は当然寝れるわけもなく、しかしベッドでぐるぐる

と寝転がっていた。

「はあ…。」

思わずため息をついてしまう。

俺、最近どうしちゃったんだよ…？

「あー！わかんねえ…。」

ベッドでじたばた。

でもそんなことしたって何も変わらない。

好き…愛してる…。

そんなこと男に言われたって変だ。

ここに来たばかりの頃はそうしか思えなかったのに…。

今は、そんな風には思えなくなっている自分が居るのに気づいた。

…っことは俺は理垢さんのこと…。

いやいや！そんなことはない！

いや…ある…のか？

「まじ…まじしたらいいんだよね…」

「宏兄、今日泊まってい…？」

「んー？それは…。」

そこまで言って宏兄は声をぐつと小さくして僕の耳元で続けた。

「いい返事を貰えてたってことでいいのかな。」

そう言っただけ俺はまたも理垢をベッドへ押し倒した。

そして唇を重ねる。

「ん…。」

「理垢…、あんま厭らしい声出さないでよ?。」

「だっだっだっ…!!…ああっ…。」

赤い顔して見上げてくる理垢が可愛くて。

最後まで話も聞いていられず俺は舌をねじ込んだ。

「んっ…はあっ…。」

息が苦しい。

だけど止められない…。

「理垢…。」

「宏兄…。」

「宏兄じゃなくて名前で呼んで？」

「宏…人…。」

「ふふつ。可愛いよ…理垢。」

「可愛いくなんか…ない…。…っあ…。」

「もうだめ、耐えらんない…。」

そう言っつて俺は服を脱ぐ。

「宏兄…。」

「名前。」

「宏人…。」

「やっつてもいいだろ？理垢…。」

「…うん…。」

「やっぱりお前、可愛いよ…。理垢…。」

「…あっ…ん…。」

甘い囁きと喘ぐ声が部屋に静かに響いた。

「んあー、あつちい…。」

そう呟いて俺は上半身裸でベランダへと出た。

久々の運動は少しきつかった。

「俺ってば年取ったのかなあ…。」

外は秋の肌寒いような心地良いような風が吹いていて、汗ばんだ体から熱を奪っていった。

…にしても理垢、お前は、俺の…。

「あれ？本城先生…？なにやってんですか？こんなところで。」

空を見つめ物思いにふけっついていて気づかなかった。

隣の部屋なのだろう、潤君がベランダに出てきていた。

「んー？別に…。」

まさか理垢の部屋であんなことしてました、なんて言えないしなあ。

別に俺は言ってもいいんだけどね。

だけど子どもには刺激が強いだろっつから黙っておこっつ。

「理垢さんは？」

「んー？寝てるんじゃない？」

「…先生…、あの…俺…。」

思いつめたような、そんな表情で潤君が話し出す。

「なによ？」

普段は相談事なんて面倒くさいことは御免の俺だけど、潤君みたいな美人の話は聞く。

「俺…ここに引っ越してきたばかりのときに理垢さんに…なんというか、その…」

言いづらそうな潤君の赤らんだ顔にぴんと来た。

「なに？好きだとか言われたの？」

「…はい…。」

当たり前。

「へえー、それで？」

「俺にはそーゆー趣味無かったです。だけどそのときからその言葉が頭から離れなくて…。どうしたらいいのかわからなくて…。」

「ふーん…。今は？」

「え？」

「今は理垢のことどー思ってたの？」

「どっつて……す、好き……？んー……」

やっぱり、俺……。

理垢さんのこと、どっ思ってるんだ……？

さっき散々考えてたのに未だに答えは出ない。

だけど……。

本城先生でも誰でもいい。

誰かに相談したかった。

「……あのね、中途半端な気持ちで人のこと好きだとか愛してるだとか言っちゃだめなんだよ？」

「中途半端……。」

「そー、本当に愛してなきゃ相手のことは幸せにしてはあげられないんだよ……」

「そうですね……。」

「だからあ理垢を幸せにできるのは俺だけ。」

「…え…？」

「聞こえなかった？」

「聞こえましたけど…。どーゆーことですか…？」

「どーっていわれても…そーゆーこと。」

「…。」

「ごめんね？でもこれは事実だからさ。」

そう言っつて俺は理垢の部屋へ戻った。

ベランダへのドアに鍵を掛けカーテンを閉めた。

「理垢を幸せにできるのは俺だけ。」

…どういふことだ…？

本城先生は俺のこと…。

いや、違ふのは有難いけど…。

じゃあ理垢さんは？

もう、俺のこと待っていられなくなったのかな…。

ここに引っ越してきたばかりのころの俺だったらこの話は有難い話のはずだった。

だけど今は…。

「違ふ…。」

嫌だ…。

理垢さんを離したくない…。

？

「ん…。」

そう呻いて理垢が寝返りをうつ。

そんな姿さえも愛しくて…。

「理垢…。」

不意に俺は、小さく名前を呼んでいた。

そうして俺は理垢の綺麗な髪をゆっくりと撫でた。

撫でながら理垢と再会してから今に至るまでのことを思い返した。

理垢と再会出来るとは思ってなかったし、もうこれからずっと会うことは無いと決め付けていた。

だけど偶然なのか必然なのか、俺らは再び出会った。

何年も会っていなかったけれど、理垢だとわかった。

それはきっと、心のどこかで会いたいと思っていたというのもあるのだろう。

そして再会を果たした俺達は以前のように楽しく過ごしていた。

だけど俺はそれだけじゃ、心が満たされなかった…。

理垢を俺だけのものにしたかった。

そして今、理垢は俺の手の中に落ちた。

もう理垢は俺のもの…。

そう思った矢先に、問題児が現れた。

潤君が理垢のことが頭から離れないなんて言い出した。

だけど、俺と理垢は子供の頃過ごしてきた境遇が似ているせいもあってお互いのことをとても大事に思ってる。

だから問題ない。

そう思うことにした…。

「…ん…？宏兄…？」

目覚めた理垢が眠そうにトロンとした目で俺を見上げてくる。

こみ上げてくる衝動を無理やり封じ込めて俺はなんとか自分を抑えた。

「…起きちゃった？」

「…んん。」

しばしの沈黙が俺等を包む。

「理垢…俺のこと好き？」

「え…？」

「好き？俺のこと。」

「……………うん。」

理垢の返答にすこし間が開いた。

その意味はわかっている。

「…潤君のこと考えたでしょ？今。」

「なんで…。」

「知ってるかって？さっき潤君に言われたんだよ、理垢のこと好きかもって。」

「…。」

理垢は何も言わず俺に背を向け布団に顔を埋めてしまった。

「…理垢？聞いてんの？」

「…。」

もう返事をしないのかと思いはじめたところに理垢がぽつりと言葉を発した。

「…もう…、振り向いてもらえない人のこと追いかけたくない…。」

「そう…。」

「僕は本当に好きになった人のことはずっと待って居たかった。だけれどもう半年も経っちゃった…。それに1人はもう嫌なんだ…。」

「うん。」

「宏兄…。宏兄は僕と一緒に居てくれるよね？これからもずっと…。」

「ああ。」

「よかった…。」

そう言って理垢は再び眠りに就いた。

その安らかな顔を俺はしばしの間見つめていた。

「おやすみ。帰るね…。」

俺はそう言っつて理垢の額にキスをして部屋を後にした。

頭の片隅で誰かの声が聞こえる。

それと共にごんごんごんとしつこくドアを叩く音も聞こえる。

眠たい頭を起こしてみれば。

「おいっ！りーくー。いつまで寝てんだよ！？朝だぞ朝っ！！」

ドアの向こうで徹斗の音がする。

目を閉じたまま俺は応える。

「はいはい…。起きたよ…。」

「もう7時だぞっ！遅刻すんなよっ？」

「はいはい。」

徹斗が下へ降りていく音がする。

「ああ…だるいなあ…。」

体が重い。

そして頭の中が混沌としている。

「あれ？宏兄…。」

気づけば宏兄の姿がない。

帰ったのか…。

そんなことを考えながらぼんやりしていると、階段をどしどしと上がってくる音がする。

こんな歩き方するのは徹斗が大祐しか居ない…。

「りーくー！」

またも徹斗だった。

先ほどよりもかなり大声で五月蠅い。

「なに？」

と返事をすれば、徹斗の馬鹿声が返ってくる。

「なに？じゃねえよ！早くしろってのっ！」

「はいはいはい。というかなんでそんなに催促すんの…。」

「俺今日皿洗いなんだよっ！じゃんけんで負けてなっ！…！」

「あっはは、そういうことか。」

「このところ徹斗は家事をやられることが多くなってきていた。

それで今日の朝食の片付けは徹斗がすることになったらしい。

というのも、今日はじゃんけんで負けた徹斗の自業自得だが…。

「だから早くしろっての!」

「今行くよ。」

その返事を聞き徹斗はまた戻っていった。

その足音と階下から小さく聞こえてくる話し声を聞きながら僕は考えていた。

やっぱりここは好きだ。

だけど…。

もうここにはいられないのかもしれない…。

仕事帰りに電話が鳴った。

誰からなのかなんともなくわかっていた気がした。

「宏兄…。」

「理垢。話があるんだけど今日俺の家に来れない？」

「僕も話したいことある…。うん。行くよ。」

「じゃあ学校寄ってくれない？一緒に行くぞ。」

「わかった。校門で待ってるね。」

そう言って電話を切った。

宏兄の話と僕の話とはおそらく一致しているだろう。

もう今までのような生活は送れないということ。

「あれ？理垢？」

校門で宏兄を待っていると、偶然にも祐介が出てきた。

「あ。祐介か。こんな時間まで勉強？」

「うん。もうすぐ受験だしねえ。」

「そうか、もうそんな季節かあ。」

「理垢は？ここでなにしてるの？」

「宏兄待ってんの。」

「なんで？」

「今日宏兄のとこ行ってくる。話があるんだ。」

「そう。。。」

そう言っつて祐介がじつとこっちを見る。

「なに？」

「理垢さ、潤のことどうするつもり？」

「…え？」

「聞いたの。潤にね。」

「ああ。」

祐介は潤に、昨日宏兄も言っつてたことを聞いていたらしい。

「潤、可哀想だよ…。こんなことになっつちゃうなら最初からその気にさせなければよかったのに…。」

「…。」

「もう、理垢のその気持ちは変わらない？」

「…変わらない…。僕には宏兄しか居ないんだ…。」

「そっか…。」

そう言っつて祐介は俯いてしまった。

他人のためにここまで考えてくれる祐介はきっと本当に優しい子なんだろう。

和真は幸せ者だな…。

そんなことを思いながら僕は祐介の頭いぼんと軽く手を置いて言った。

「ごめんね…。」

「いいの…。仕方ないよね…。だけど潤には、…潤にはちゃんと話さないとだめだよ？」

そう言っつて祐介が顔をあげる。

その目には不安と悲しみが溢れていた。

「わかってるよ。」

「うん…じゃ。」

そう言って祐介は足早に消えていった。

?

「りーくつ。」

愛しい人の声と共に僕はその人の優しい腕に包まれた。

「宏兄…。」

そう言った僕の顔はきつと喜びで満ちていたと思う。

「行こっか。」

そう言って宏兄が手を差し出す。

僕はその手を握った。

校門を出て背を向けた僕は、悲しみでいっぱいだった。

理垢は本当に潤が好きだった。

だけど潤は振り向いてくれなかった。

潤は理垢を好きになり始めた。

だけど理垢はもう違う方向へと進んでいる。

お互い好きなのに。

ほんの少しの時間の差で、

すれ違っ……。

自室で空に浮かぶ月を見上た俺の頭の中は掻き乱れていた。

「はぁ……。俺、どうしたらいいんだよ……。」

そう呟いて俺は頭を抱えた。

皆と出会い、理垢さんに告白されてから早半年。

まさかこんなことで悩むことになるだなんて思いもしなかった……。

俺は理垢さんが好き。

好きだよ……。

だけど、本城先生……。

あなたには勝てないんだ……。

どんなに頑張っても……。

「着いた着いた。はい、理垢。入って入って。」

笑顔の宏兄が僕を家へと招き入れる。

そんな宏兄の笑顔が僕を笑顔にする。

ずっと幸せ。

ずっとこの幸せが続けばいい・・・。

「ただいま……。」

なんとなく元気がでない僕は小さな声で呟いた。

扉を開け、居間へ入る。

今は理垢が居ないし、大祐はサークルで泊まりだし、そうになると必然的に徹斗は部屋へ籠もっているし。

そうすると残りの皆も各々の部屋へ行く。

だから居間は誰も居ないだろうと思った。

だけど今日は違った。

「おかえり。祐介。」

学校から帰宅した僕を和が迎えてくれた。

偶然だろうとは思っけど。

居間は電気が薄暗く点っていた。

ドアの前で突っ立ったままの僕をみて和が首を傾げる。

「……祐介？どうした。」

いつもと様子が違うと感じたのだろう、和が僕の頭を優しくなでてくれた。

そんな温かさが僕を安心させたのか、知らず知らずのうちに僕は泣いていたようだ。

「祐介……。なんで泣いてるんだ……。？」

そう言って和が僕を引き寄せる。

「祐……。話して？」

和の低い優しい声が耳元で聞こえる。

僕は耐え切れなくて和に抱きついた。

そのまま顔を和の胸に埋める。

そんな僕を和が包み込んでくれる。

・・・温かい。

安心する・・・。

「う・・・っあのね・・・。潤と理垢のことっ・・・。」

涙が止まらない・・・。

「潤と理垢？・・・2人がどうかしたのか？」

そうか・・・。和はこのことを知らないんだ・・・。

「理垢は・・・前から潤のことがっ・・・好きだったのに・・・だけ
どっ、だけど、・・・。」

頭がごちゃごちゃして上手く伝わらない・・・。

「ゆっくりでいいよ・・・。」

僕の背中に回した和の腕がぎゅっと僕を抱き締める。

「潤だつて……っ理垢のこと好きなのにつ……なんで……
なんですれ違っちゃうの……っう……」

なんとか言い終えた僕は涙を流し続けた。

「祐……。……そうか……そんなことあつたんだな……。」

僕の頭を撫でながら和が呟く。

「祐……、話はわかったよ……。」

「うう……。どーしたらっ……いいの……。」

そう言つて僕はずると崩れ落ちた。

そんな僕に合わせて和も床に座る。

「祐……。どうしようもないよ……それは。」

「なんで……?」

「……友達として。そーゆーのは辛いけど……。けど、俺達が
どうにかできることじゃない。」

「どーっ……。」

「俺達がとちかく言ったって、お互いの気持ちが届かなきゃ、駄目なんだよ。恋愛ってのは……。」

「だけど……っ。」

「祐は優しいね……。そーゆーとこ、好き。」

そう言って和が僕にキスする。

普通のじゃなくて、ディープ。

「っん……。っはぁ……。っ。」

薄暗い部屋に、2人の荒い息遣いが静かに響いた。

わざといつもより少し長めのキスを祐介にした。

泣いていた祐介にそんなことをしたので、祐介は簡単に眠りの中へと落ちていった。

まあ、それを狙っていたわけだけど。

「おやすみ……。」

そう呟いて俺は愛しい祐介の髪をなでた。

先ほどの祐介の言葉からわかった出来事。

……正直、少し驚いたし、悲しかった。

だけど、俺達が何かしてあげたり、言うべきではないと思う。

大事なのはお互いの心だけ。

ハッピーエンドで終わるのか、バッドエンドで終わるのか。

それは俺にはわからない。

だけど、ただ1つ言えること。

本当に大切な人を失ったと気づいたときには、もう手遅れなんだよ。

？

それは突然のことだった。

「今までありがとうね。本当、皆に会えてよかったよ。」

そう言って理垢さんが出て行くこととする。

「ちょ、ちょっと待ってって理垢！なんだよ、どーゆーことだったの
！！」

何も事情を知らない徹が驚いたように言う。

「ごめん徹斗、わけがわからないと思うけど、何も聞かないで行か
せてくれない？」

「んなことさせるか！っだいたい…。」

「徹斗。」

大祐が徹を遮り黙らせる。

「理垢、潤にちゃんと話したの？」

祐介が静かに問いかける。

理垢さんは何も答えない。

それもそのはず、言いくいよな…。

「潤…。」

気まずそうに理垢さんが口を開く。

「別に、俺は気にしてない…。」

俺は皆に背を向けたまま答えた。

よかった、声、震えてない。

「ごめん。潤。でも俺は潤のことが好きだったよ。本当に。」

もういい。

何も言わないで…。

「皆、ほんと迷惑かけてごめん。…和真、皆のこと頼んだよ…。」

「ああ。…元気だな。」

「ん、ありがとう。」

その言葉を最後に、理垢さんは出て行った。

後ろで扉の閉まる音が聞こえる。

居間に気まずい沈黙が流れる。

「っさてとっ、俺ちょっと宿題片付けてくる！」

俺は無理やり明るい調子で沈黙を破った。

「潤…。」

祐介が不安そうな目を向けてくる。

「あ、そだ、俺今日の夕飯カレーがいいな、あはは。」

そうやって俺は居間を出た。

1人になりたかった。

1人で、泣きたかった。

泣けば、少しでもこの辛さから開放されると信じて…。

居間は未だに重苦しい空気が漂っていた。

「なー大祐、どーゆーことかはなんとなくわかったけどさ、潤大
丈夫かな…。」

ふいに徹斗が俺に言う。

「どーだろな…。」

多分大丈夫じゃないだろう。

「大丈夫じゃないと思うけど…。ね、和真？」

祐介が俺の言わんとしていることを代弁する。

「まあ、俺たちが支えてやらなきゃな。」

和真が頷く。

そつだな、と俺も相槌をうった。

自分の部屋へと入ろうとした俺は、ふいに隣の理垢さんの部屋であつた部屋へと足を向けた。

なんでもかかわからない。

ただ、体が自然と動いていた。

ドアを開ける。

理垢さんの部屋に以前来たのは、宿題を手伝ってもらったとき以来。

もともとあまり物がたくさんある部屋じゃなかったけど、今はほとんど何も無い。

机とベッドと空の本棚だけ。

ああ、本当にいなくなってしまうんだ。

そう痛感した。

俺はまた、大切な人を失ってしまったんだ…。

？

季節は巡って、再び春。

祐介は高校を卒業。

和真さんは大学を卒業。

そして俺は高校2年生となったわけで。

みんな、また一つ年をとった。

「潤ちゃん。」

「あ、棗！」

新学期第一声はこいつ。

去年から俺の友達になってくれた梁川棗^{やなかねつめ}。

容姿端麗、頭脳明晰、運動能力万能。

同じ男として羨ましい限りだ。

ただ一つ、自分の興味の無いことに対しては究極の面倒臭がりということを除いては…。

そしていつも、身体のどこかしらに傷がある。

理由は知らない。

「なあ、クラス替えの見たか？」

「ん、まだけど…。」

「聞いて驚け！そして喜べ！俺等また同じクラスだったぜ！」

「まじ？やったー。」

「おう！ってなわけでよろしくな。」

「ん、よろしく。」

「あ、そーいえばさ…。」

そうして俺達は他愛もない会話をしながら新しい教室へと向った。

学校に來れば、棗も居るから心の重みが軽減する。

ほんの一時でも辛さから抜け出せる。

それが今の俺にとっての安らぎだった。

教室へ入り、雑談をしつつ先生を待つ。

しばらく経つと、教室のドアを開ける音がした。

棗とくだらない話をしていた俺は視線をドアへと動かした。

そこにいる人物を見て俺は愕然とした。

「はい、皆よろしくねー。」

そう気だるそうな声を出しながら教室へ入ってきたのは…。

なんと、あの本城宏人先生…。

どうやら本教師になったようで、去年に引き続き俺のクラス担任になっただけらしい。

もう…最悪だ…。

俺は頭を抱え込まずには居られなかった…。

そんな俺にも関わらずSHRは進んでいく。

専ら俺は話を聞くどころではなかったのだが…。

「…つとまあそーゆーことだからよろしくネー。」

そう言つて本城先生が教室を出て行った。

そうして再び教室は騒がしくなる。

「…ちゃん…。潤ちゃん!…潤!」

何者かが俺の頬をぐにと掴む。

「…っ痛^てえっ!」

俺はそいつの手を掴んで邪険に振り払う。

「潤ちゃんひどい。」

そう言っつて俺に掴まれた手首を摩りながら、にっつと笑う棗の姿が俺の目に映った。

「あ…。棗か。悪い…。」

「んん、いいよ。潤ちゃんだし。…で、潤ちゃんどーしたの？なんかあつた？」

棗が心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「別に、なんにもない…。」

俺はその目を真っ直ぐに見つめ返すことが出来ず目を逸らして答えた。

「嘘だね。潤ちゃんの嘘は俺には通じないよ？」

そう言っつて棗はずいっと顔を俺に近づける。

「だっ、だから、なんでもないっつて。」

「俺の目え見て言っつて？」

近…。

そう思いつつ俺は顔を背けたままでいた。

今目なんて合わせたら棗になにもかも話してしまいたくなるかもしれない。

そんなこと、棗にはできない…。

そんなことを悶々と考えていた俺の耳に不意に息がかかる。

「っ!？な、なにすんだ棗!？」

思わず棗のほうを見ればにやっと笑った棗が俺を見ていた。

「なにつて、潤ちゃんがこっち向いてくれないから。」

「…。」

棗には本当に敵わないな…。

「潤ちゃんさー、俺のこともっと信用してよ?」

「ん。ごめん…。このことはちゃんといつか話すから。」

「わかったわかった。だけど無理だけはすんなよ？辛いのは辛いんだから。」

「さんきゅー…。」

「ん。ってかさー、今何の時間かわかってる？」

「え？」

「え？って、やっぱり話聞いてなかったんだ。」

そう言ってくすくすと棗が笑う。

「今は体育大会の話だよ。人の話はちゃんと聞かないとダメですよー？」

棗がふざけた調子で言う。

「き、聞ってる！今はたまたま…。」

「はい、これから体育大会での係りを決めます。まずはじめに…」

学級委員の真面目な声したので一旦俺達は話を止めて席に着いた。

体育大会か…。メンドクせー。

棗はきつと今頃こんなことを考えているのだろつと俺は思った。

そうして放課後、やはり帰宅部の俺は部活に所属している奴等より一足早く帰宅しようとして下駄箱へ向っていた。

ふと顔を教務室へと繋がる廊下へと向ければ。

俺が今2番目に会いたくない、本城先生が教務室彼出てきてこつちに向って歩いて来ていた。

最悪なタイミング…。

あと少しでも早く、教室を出ていれば…。

棗とくだらない話しなんてしなければ良かったと後悔しまくった。

「あ、潤君。」

向こうも俺に気づかないわけもなく、やっぱり話しかけられてしまった。

「…ごーも。」

俺はさっさとこの場を抜け出そうと適当に挨拶して行くとした。

「っとお、ちよっと待ってよ潤君。」

そう言っつて本城先生が俺の腕を掴んで引き止める。

「っ触るな!!」

反射的に俺はその手を払いのける。

「あれま、今日は随分と凶暴だね。」

「…。」

俺は何も言えず、ただただ早くこいつの目の前から消えたかった。

「理垢、元気だよ。」

「…。」

「皆に会いたいなーって言ってたよ。それと…、」

「…っ。…失礼します。」

そう言っつて俺は外へと出た。

目頭が熱い。

なんで…どうして…？

もうあの人のことは忘れることにしたのに。

俺はやっぱりあの人のことを忘れきれないのか？

やっぱり…あの人のことが…まだ好き…なのか？

堪えきれず、涙が頬を伝う。

「っっ。…」

だめだ、こんなところで泣いたら…。

そうはわかっつていても涙は止まるわけもなく。

「潤ちゃん？」

ふいに後ろから稜の声が出た。

俺はこんな姿を見せないようにとじじじと涙を止めようとした。

「潤ちゃん…。」

「な、な…に?」

俺は裏を振り返らず答える。

振り向いたら、泣いていることがバレてしまうから。

「潤ちゃん、泣いてんのか?」

「…泣いてない。」

「泣いてるよな?」

「泣いてなんか…。」

ふと目の前に気配を感じて顔を上げれば裏が居た。

「っ!」

「あは、やっぱり泣いてんじゃない?」

「…。」

見られた。

完全に俺が泣いてたのバレた…。

恥ず…。

「潤ちゃん、とりあえずあっち行こ？こじじゃ皆に見られちゃうよ。」

そうやって棗は俺をあまり人気のない中庭の片隅にあるベンチへと連れて行ってくれた。

そして何も言わず俺の涙を拭ってくれる。

「…うめ…っ。」

「いっよ。」

棗は優しい。

「なあ、潤ちゃんやっぱり様子おかしいよ。俺に言えないようなのかな？」

「…。」

この話をしたら棗に嫌われるかもしれない。

お、男が男を好きだなんて言ったら…。

大抵の人は、距離を置きたくなるだろう…。

「俺は潤ちゃんのこと大好きだし、信じてる。だから俺のこと信じて話してくれない？」

「…俺のこと、嫌いになるかも…。」

「え？」

「こんな話したら棗に嫌われる…。」

「俺が潤ちゃんのこと嫌いになるとでも思ってたのか？」

「そんなのわかんない…。」

俺がそう言つと、棗がふうと息を吐き出した。

「あのなー、潤ちゃん、さっきも言ったけど俺は潤ちゃんのこと大好きなの。だから嫌いになるわけないだろ？」

「…本当かよ。」

「本当だって！俺嘘つかないもん。」

「へえー、それは初耳。」

「…んだよっ！俺は清廉潔白だぞ！」

そう言って棗が笑う。

つられて俺も笑う。

こんな風に笑ったのはあの日以来だったかもしれない。

「ありがとう、棗、なんか元気なたかも。」

「そっかそっか！良かった。」

「ん、この話はいつかするからさ。」

「りょーかい、じゃ、帰ろっか。」

そう言って棗が腰を上げる。

「え？棗部活は？」

「今日は潤ちゃんと帰りたいから帰る。面倒くさいし。」

そう言って棗が歩き出した。

俺は後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1326q/>

俺のBL同居人

2011年5月9日21時41分発行